

初學
獨習
篆書のかき方

特261

262

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6mm
10 11 12 13 14 15

始



特 261
262



何故本書を刊行したか

篆書といふものが世間に餘り通行しない書體であるのに今頃どうして本書の如きものが發行されるのか一般社會人の目から見たら定めし不可思議であらう。今日所謂書道家と名乗つてゐられる専門家であつても篆書までは習はない。或は習つてゐる方もあるが、どちらかといへば少い。であるから社會大衆は篆書といつたところで何の事であるのか其の名さへ知らない位である。そんなに世間と沒交渉の篆書ではあるが、そんな不可思議な古い書體の文字から一年中離脱することの出来ない職業がある。眼前現存する吾々印界人といふものがそれだ、明け暮れるの六ヶしい篆書を印に刻してゆかねばならないのが吾々の天職である。實に不可思議な商賣であり、技術家である然るに一年中離脱することの出來得ない程密接な關係にあるその篆書といふものに對して一向に、いや、深い關心を持たず又は疎な篆書字引一つ持たずに技術を施し且つ商賣をしてゐる者があるといふことも亦不可思議な現象であると謂はねばならない。

所詮印界人は一生篆書から解放されることなしとしたならば十分に研究するがよいではないか、篆書の習字は總て「佳き印」を作る基本となるからである。本書一巻を熟讀熟覽し反覆練習し了せば一々篆書字引に依らずともある程度までは篆書を自得することが出來運用自在となるは明かにして疑ふべき餘地はない。

近ごろ書道の發展興隆につれ篆刻亦流行し印趣味普及され篆刻の方法を教ゆる書物は決して少くない。故に昔日の素人は今日は眞眼の士と進みアマチュアと雖もまた輕視するを許されない時代になつた。

この時に方つて印人印を解せず、亦篆書に堪能ならずとせば其の結果は果して如何、洵に寒心に堪へないものが
ある。

吾曹茲に鑑み泰東書道院常任理事關野香雲先生に請うて篆法の講義を得、楊沂孫先生—清朝光緒年代の人——の
「篆法指南」の一部を藉りて複製し併せて以て本書を作り篆刻印章の根元たる篆書習字の教本となさんとす。
篆刻を教ゆる書は多し、然れども篆刻の基本といふべき篆書を教へし書物は今日まで吾國になし、而して未だ篆
書を知らず況んや篆書を習はずして獨り篆刻のみ能く上達するの理はあり得ない。これ敢へて本書の普及を圖り初
學者の便に供する所以である。

昭和丙子冬日

三圭印社にて

峠江迂人識

篆書の書き方に就て

關野香雲

普通に篆書と申しますと其範囲は中々に廣く時代に依て區別すれば夏。殷。周の篆あり秦。漢の篆あり魏。晋。
唐宋より元。明。清に至るまで色々の流派を生じて居り。又其體に依つて申せば所謂古文と稱するものも篆書の一
部と云うて宜しく。又小篆大篆の區別あり漢時代に於ける絶篆とか模印篆とかの區別もあると云ふ風に本源は一つ
でありましても幾多の變遷あり推移がある。併し其用筆法や書き方に至ては大體に於て現今と著しき變りは無いと
私は信じて居ります。別して草書なるものは古文や篆書の筆法をよく繼承して居ると思はれます。篆は引くなり、
で書を引くことあります。唯其引き方になると是も亦各人の得手々々に依て自ら相違して居りますが大體の運筆
法は餘り變つては居らぬ。つきり共通して動かす可らざるものがあります。

篆書の運筆法として動かす可らざる點は何で有るかと云ふことを簡単にお話し致しませう。大概の場合楷、行、
草の各體に於ては露鋒を用ひて書くことに成つて居る。即ち筆の鋒尖を顯はして書き、其尖を顯はす爲めに側筆と
か偏筆とか云うて銳く角立つやうに書くのであります。之に反して篆書はすべての場合一畫、一點を書くにも藏鋒
を用ふる。即ち筆の鋒尖を字画の中に藏くして角立たぬやうに書くのであります。別な言ひ方をするならば篆書に
は直筆を用ひる譯で、側筆を用ふることを許しません。此點だけを心得て居れば其れ以上は隸書、楷書の書き方で
方、圓、曲、直の線を引いて宜しいのであります。其處で藏鋒の形を作るには如何なる方法を執れば良いかと申せ

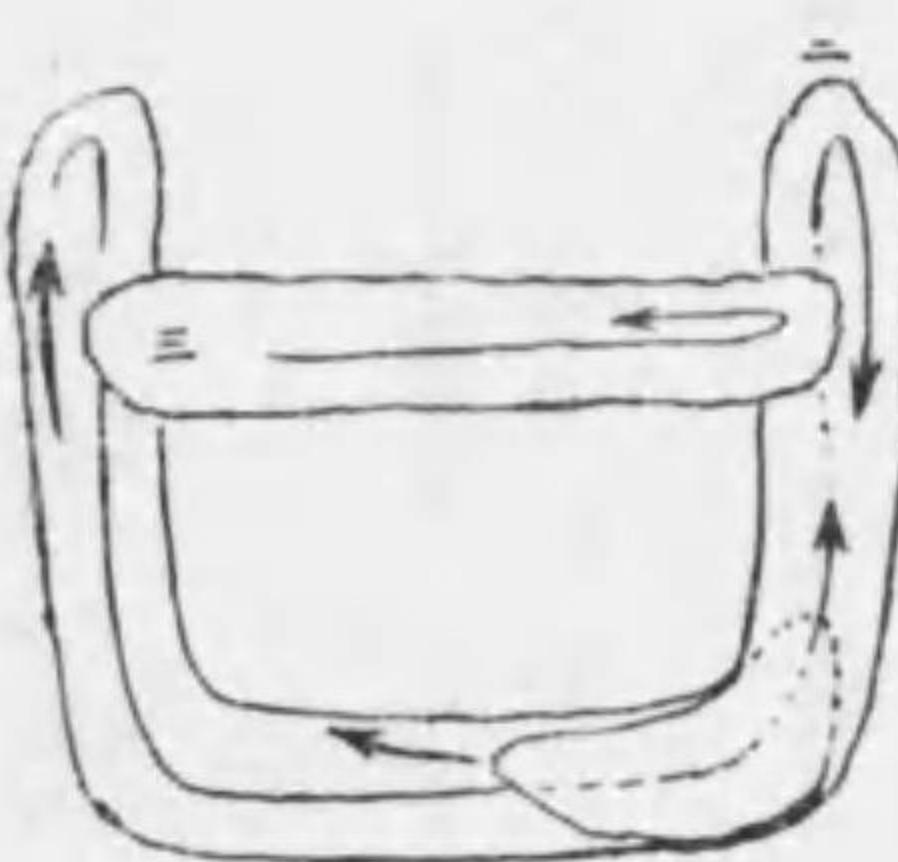
ば筆を反して運ぶのであります。委しく申しますと線の中心(横線でも豎線でも)と思はれる點に一旦軽く筆をすゑて其れから起點に向つて。又軽く線を運びつゝ勢を加へて其起點に打ち込むのです。その起點即ち起筆となりますから其勢に従つて書き下し終點に到り。そこで又中心に向つて終鋒を反復する事であります、是れは豎、横、圓線曲折線如何なる場合でも皆この法に依らねばなりませぬ。是れが王羲之の八筆しく唱道した「無三行而不三反」と云ふ筆法に成るのであります。

此處で筆を反復することに就て一言申添へて置きますが、

起鋒

終鋒

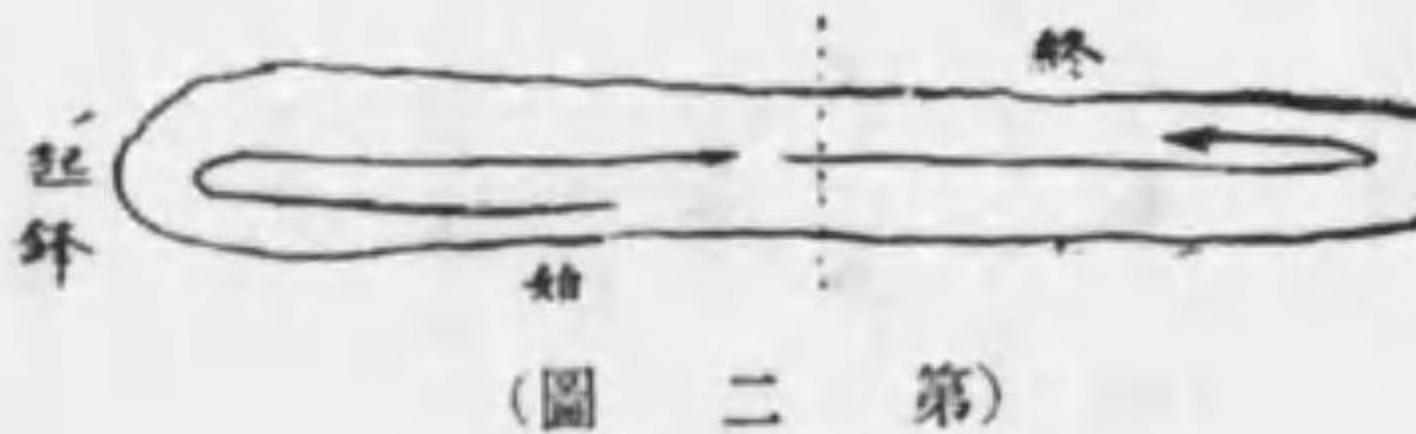
起鋒
終鋒



(圖一) 第一

例へば豎線を引く場合は(第一圖)の如く線の中心の邊から極めて軽く紙面にかきながら目的の部分に打ち込むので。是れを暗線と申すので、又下の方は引き拂はすに筆をもと來し方へ引さ復へす様にするので、固より文字の線の上を掠すると云ふ心持でやつては成りませぬ。横線も同様にて(第二圖)右より目的的部分に打ち込み更に筆を反へして右へ平らに終點まで引き。終點より中頃まで左へ反へすのであります(第三圖)

又口の書方に於ては第三圖の如く一の起點より引き點線の部分は軽く書き二の所に打ち込み元の線上に復す。此場合の一の



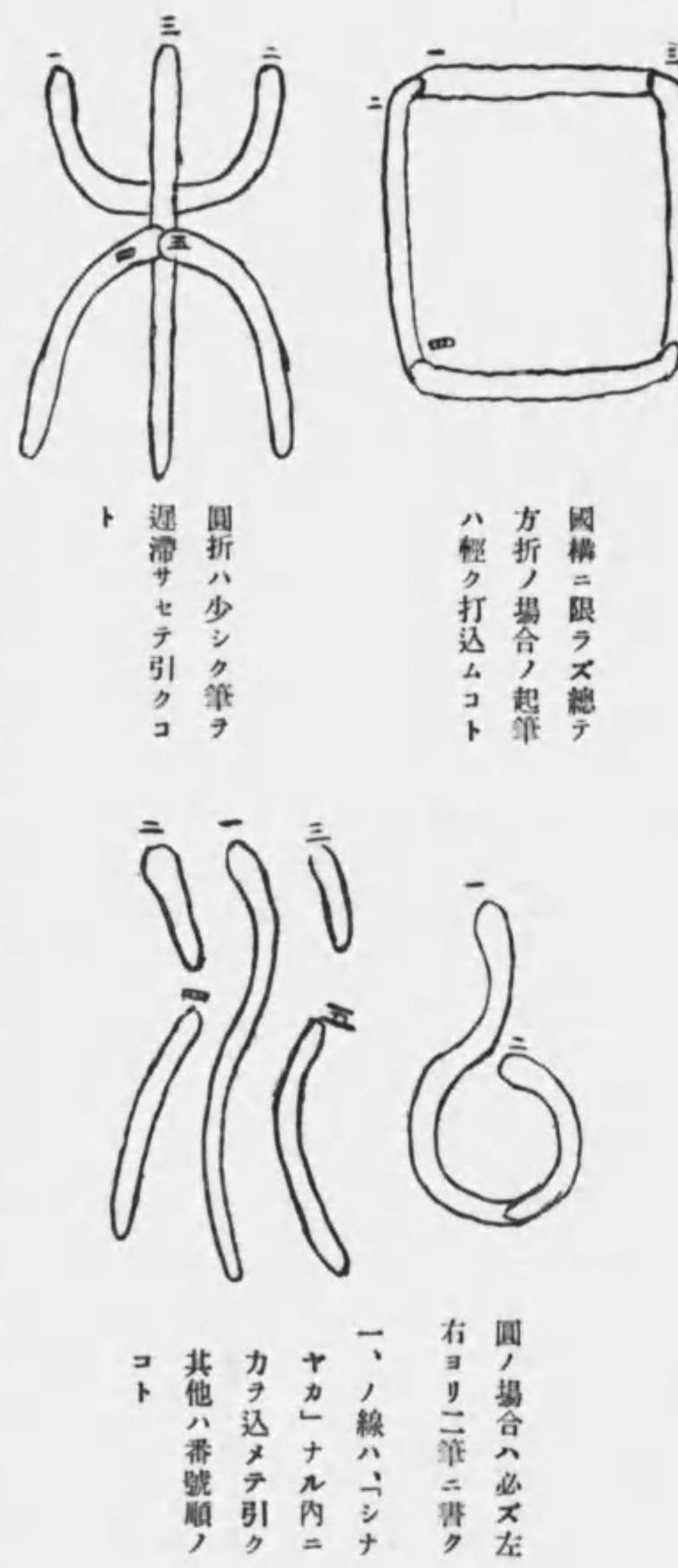
(圖二) 第二

終鋒と二の終鋒とが重複するため墨汁に依て筆が滞滯しますと紙質に依ては墨がにじむで見悪くなる恐れがあるから此部分は可成りの速度で運ぶ必要がある。

大略以上の三通り位を先づ基本として練習致し。其れを應用すれば自然に得る所が有ると存じます。

次に筆を運ぶ順序であるが、是も隸、楷を書く場合と大體同じである、但文字によりて多少相違する點もあるから以下左の文字に就て順次に説明致しませう





是は支那の楊沂孫と云ふ人が許氏の說文解字の部首を書かれたものから摘出したのであるが篆體の上からは所謂小篆に屬するもので有ります。此篆法は業界初學者諸氏の尤も入り易い書でもあり。且篆刻の上に直ちに應用の出来る書風と思はれるから。是に依て説明することにしたのであります。猶東印講習會に於ても此書法を御話して居る次第で、此風を一と通り練習して然る後銘々の嗜好に従ひ他の書き方を勉強する様にすれば其進歩も一層速いと存じます。

次に申したいのは墨纏ぎのことであるが。篆字は楷。行。草の如く一度墨を含ませて一字を書き上げるとか、或は一行を書き上けるとか、或は一行を書き終るとか云ふ譯には行かぬ場合が多い。箇様な時には何處で墨を纏ぐかと云ふ疑問が起る、私は是に就ては極めて寛大な考へを持って居る。即ち何處で墨を纏でも善いと云ふ意見であります。但し一線を引き終らぬ途中で纏き足すことは宜しくないが。其他は何處でも差支ないと思ふて居ります

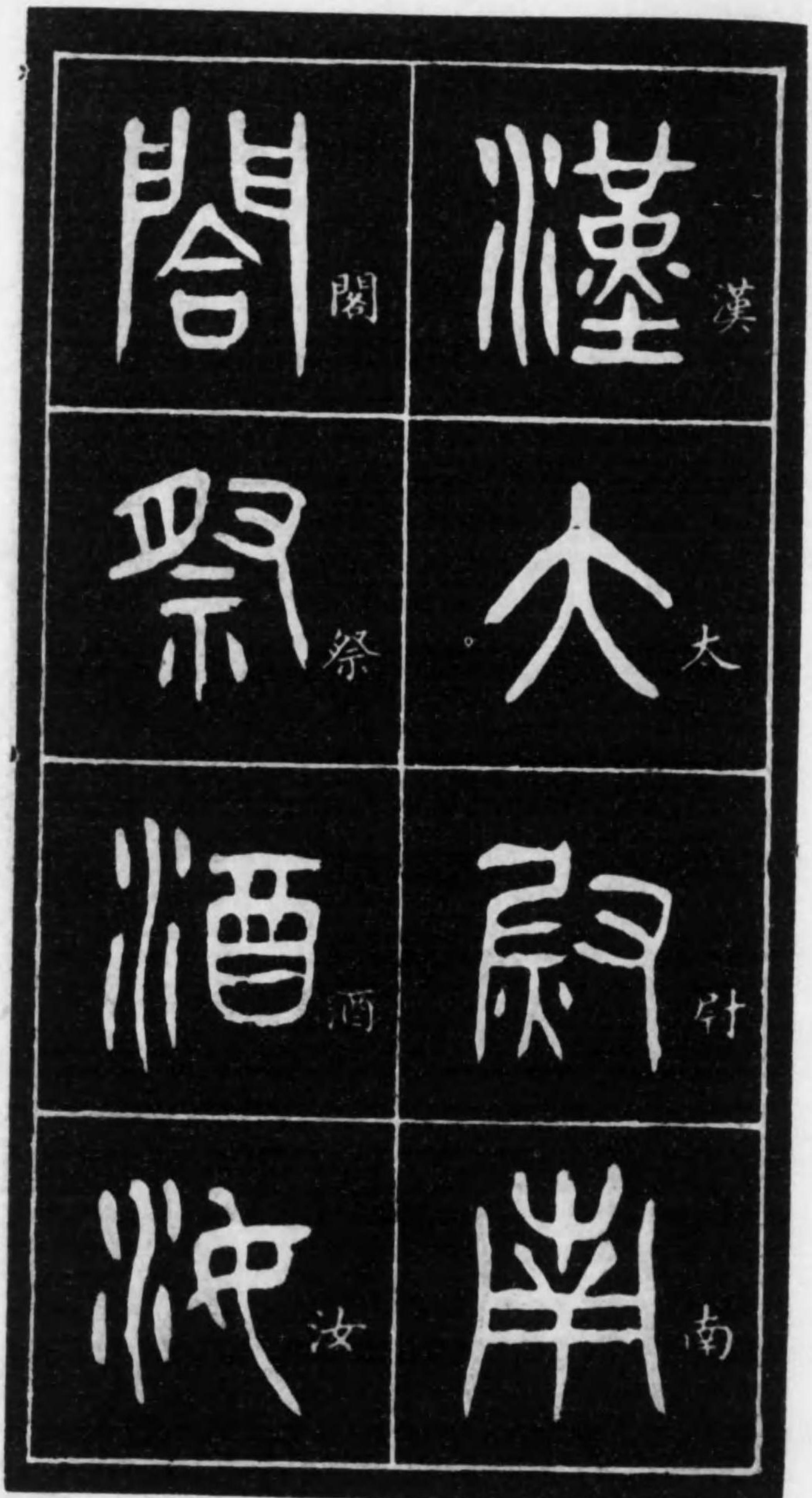
夫れから今一つ御注意を願いたいのは篆書には淡墨は宜しくない。成る可く墨を濃くすると云ふことであります其濃度は少しくボタツクかと思はれる程度が宜しい。左りながら餘り濃度が過ぎて筆が澁ぶるやうでは却つて宜しくない。故に墨を磨るに就てもよく注意しなければ成らぬのであります。猶篆書は遲筆の方が宜しい。勿論草書のやうに一氣呵成に書き上けることは字體の上からも出来ぬことであるが、楷書や行書の如くに筆を早く運ぶことも禁物で殊に臨書の場合には筆を徐々に運んで、善くよく手本の筆意を味ひつゝ書いて欲しいと思ひます。左りとて遅筆の爲めに文字に氣力なく萎縮した様な字體とならぬやうにしければならぬ。是點は練習に依つて自得するより外はありません

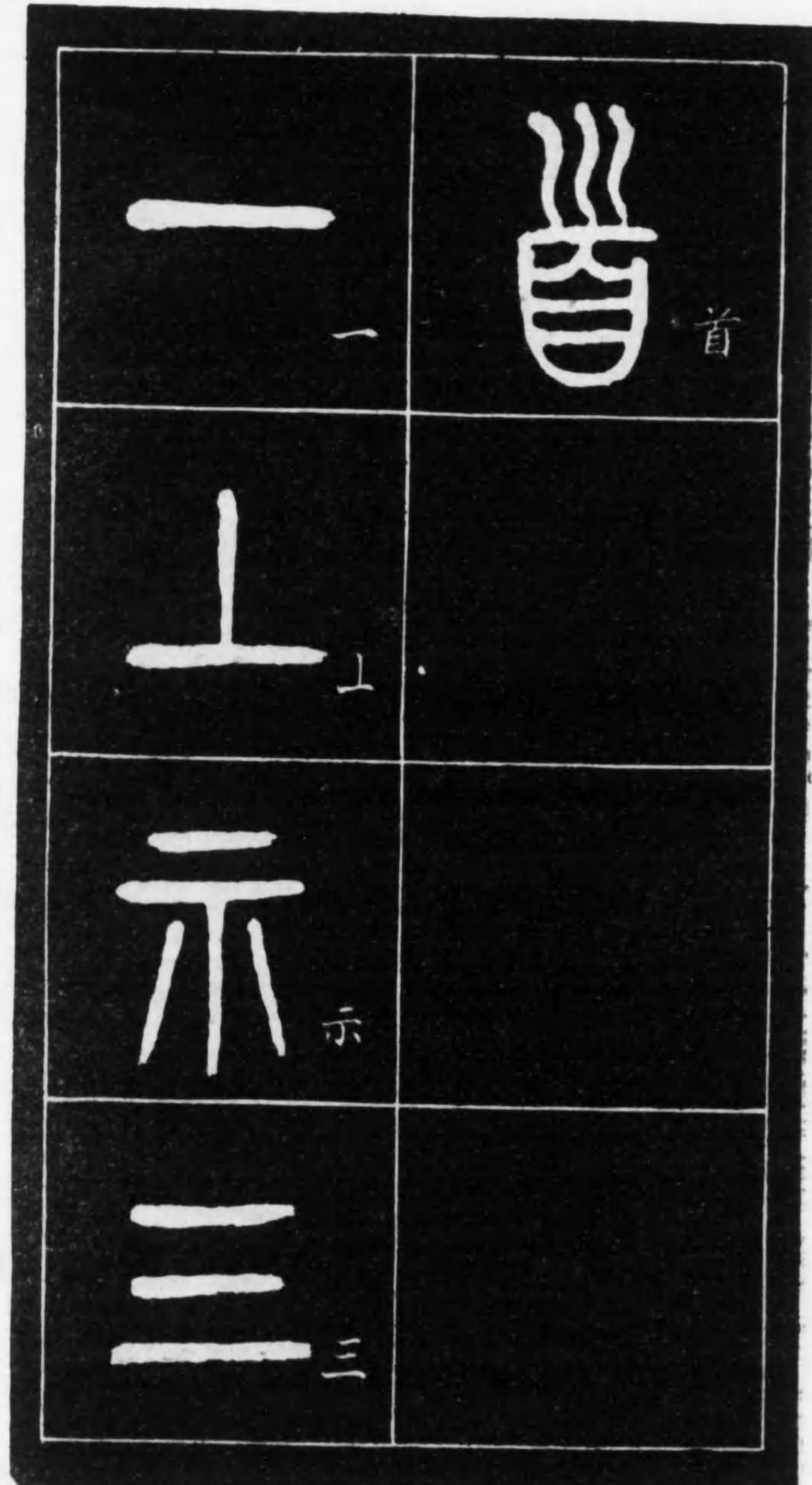
臨書に方りて注意すべきは、堅の線にても横の線にても、見た處は何の字も同様で簡単なやうに見え、又横から堅に移り堅から横に成る其變化も同様に見えるけれども、是は其文字に依つて各々相違があるから、其同じ様な處から自然に其變化する所を發見して、其用意のある所を把握して欲しいと思ふ。

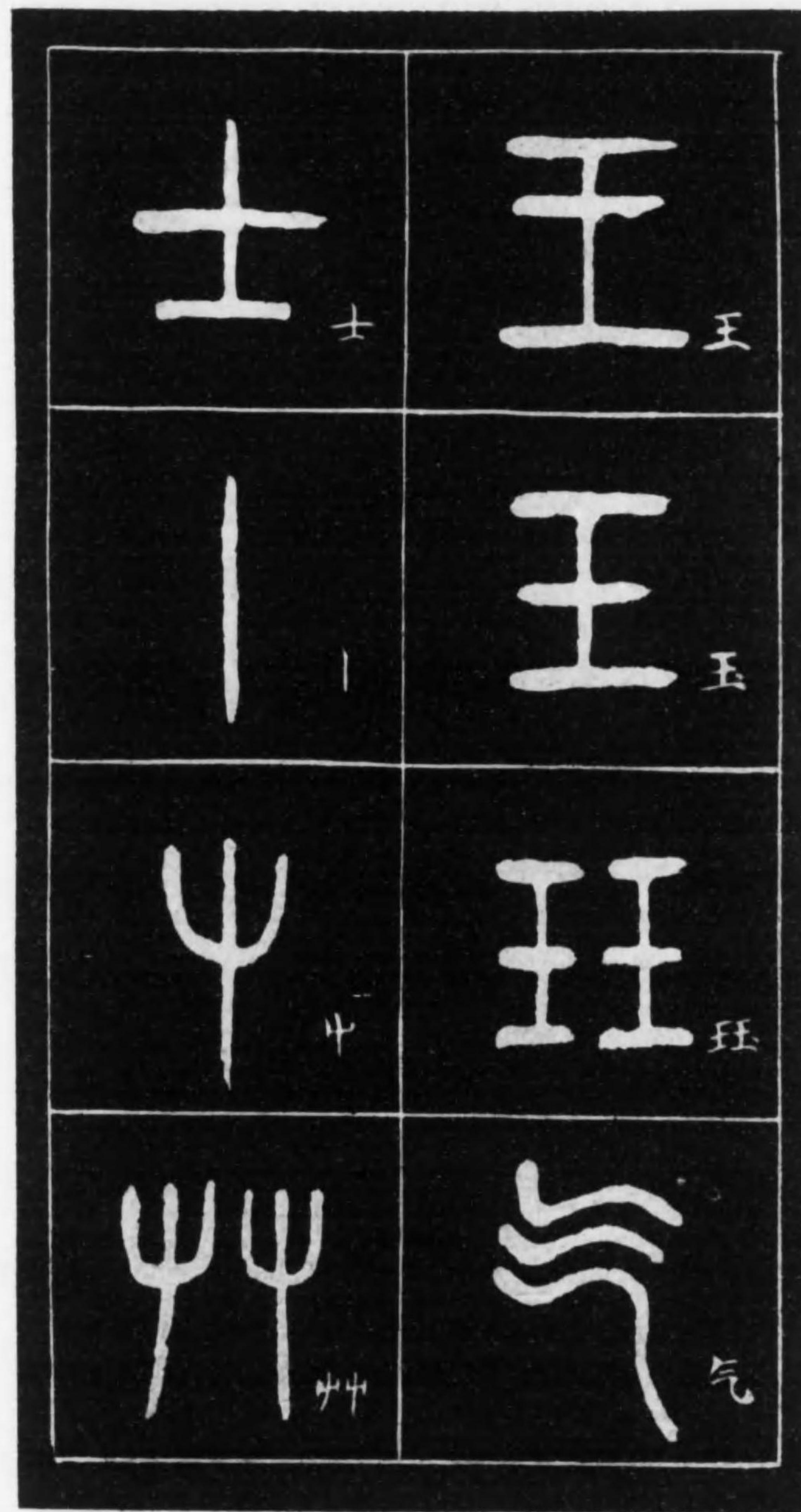
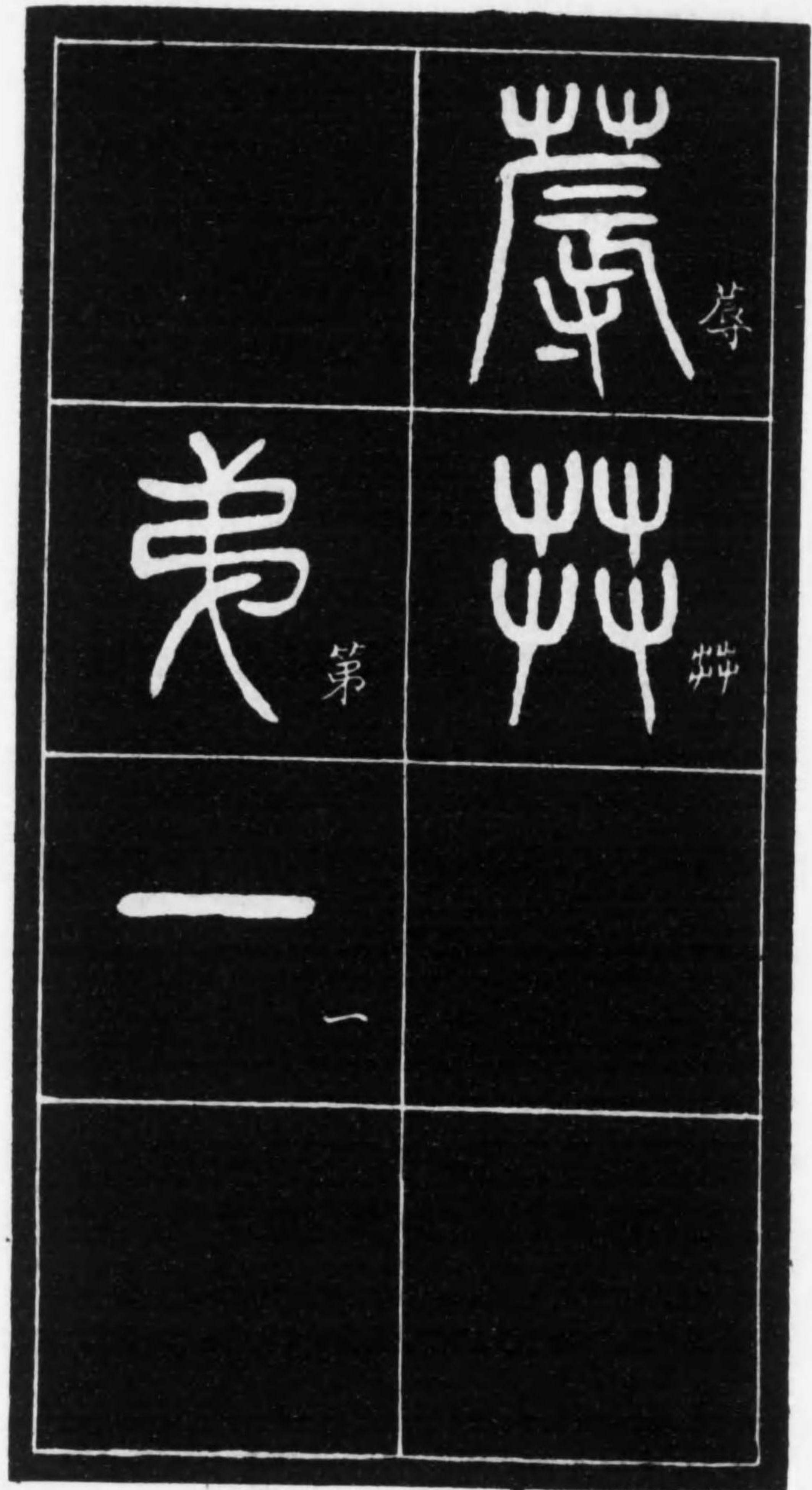
夫れから筆畫の順序も其人に依りて多少の相違がある様に思はれるが是は強ひて拘泥するには及ばぬ。但私は此

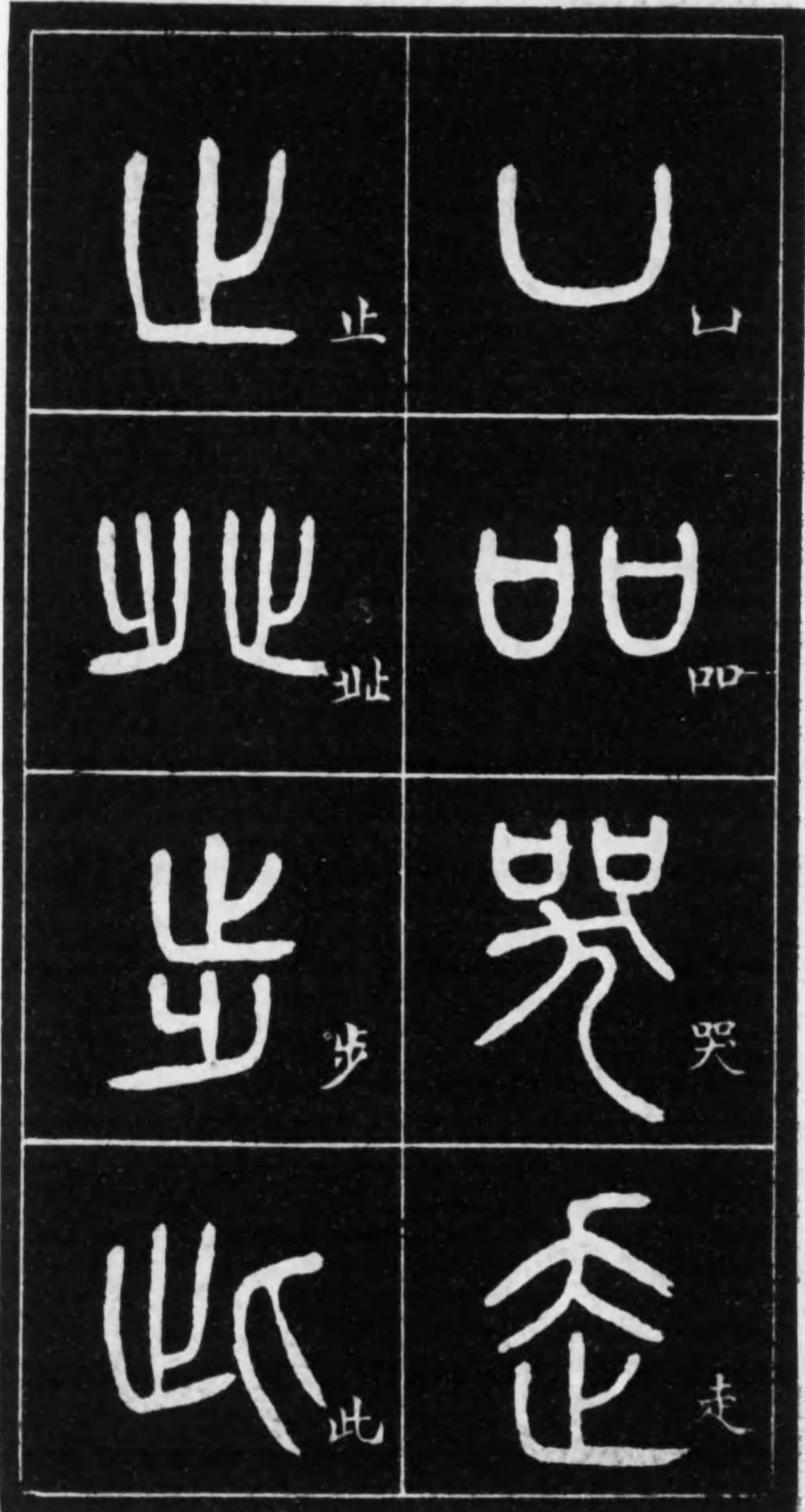
處に掲げたやうな順序に依つて書いて居るのであります。

一體篆書に於ては左から起して右へ轉折する線は易きも。右から左へ轉折する線は割合に均整を得難きものであるが是れも常に練習すれば次第に馴れて来るものであります。次に篆書も他の諸體と同じく起筆の所に力を入れ墨を充分に含ませて書くことに注意されたいものであります。

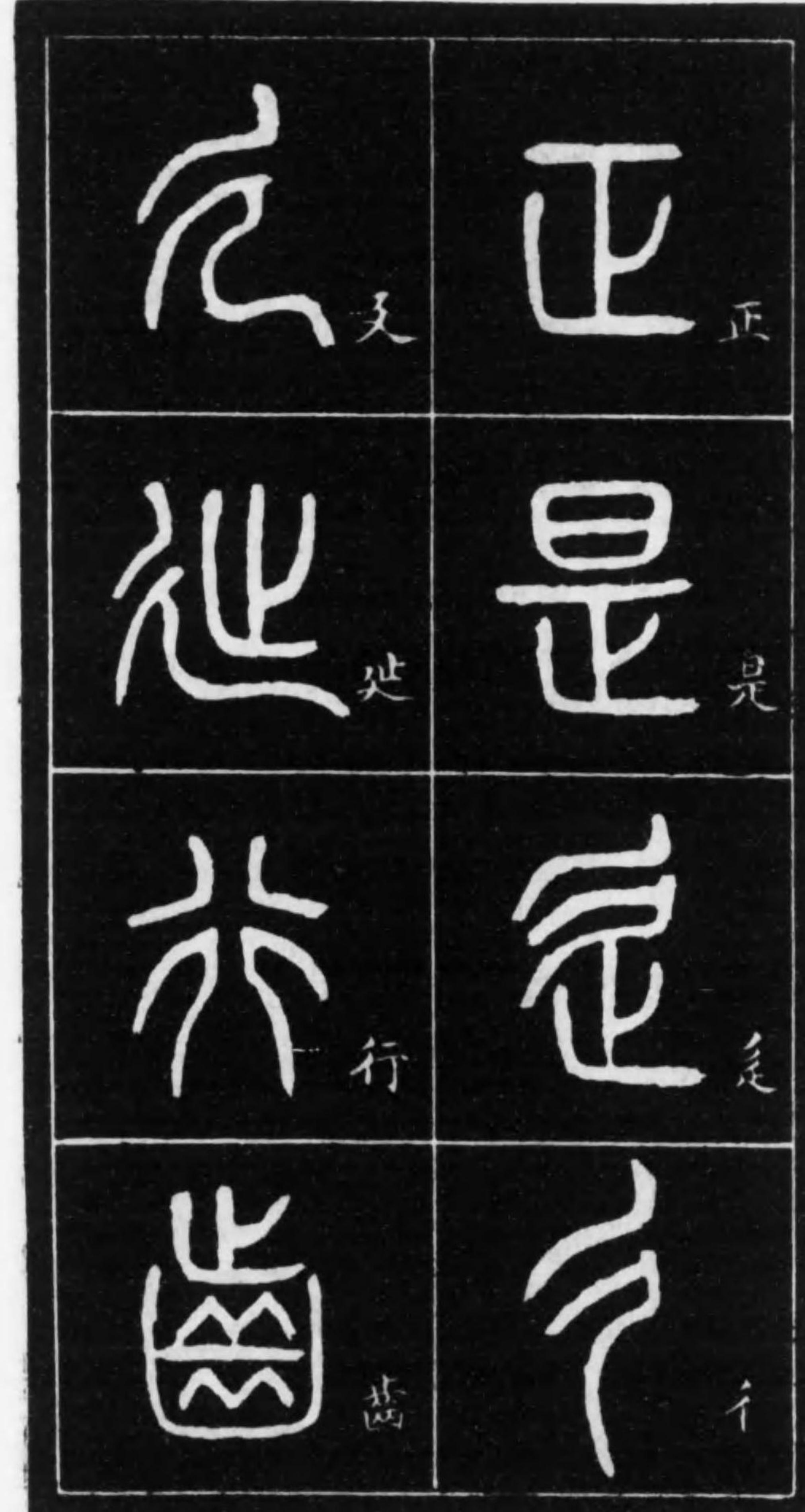


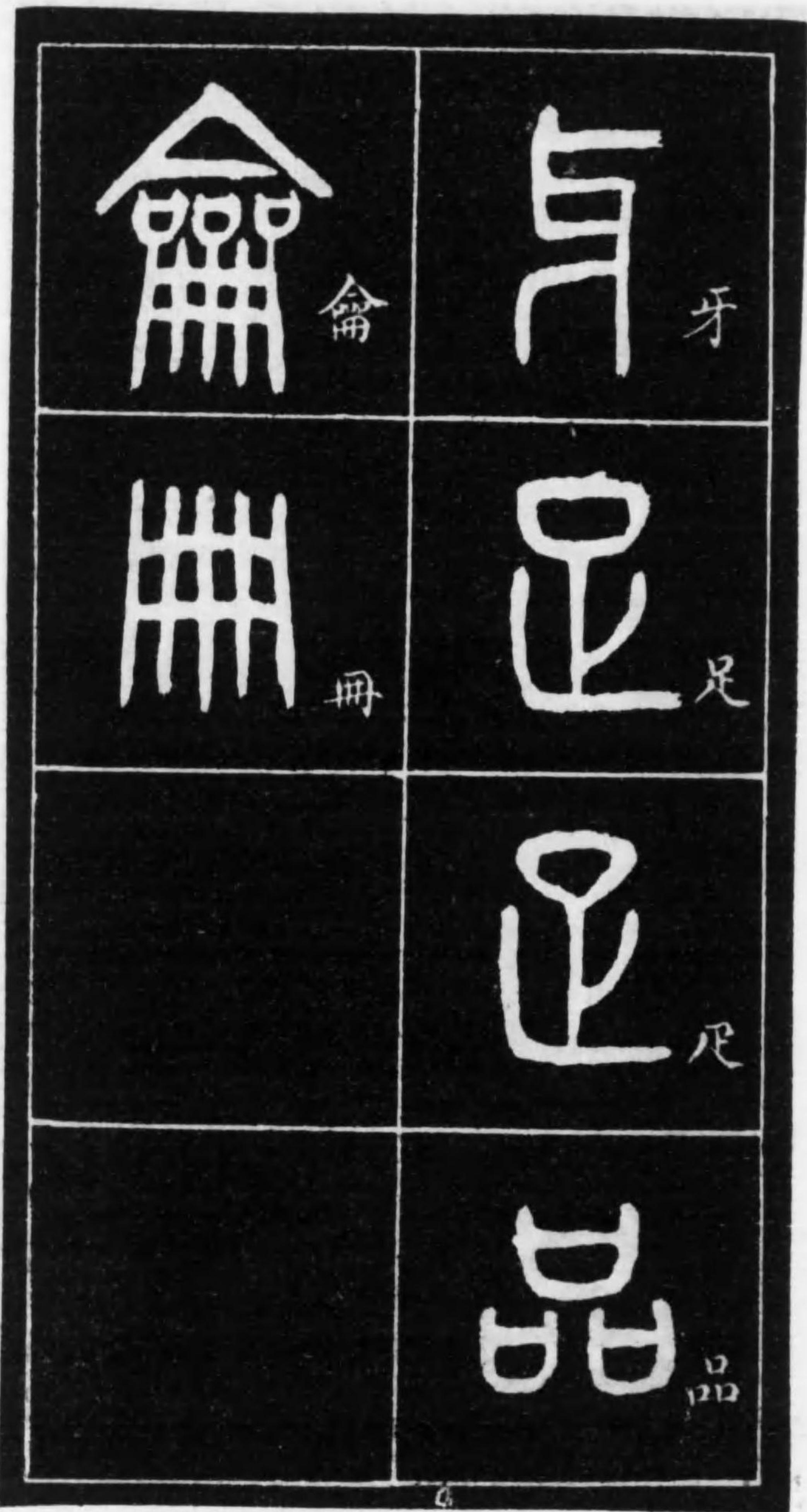




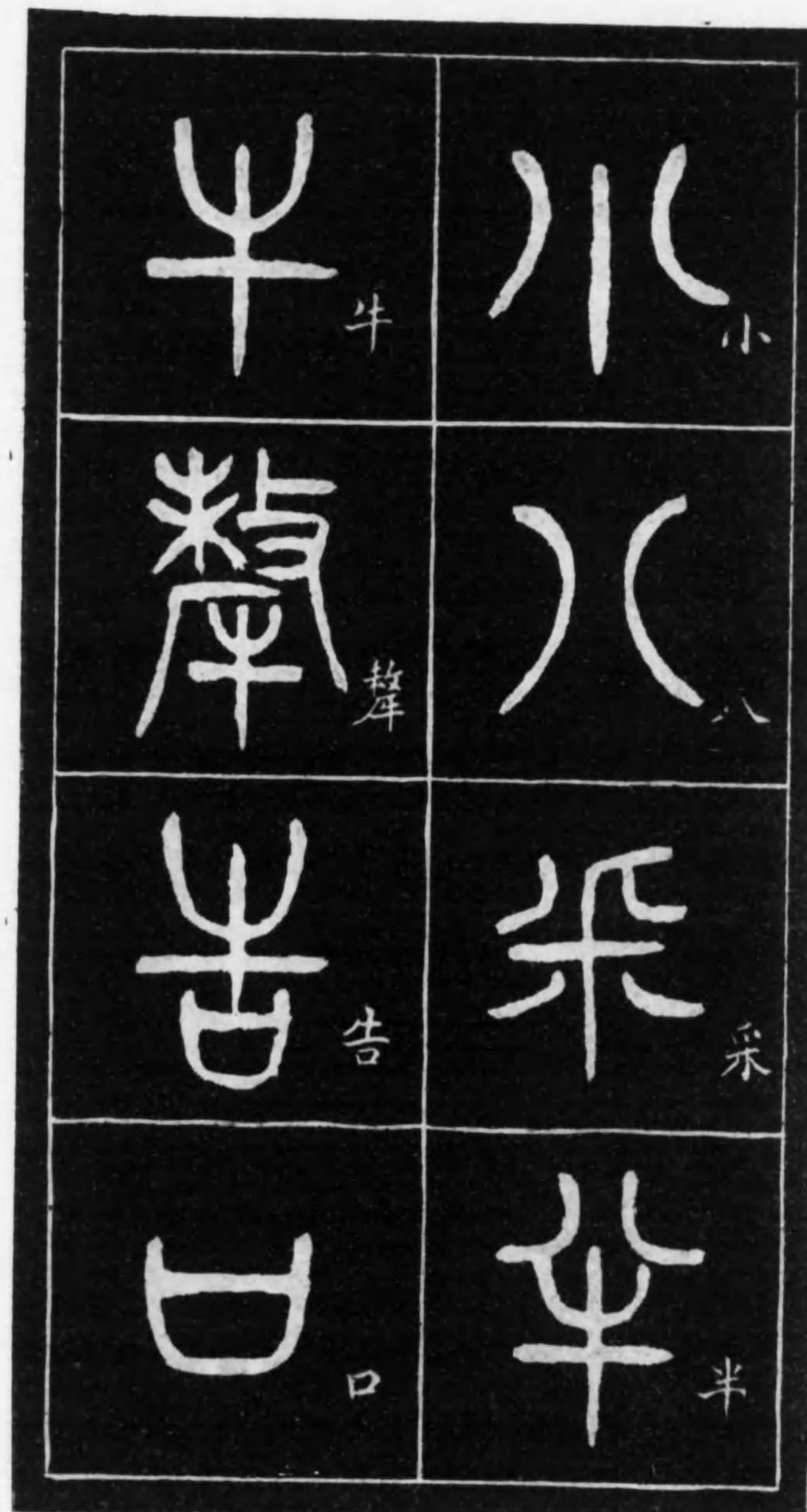


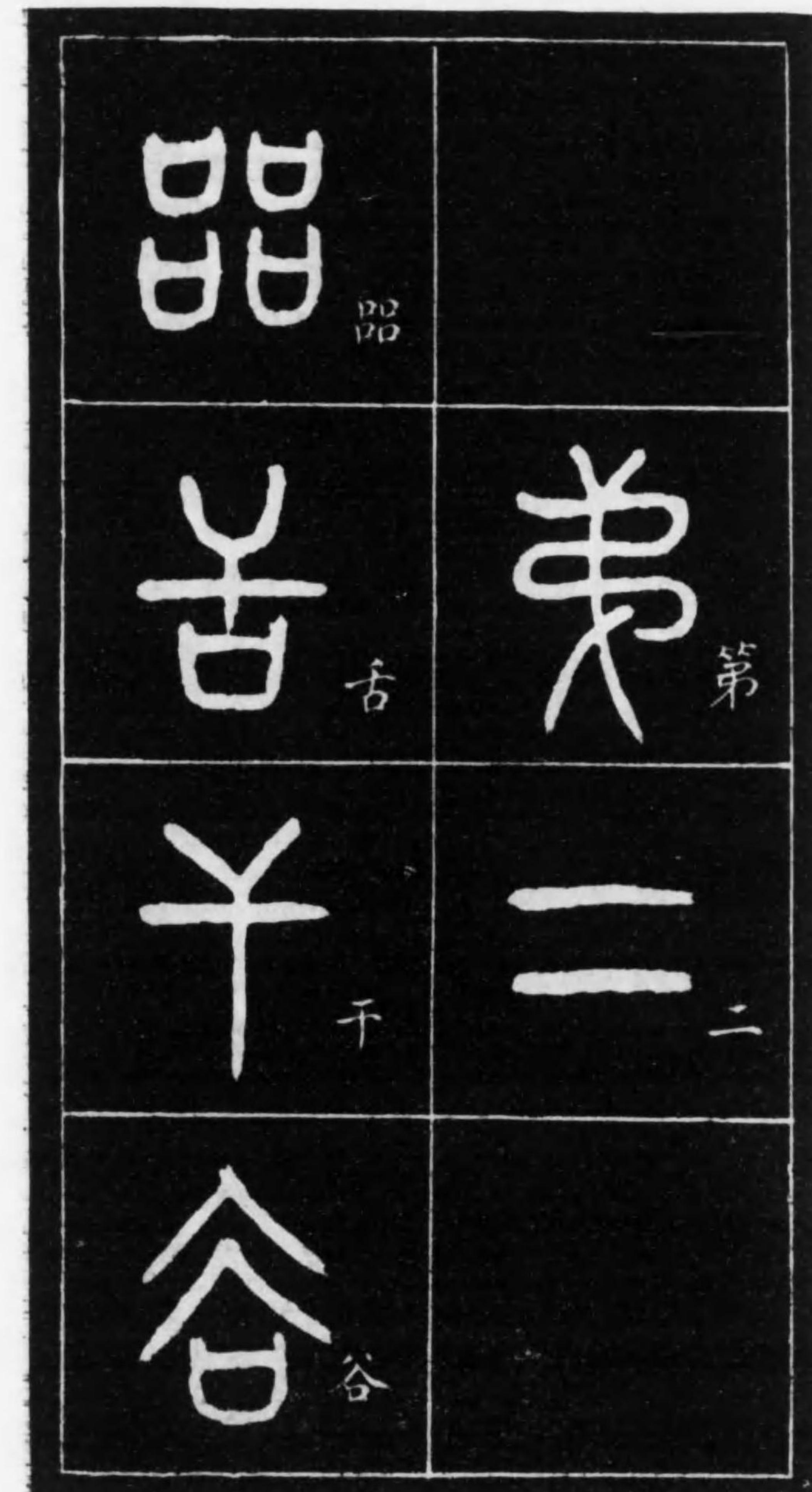
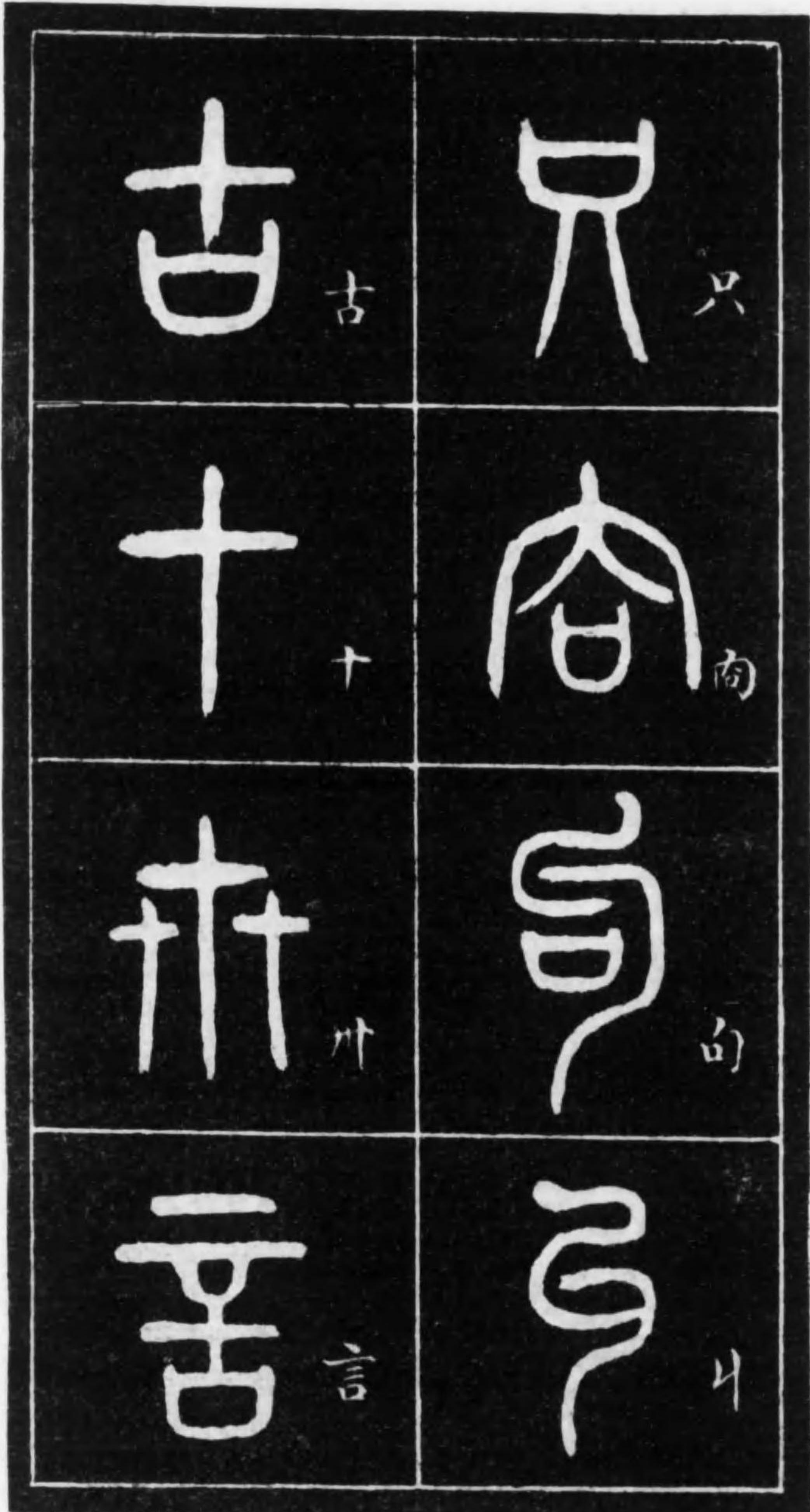
四

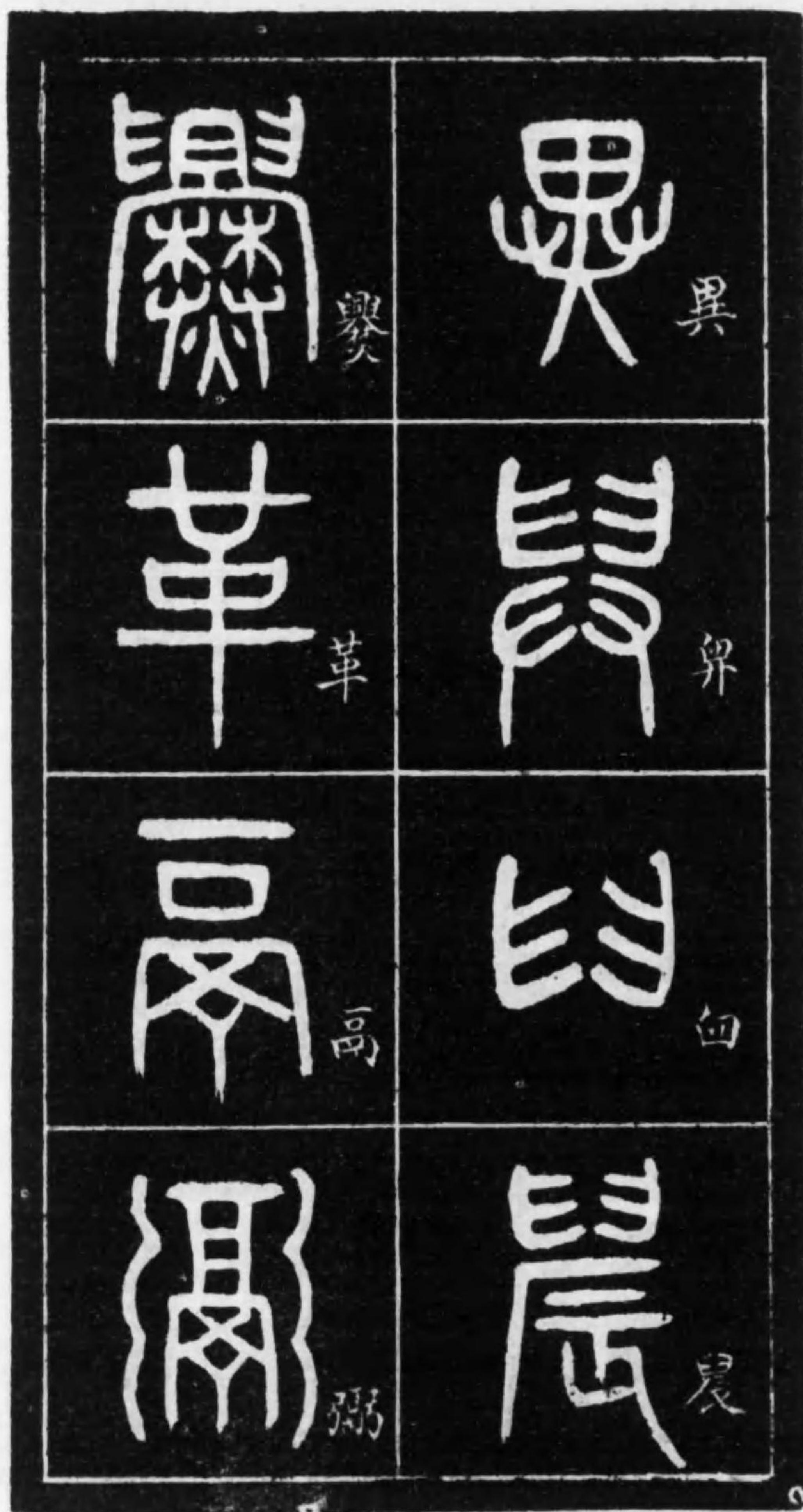




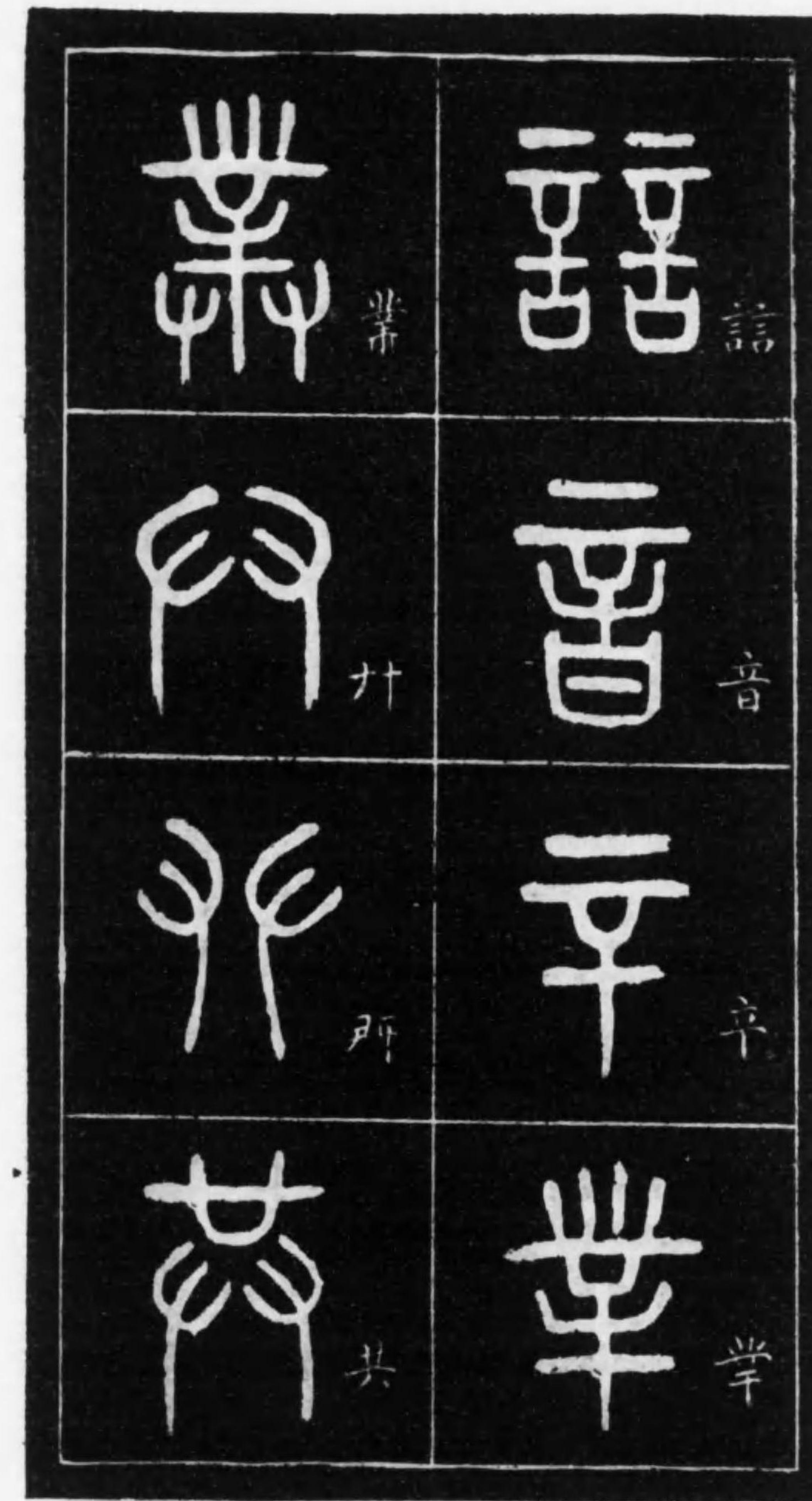
五

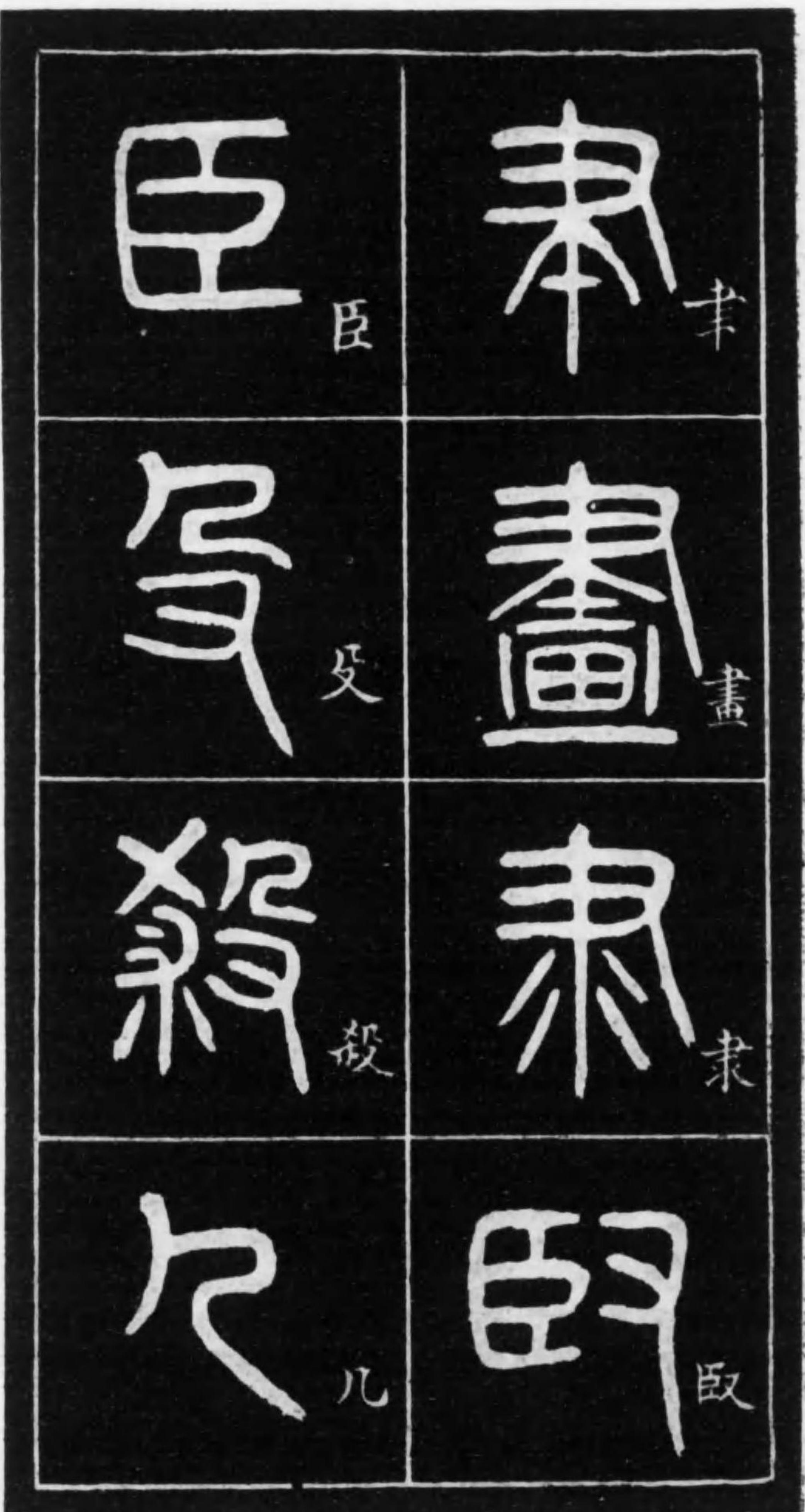




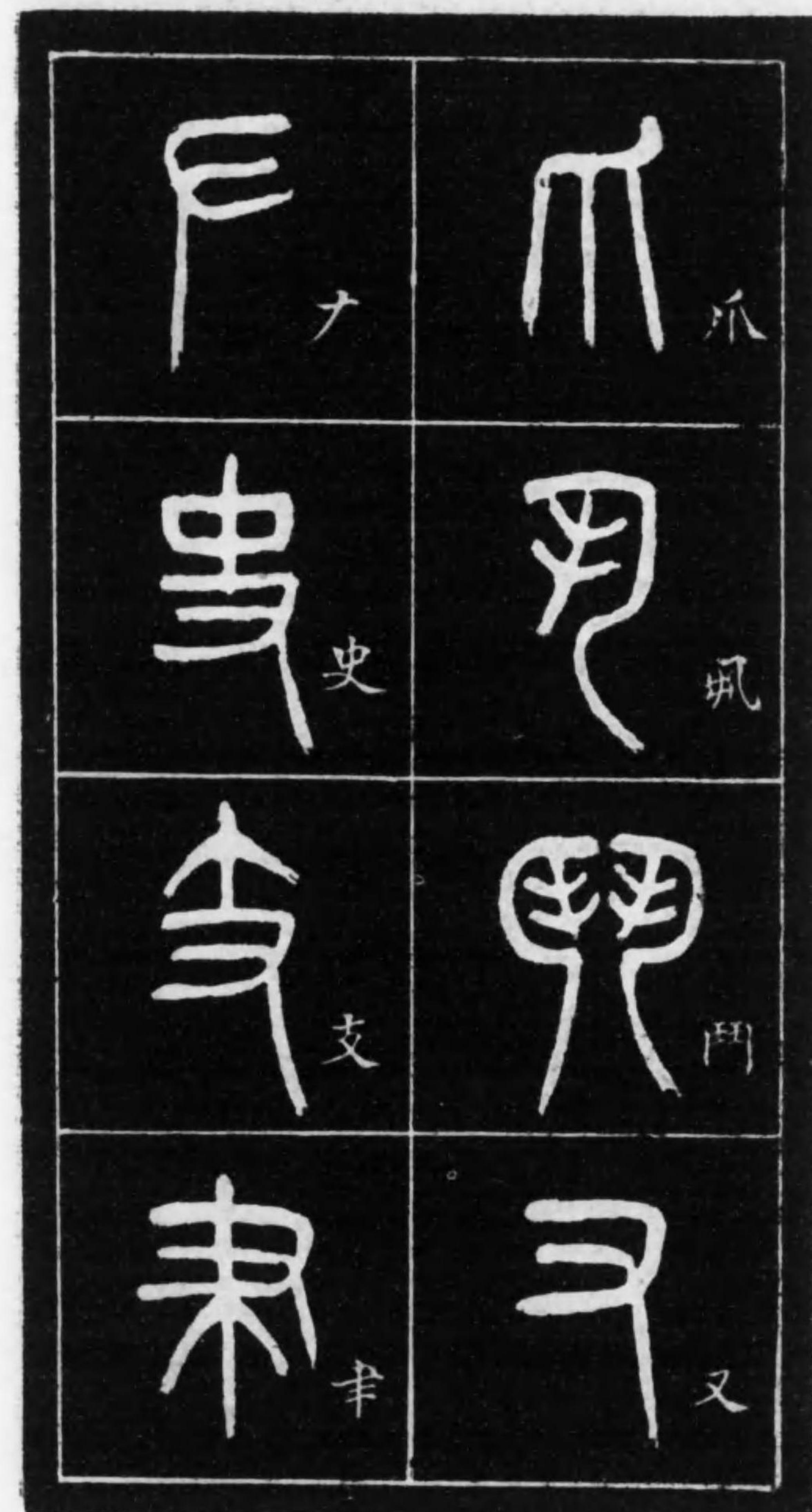


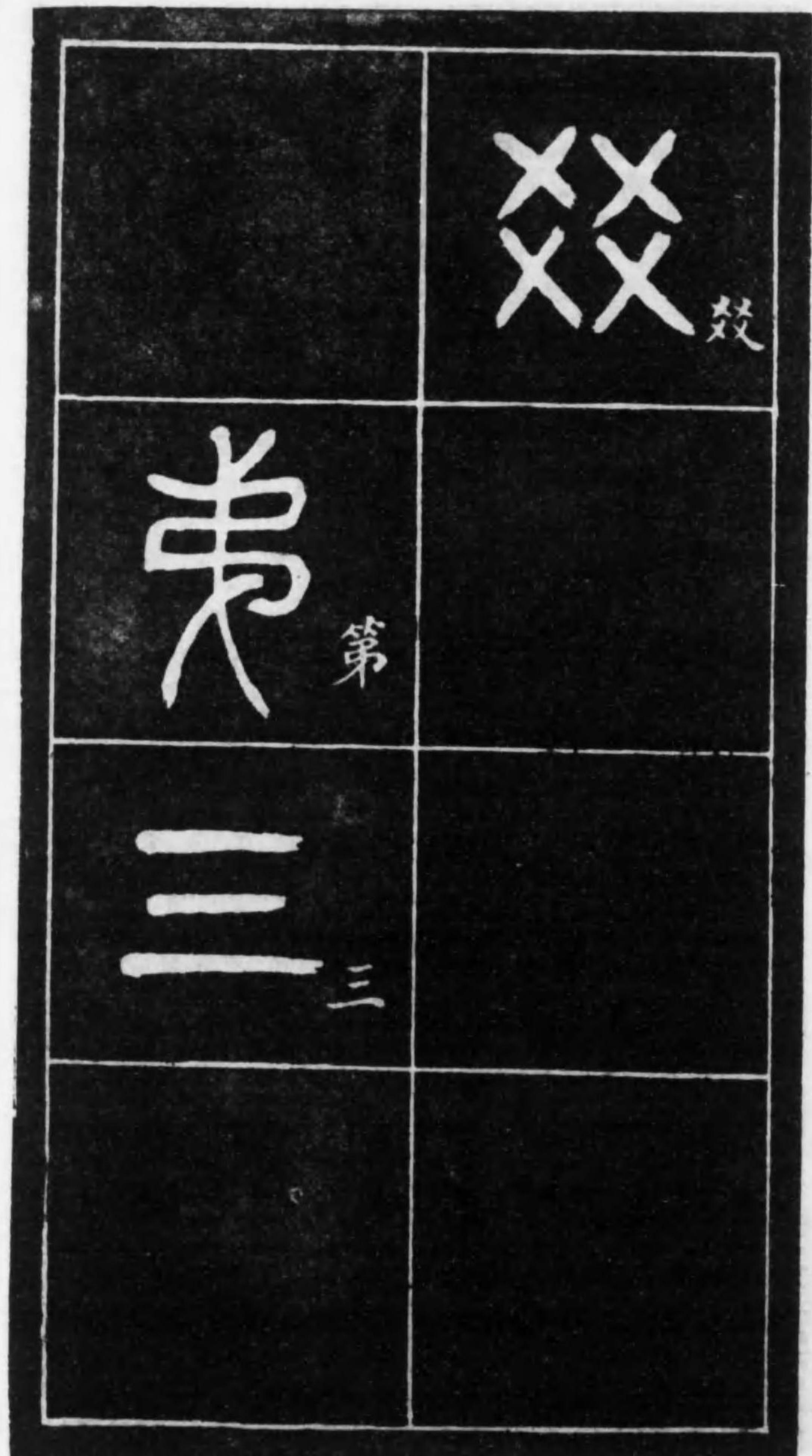
七



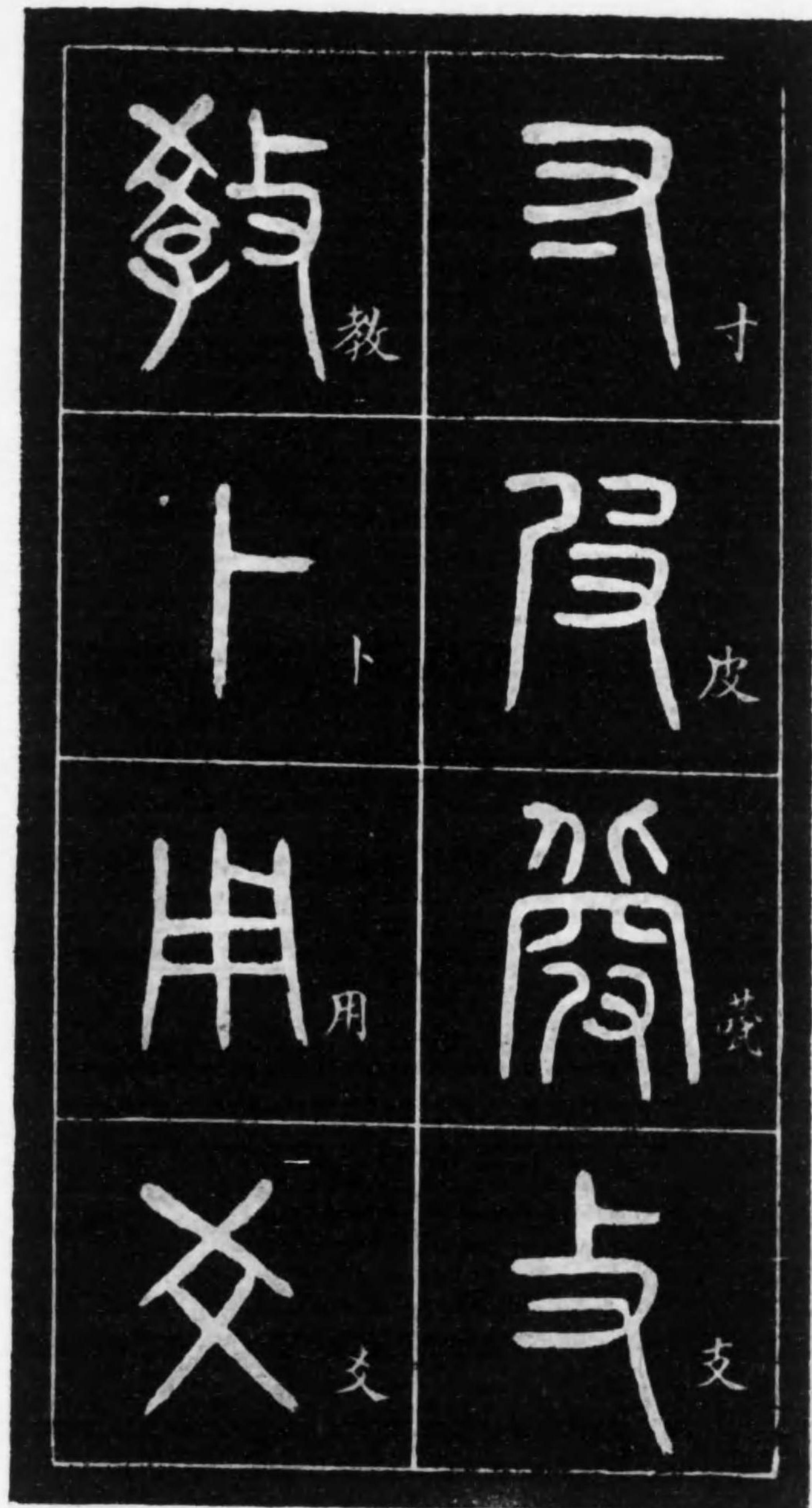


八





九

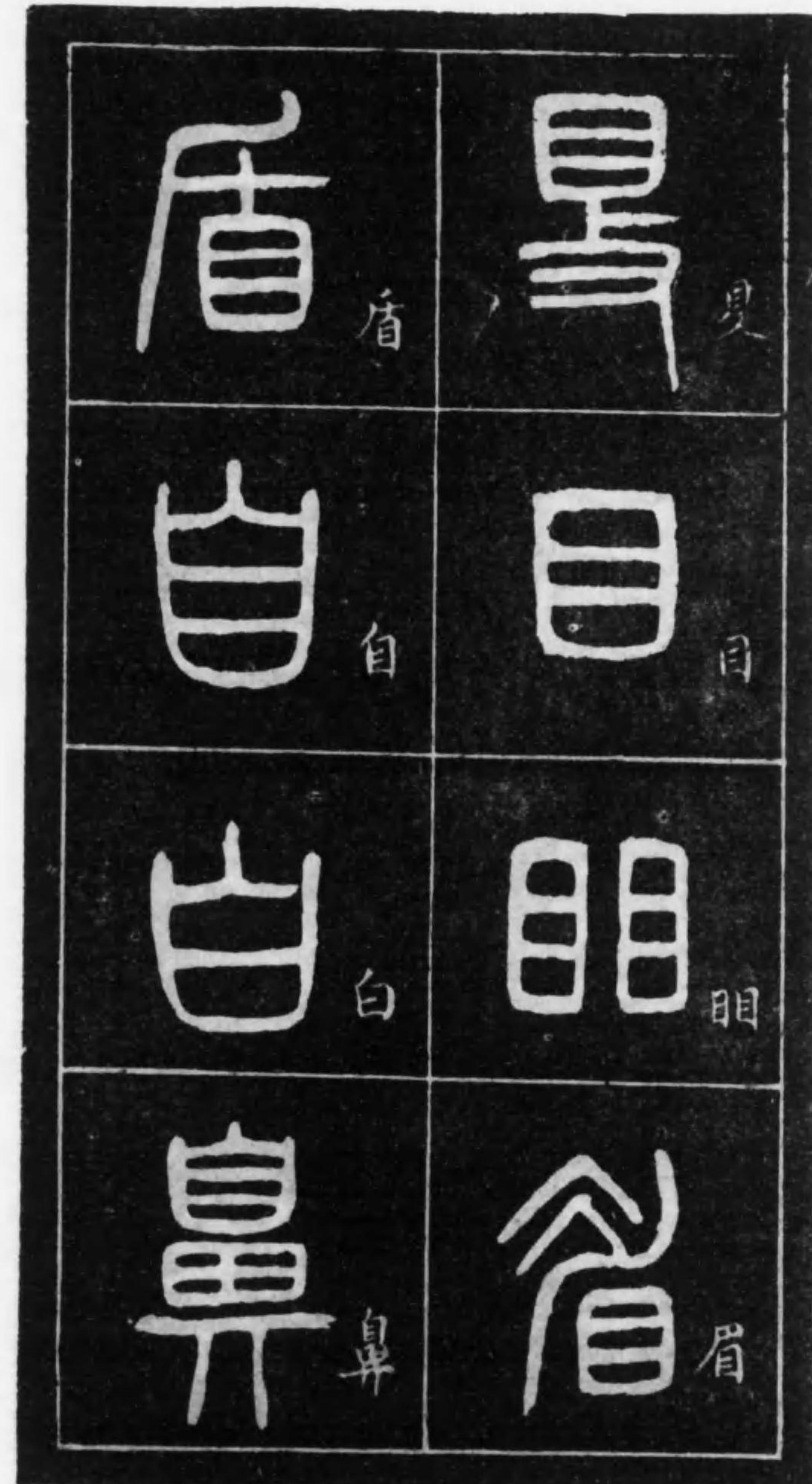


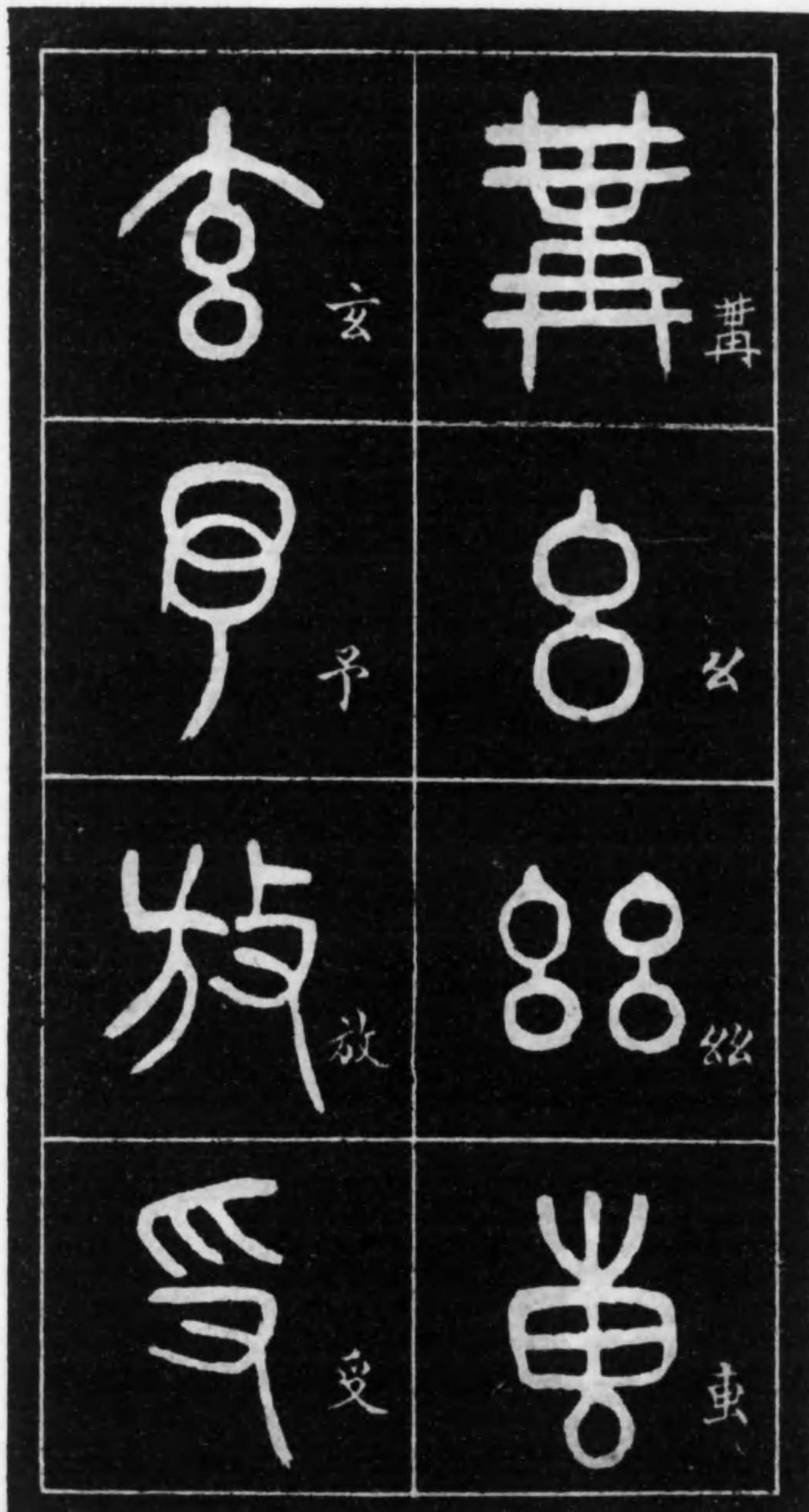
十

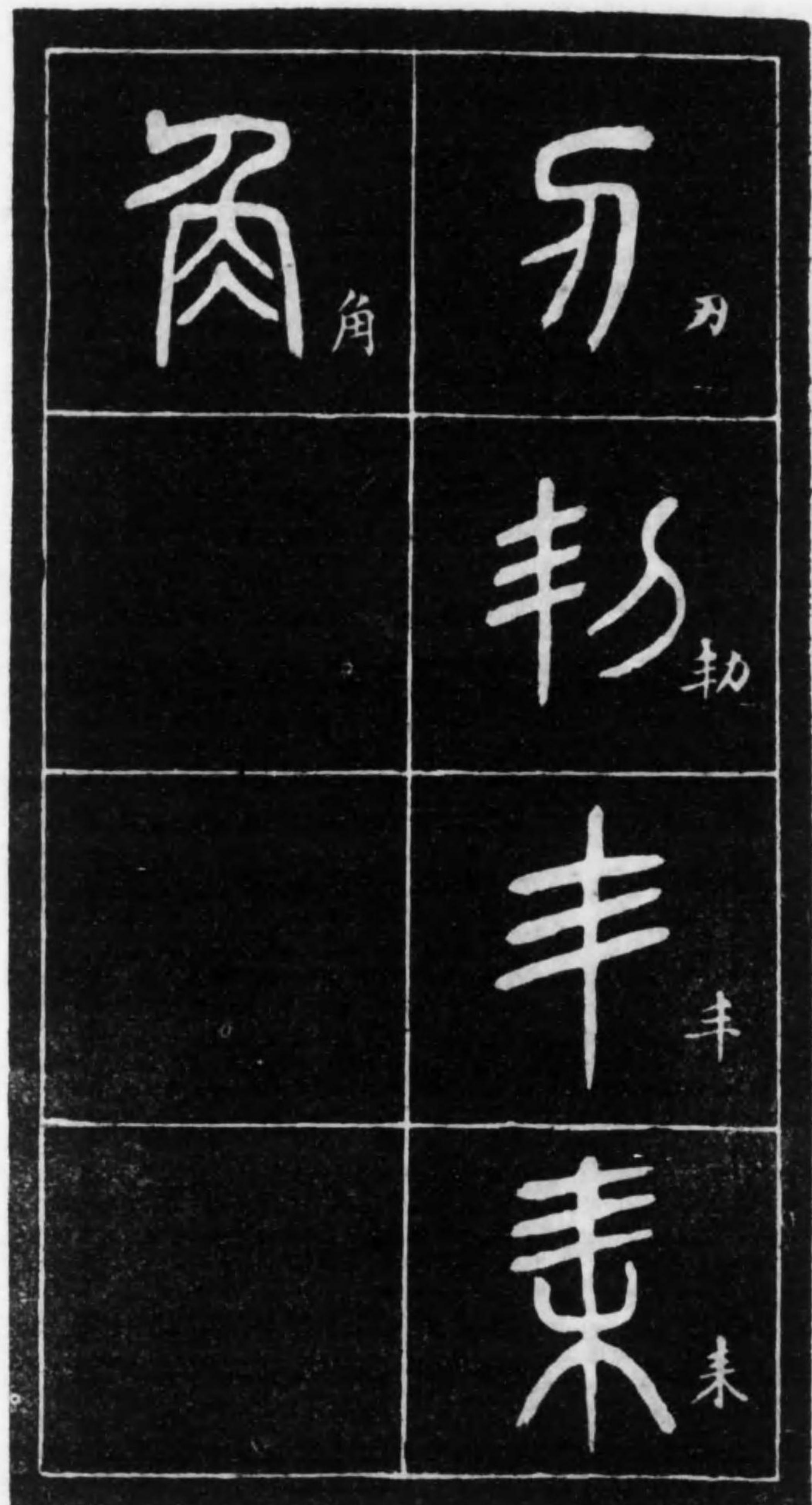
皮

蒙

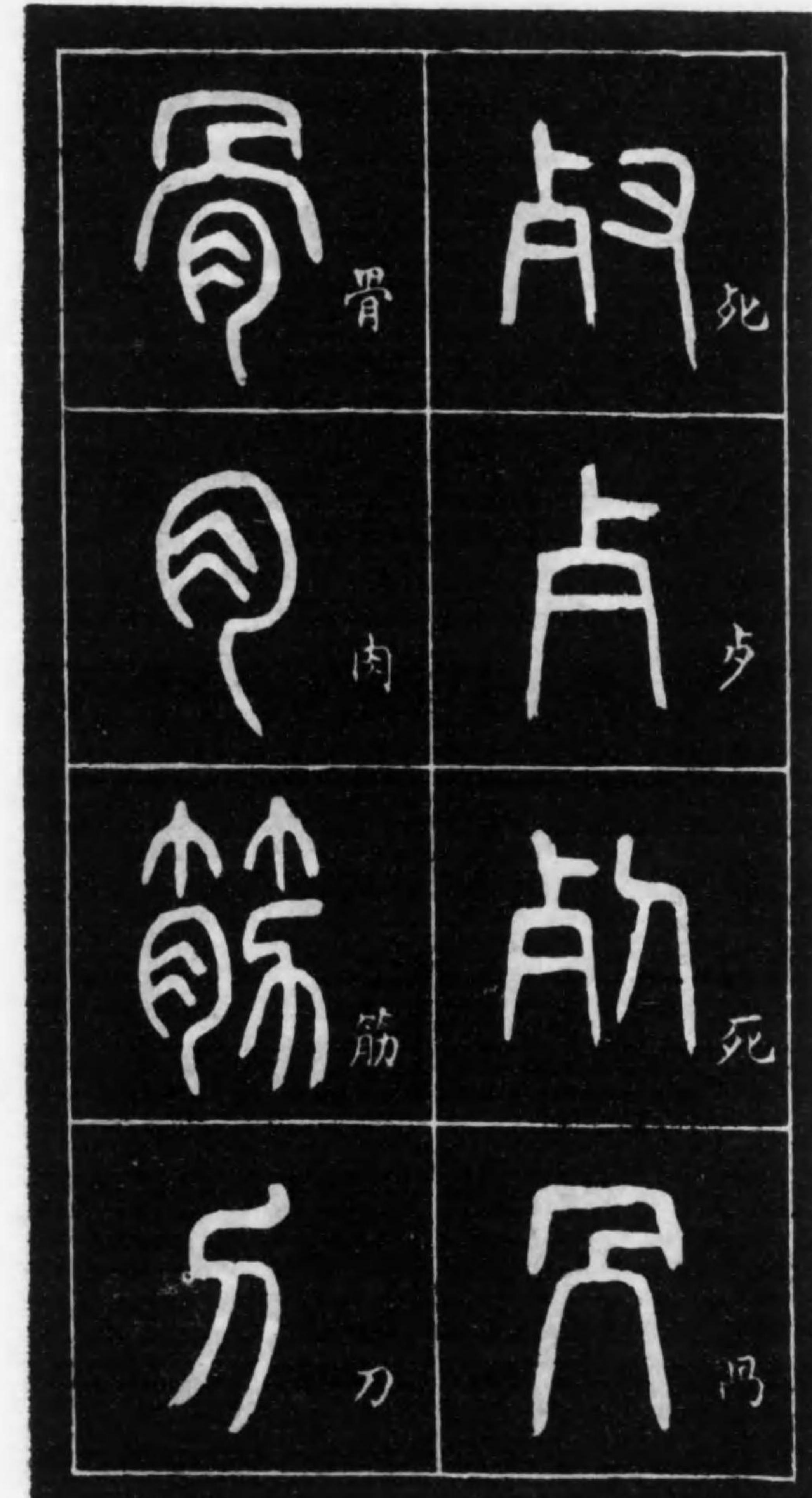
支

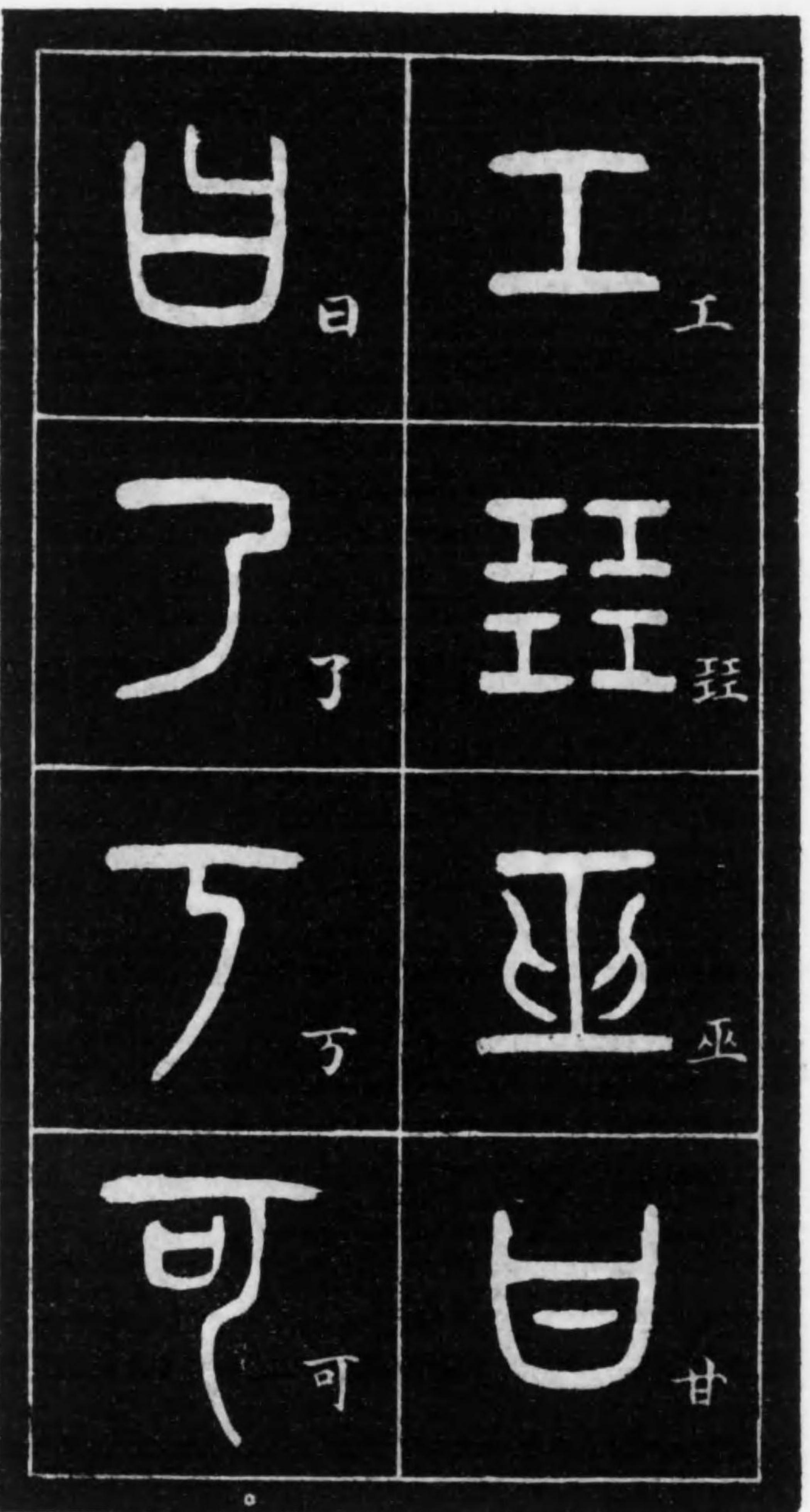




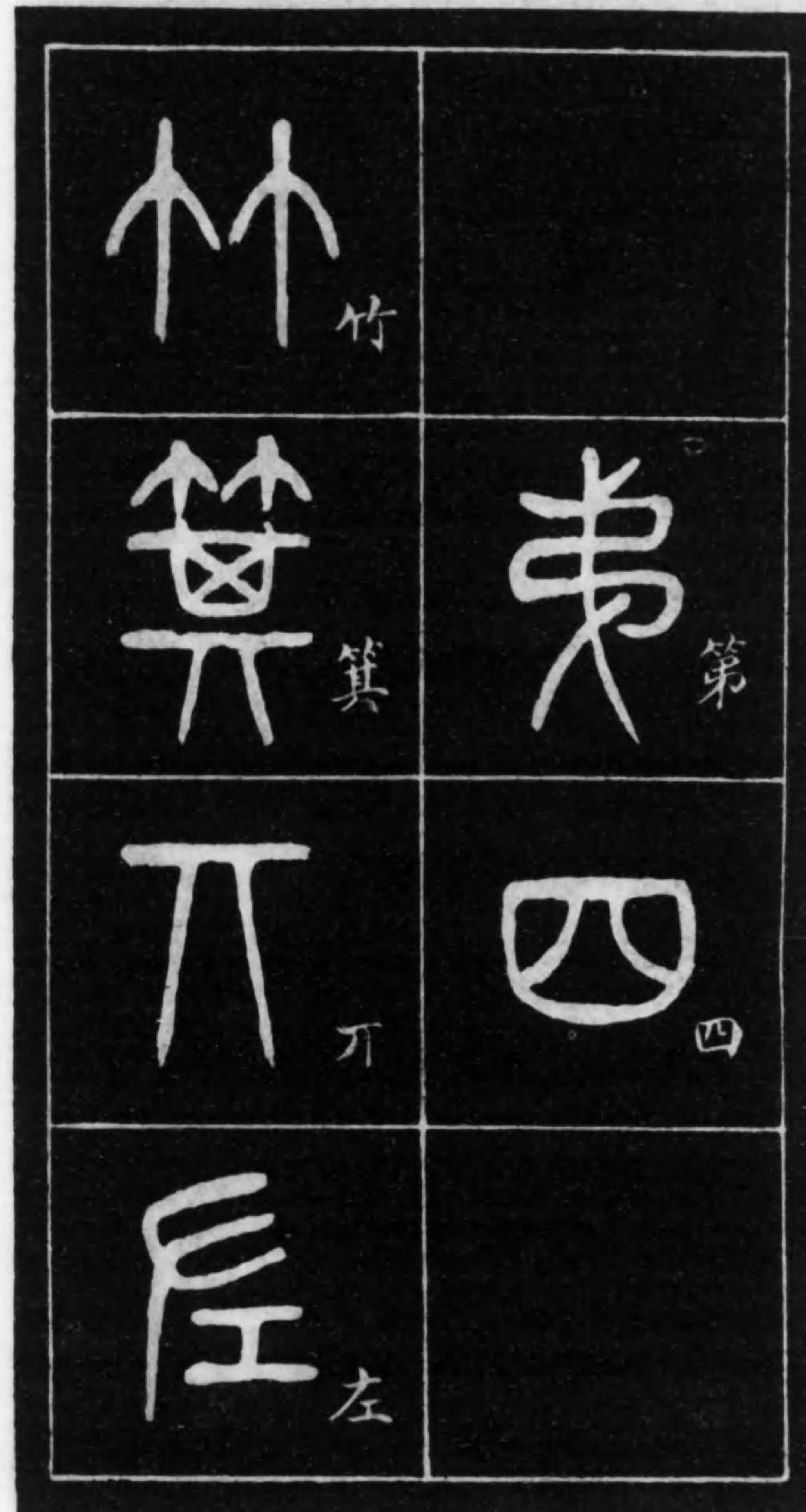


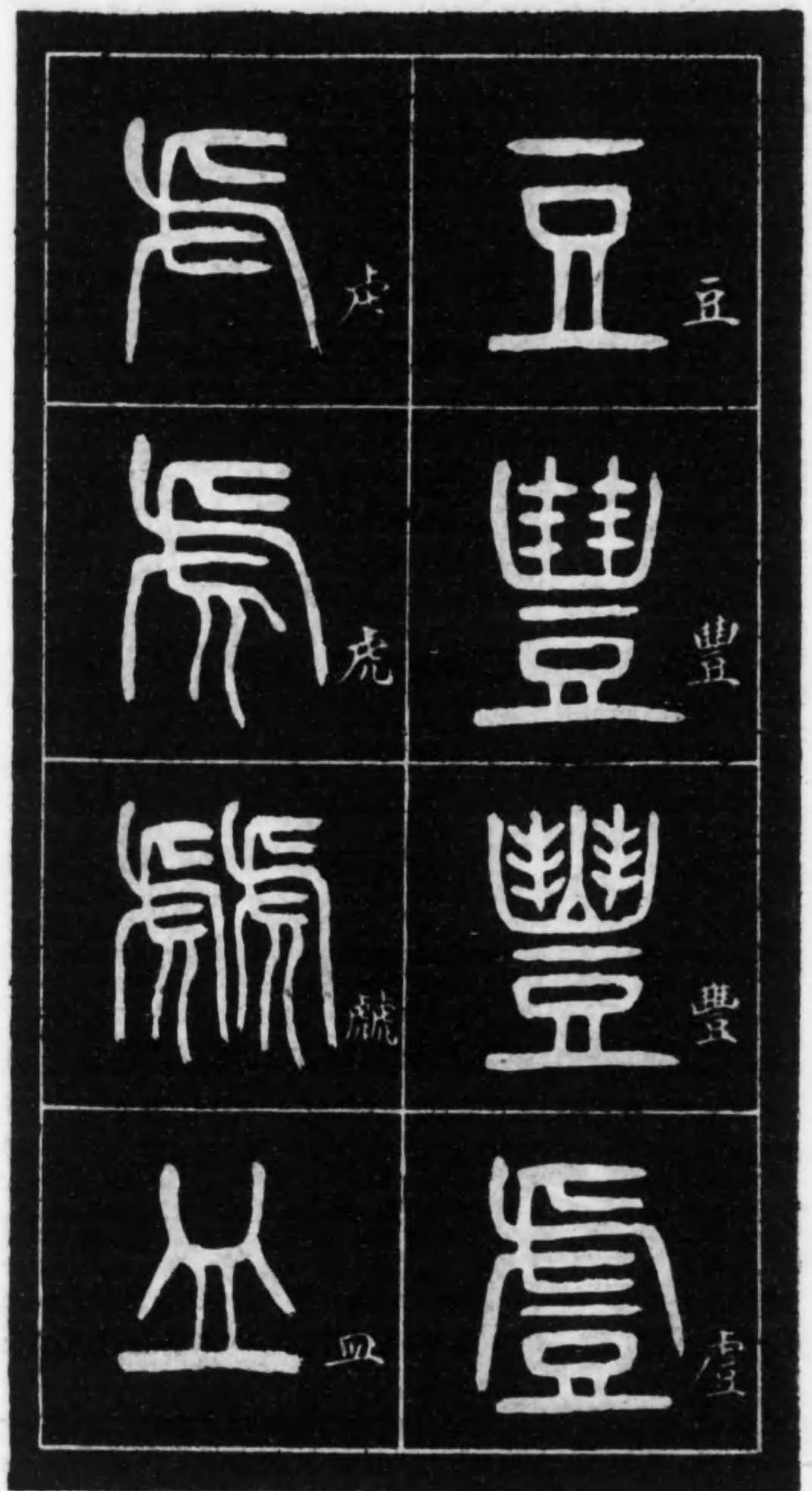
三



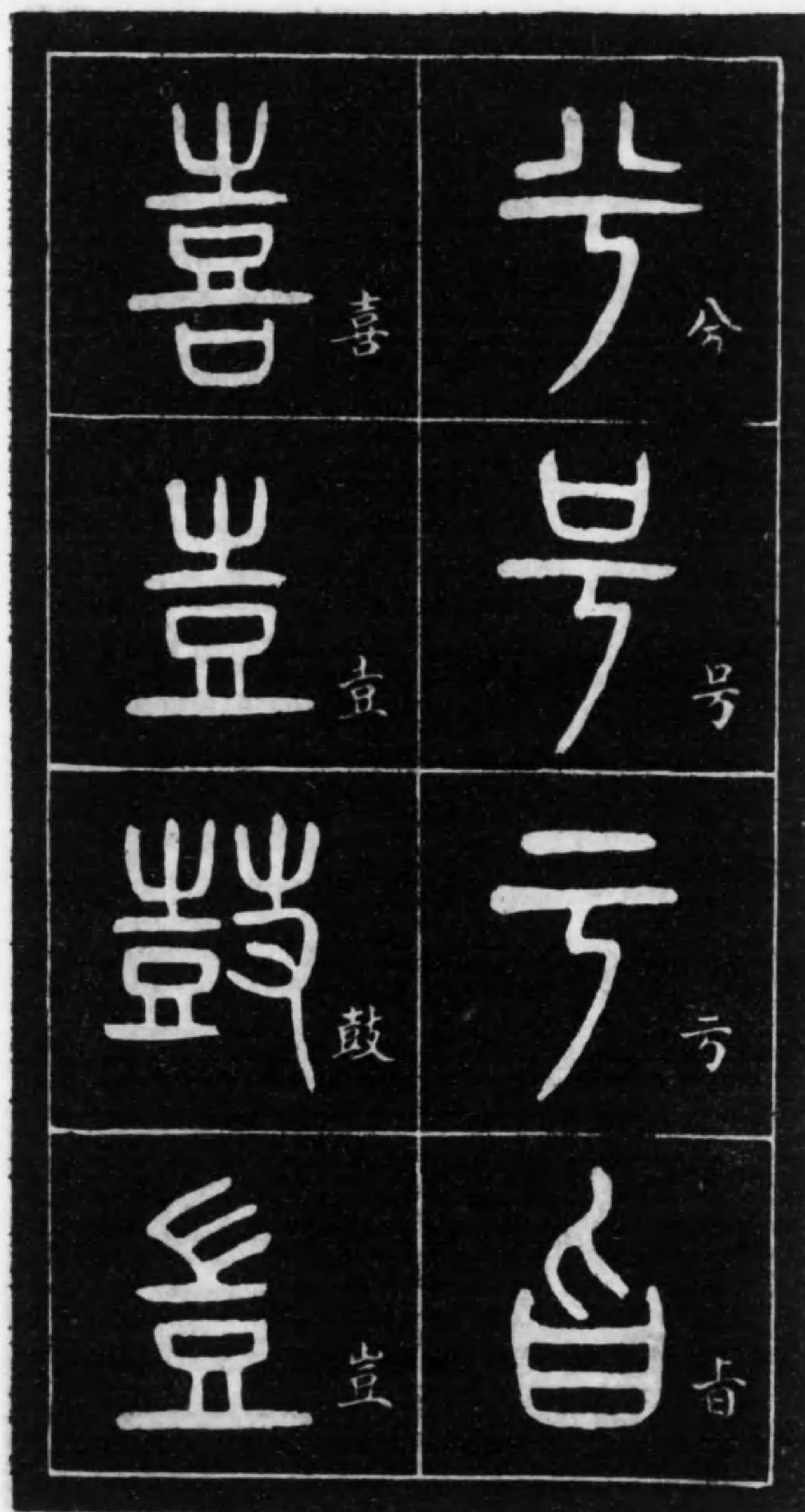


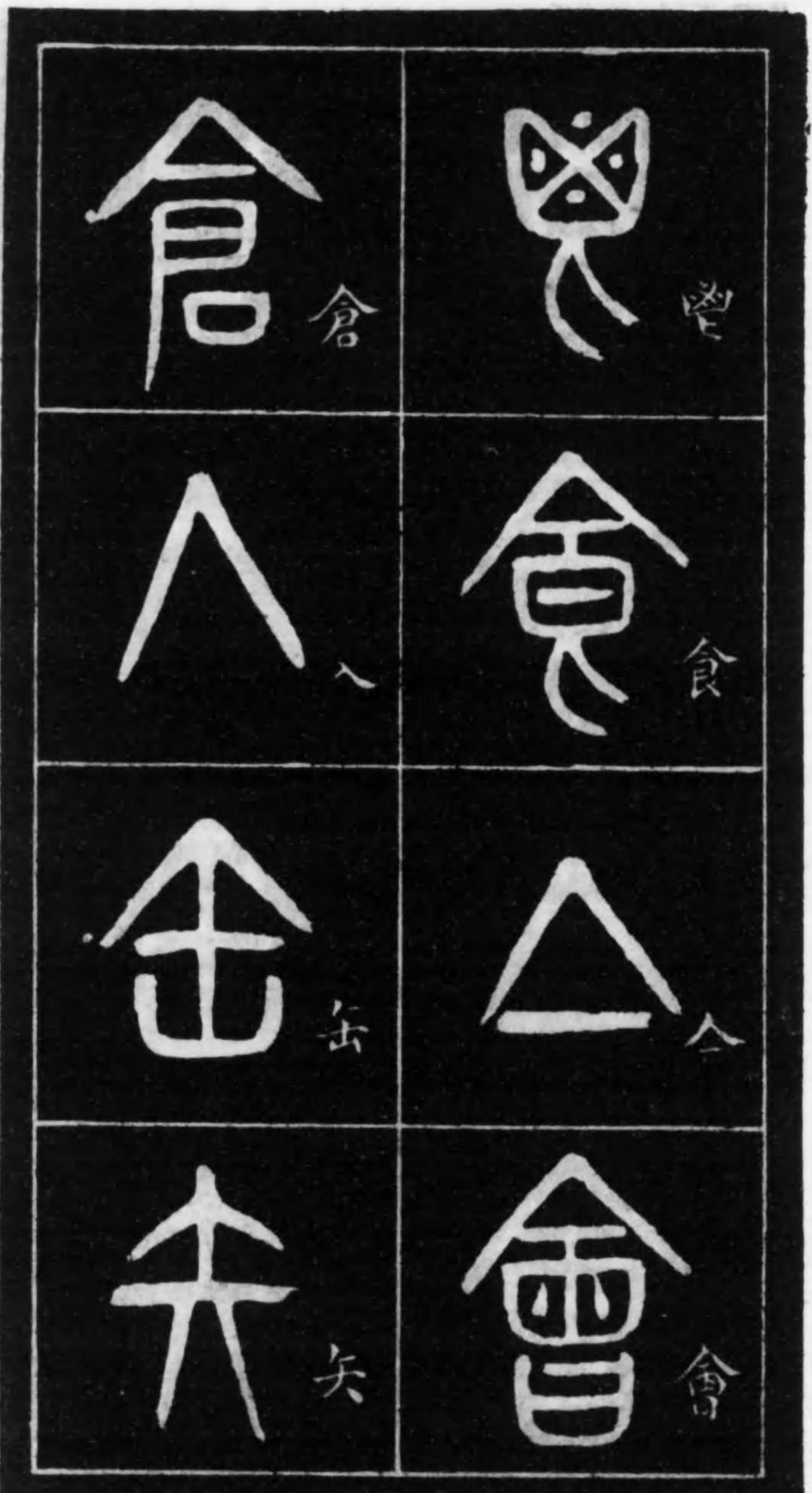
一三



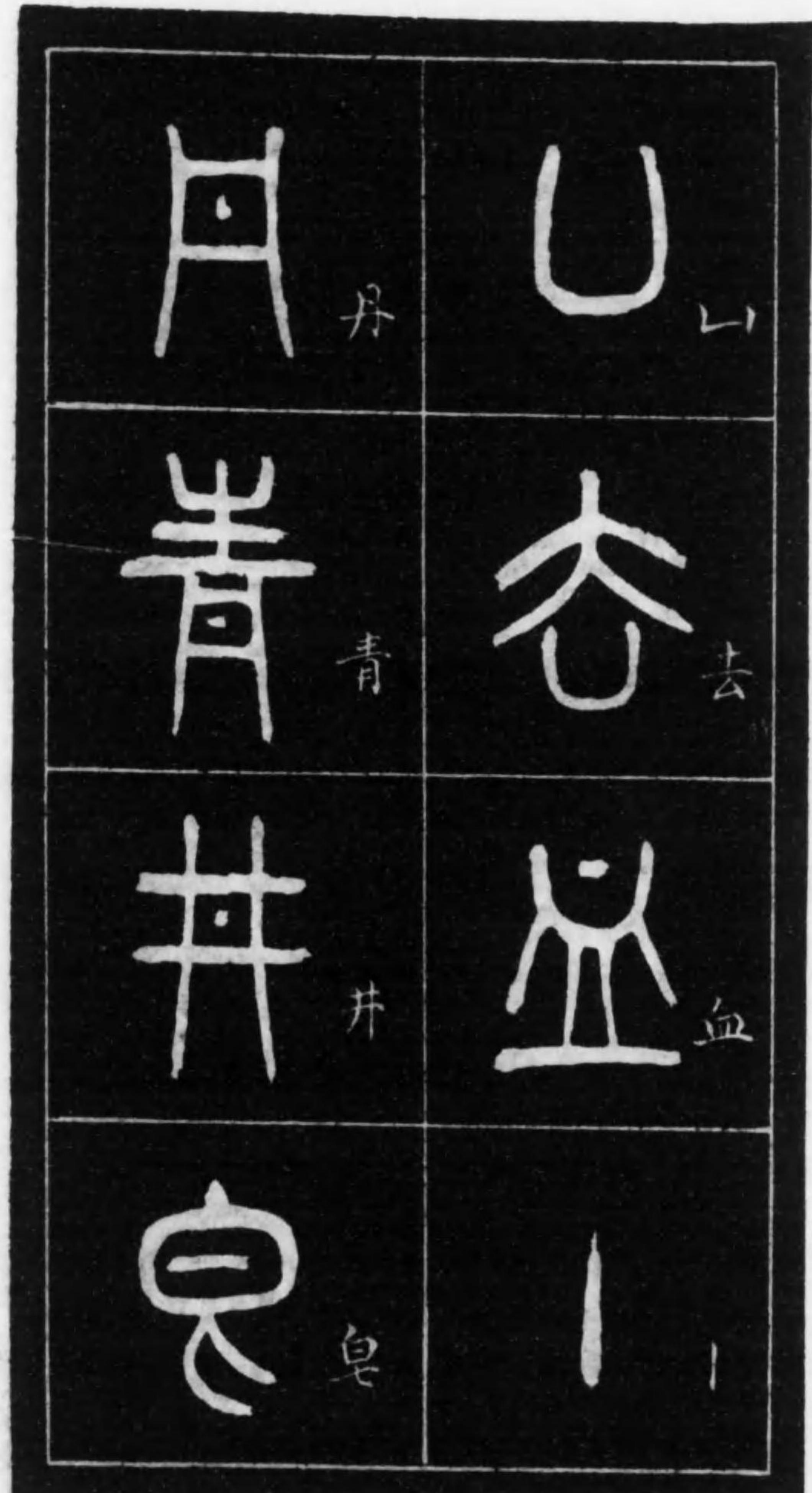


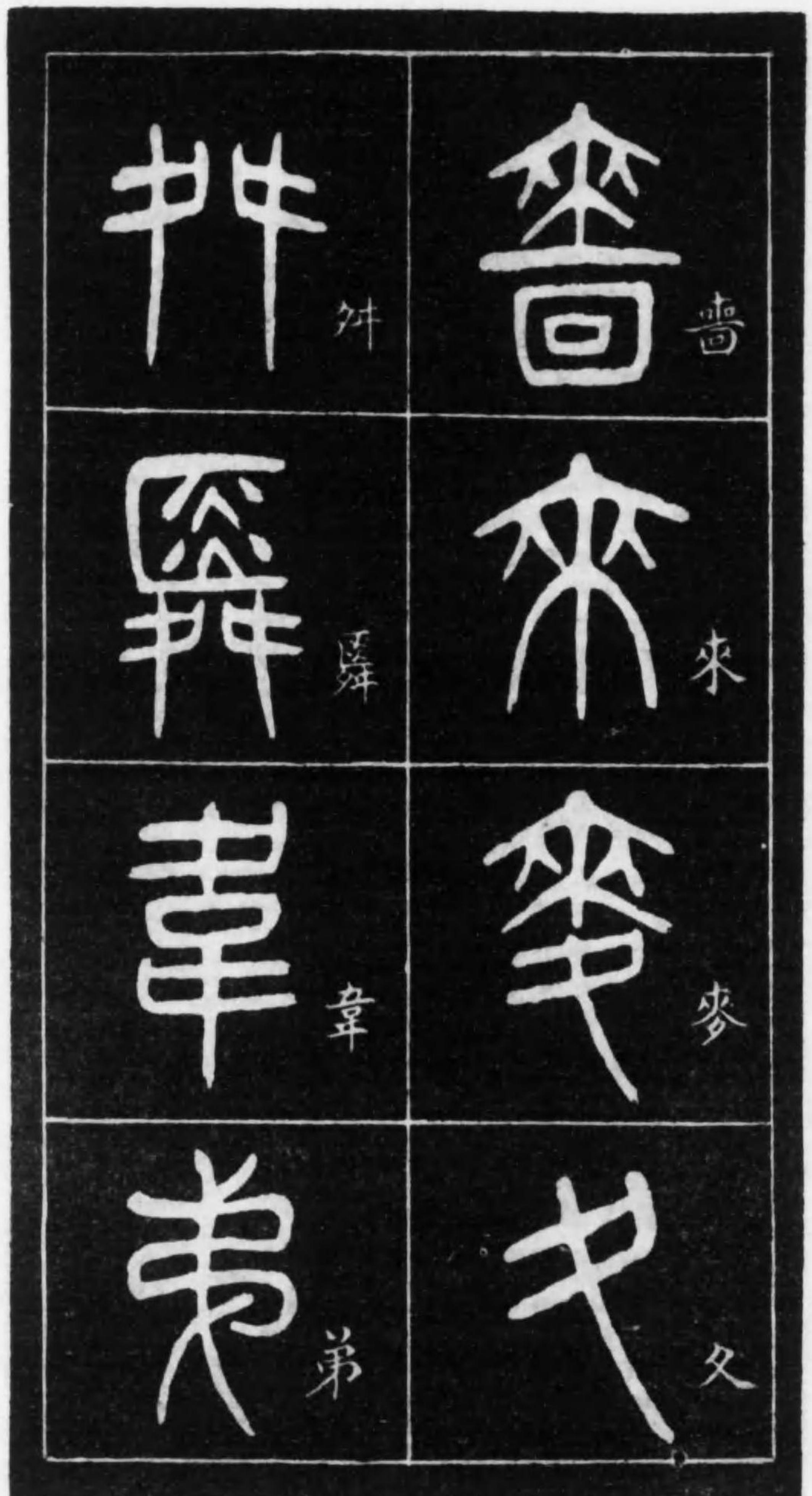
一四



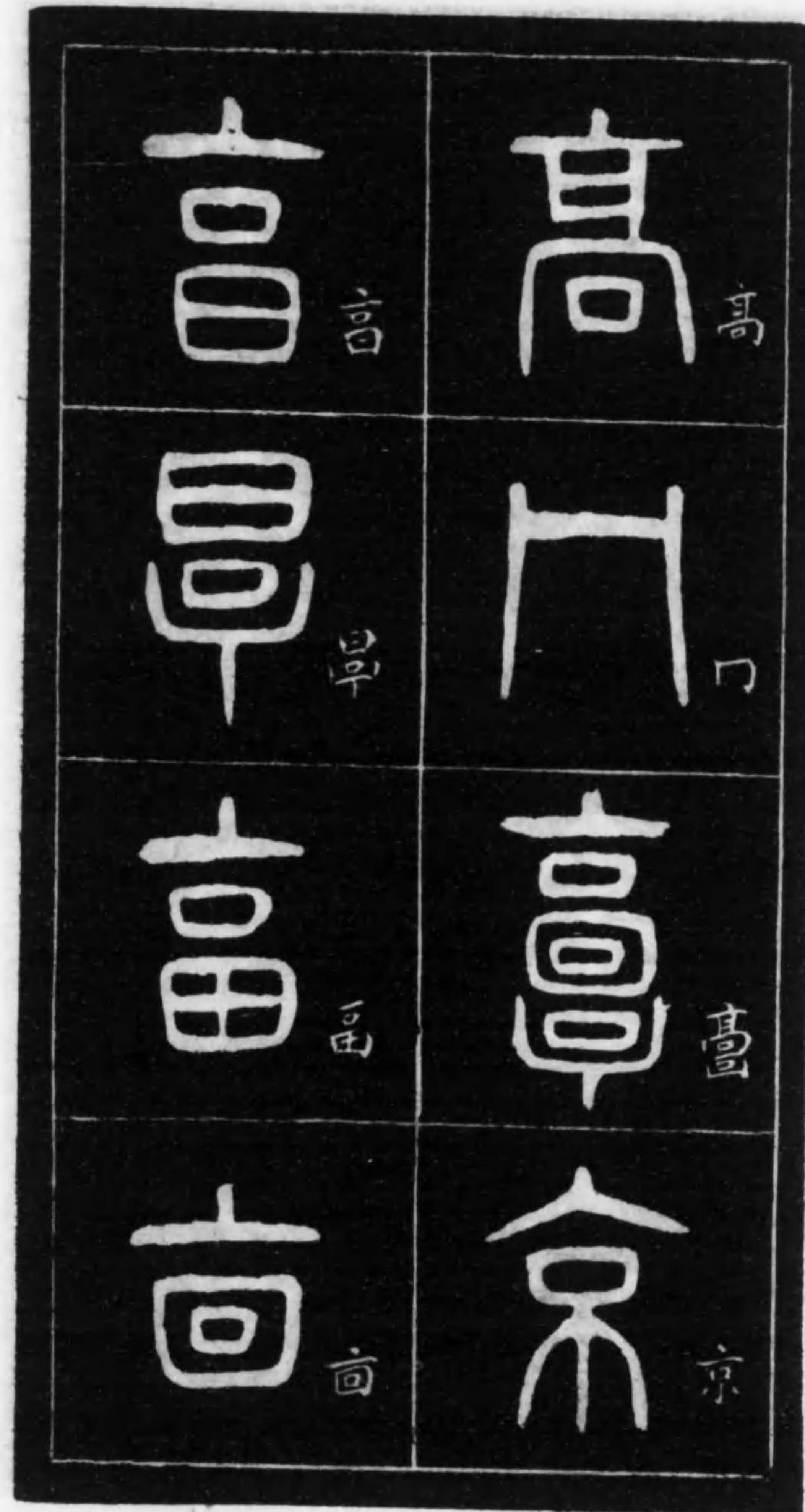


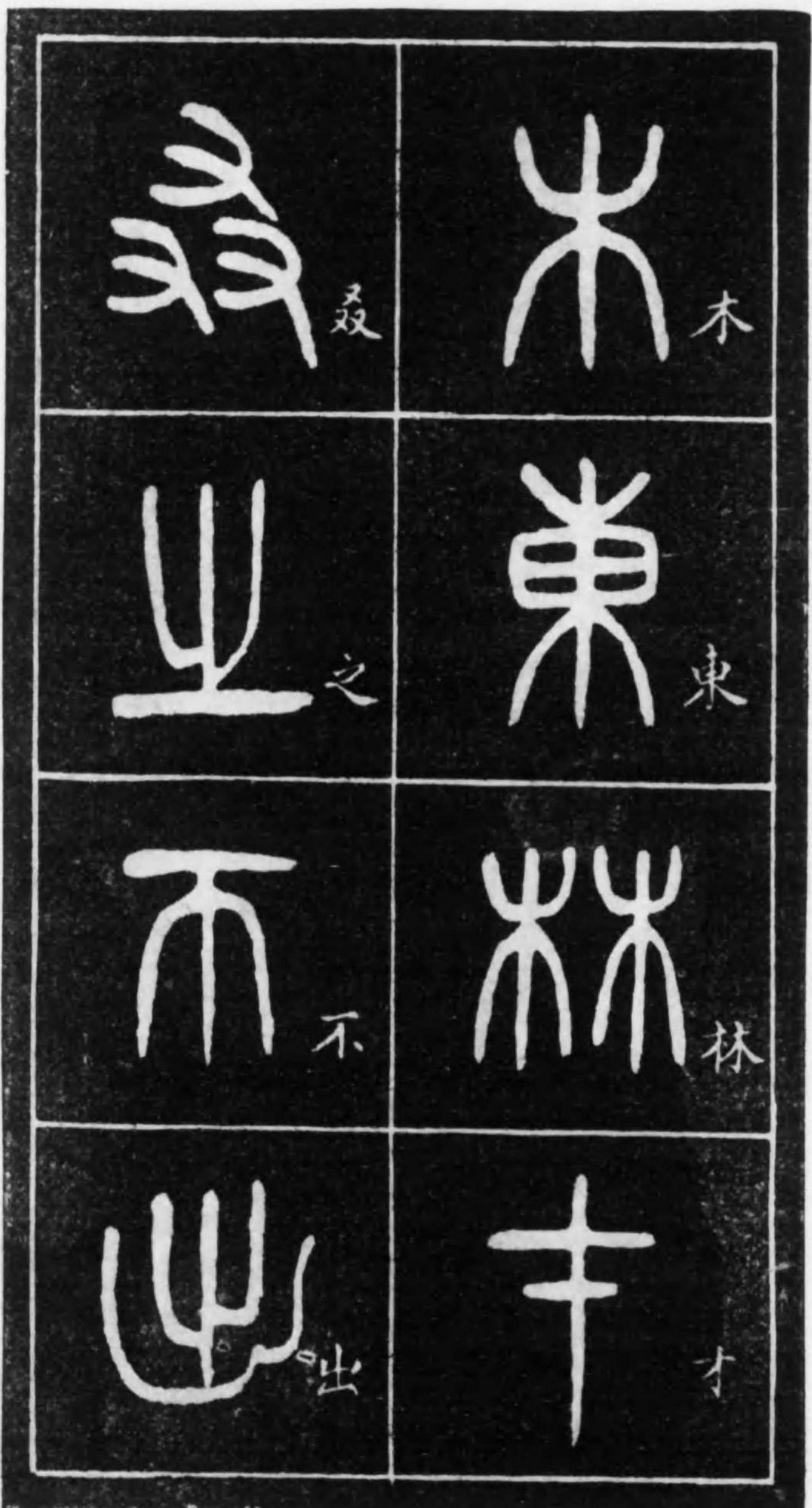
一五



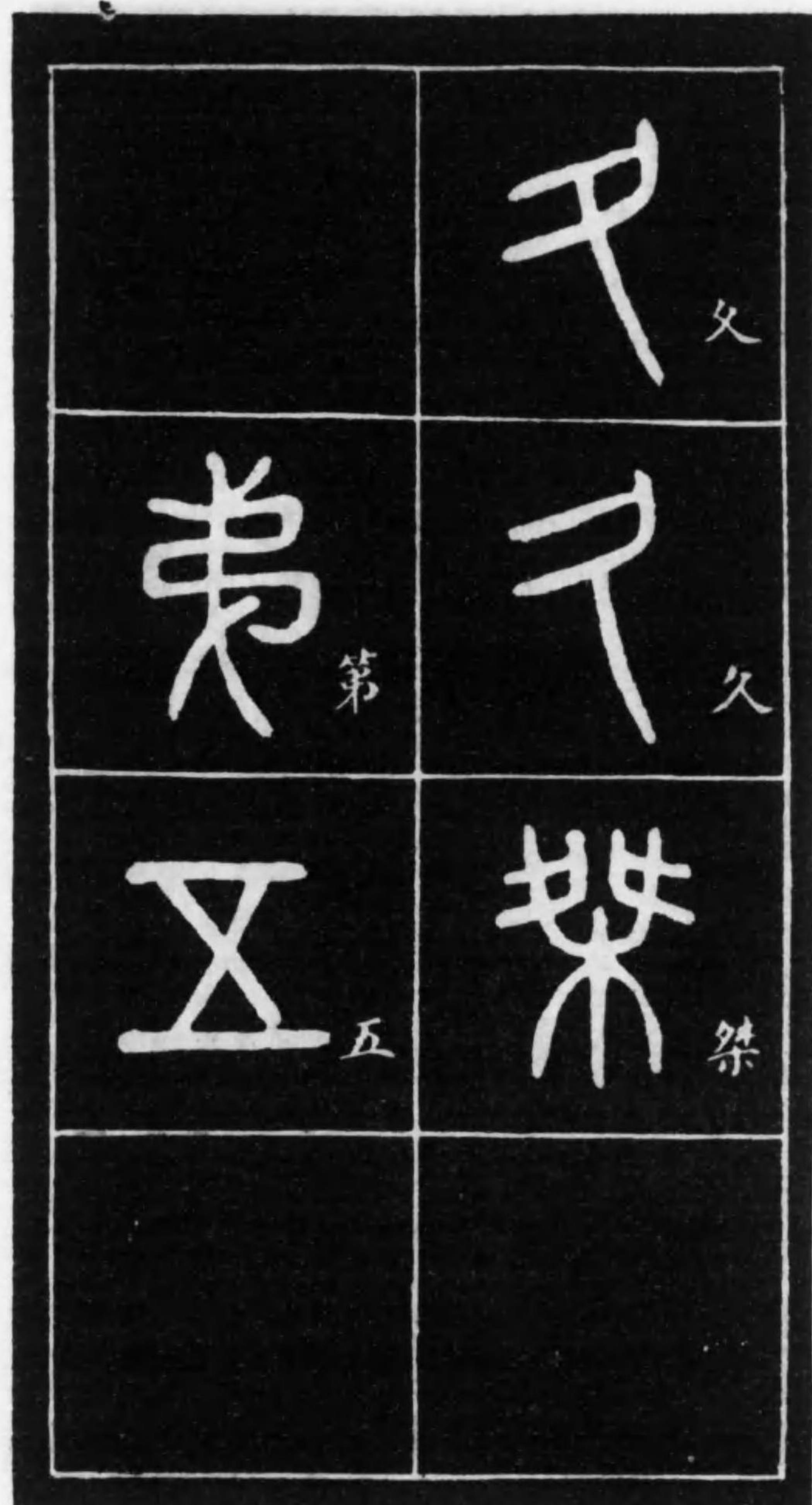


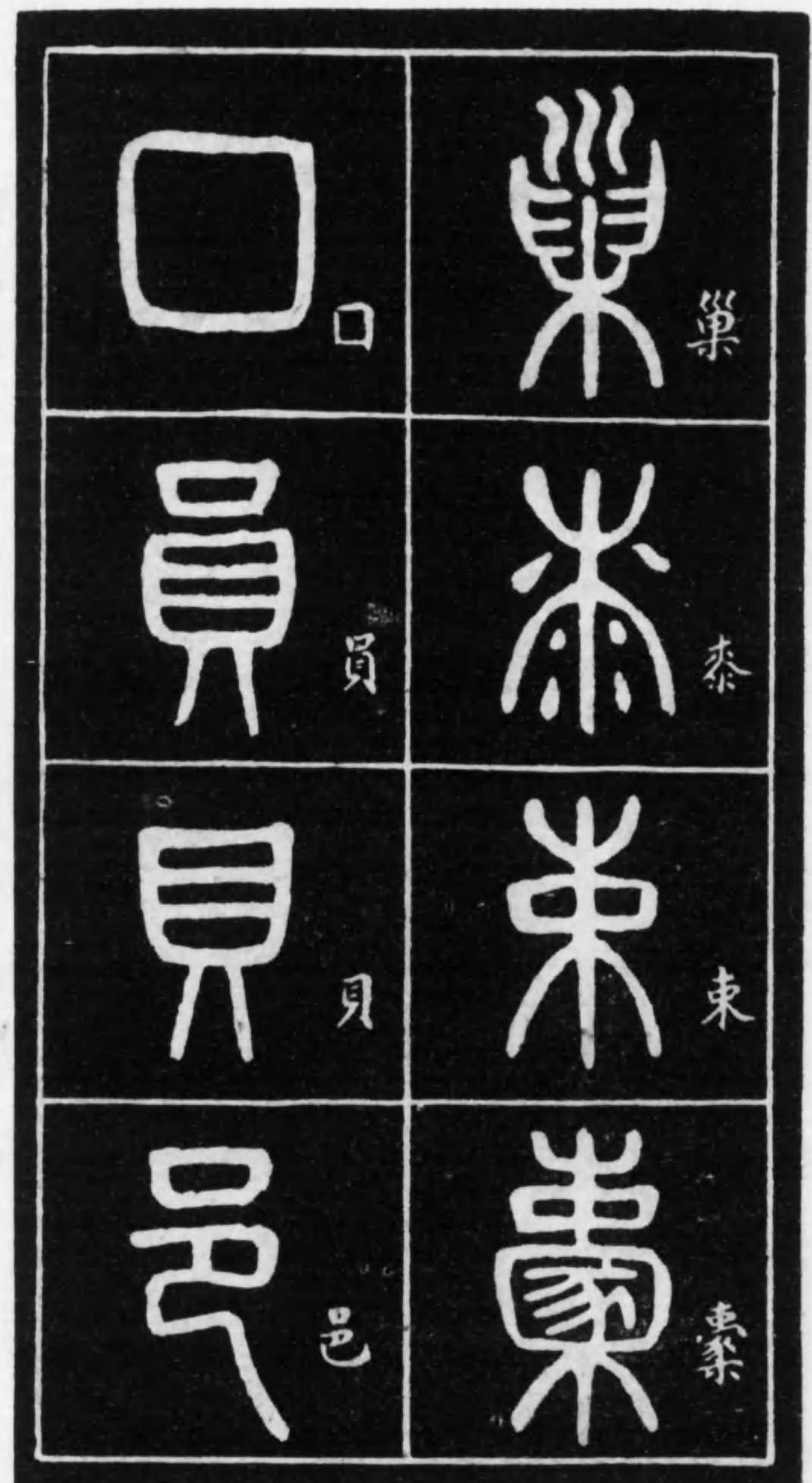
一六



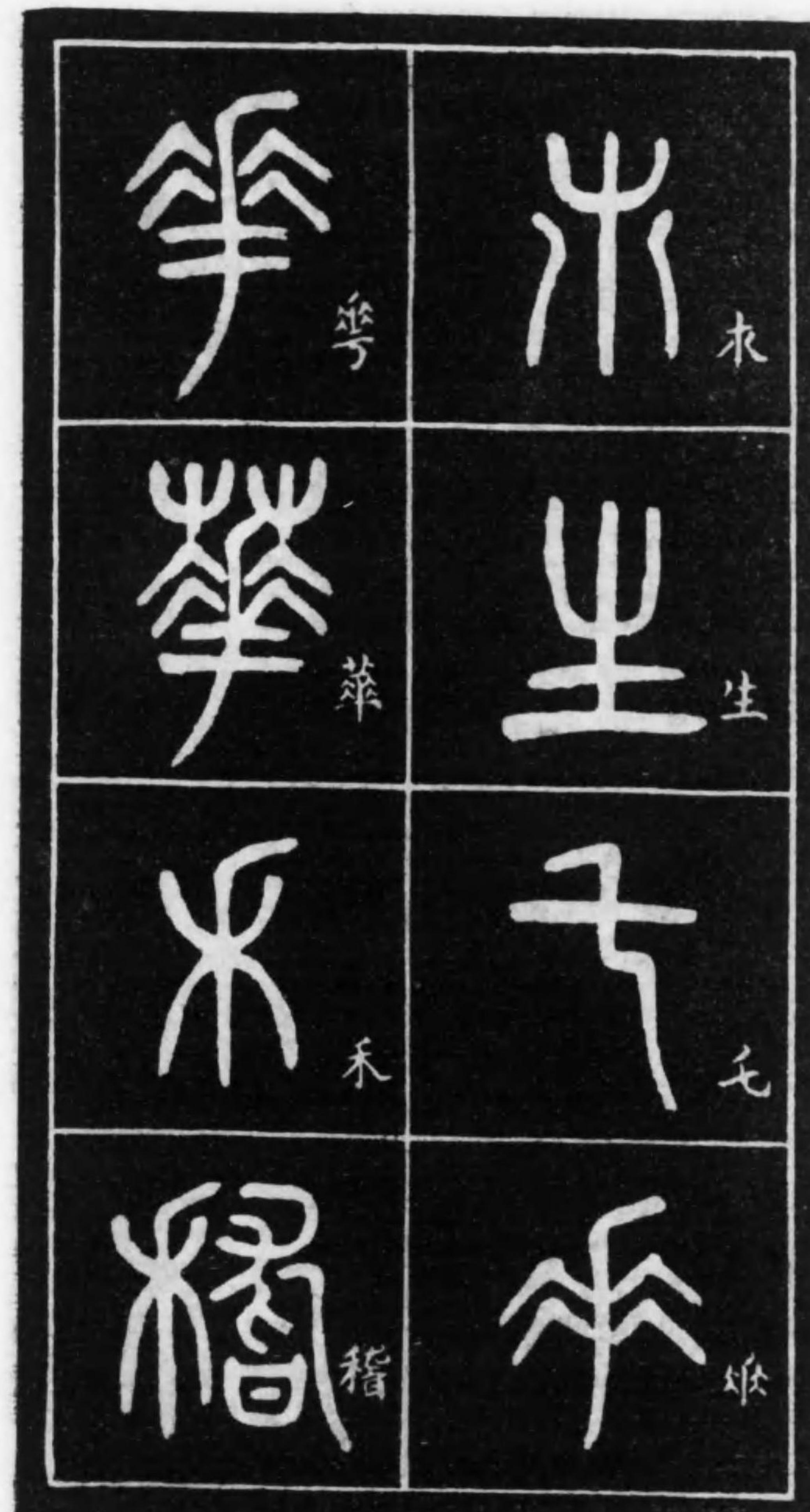


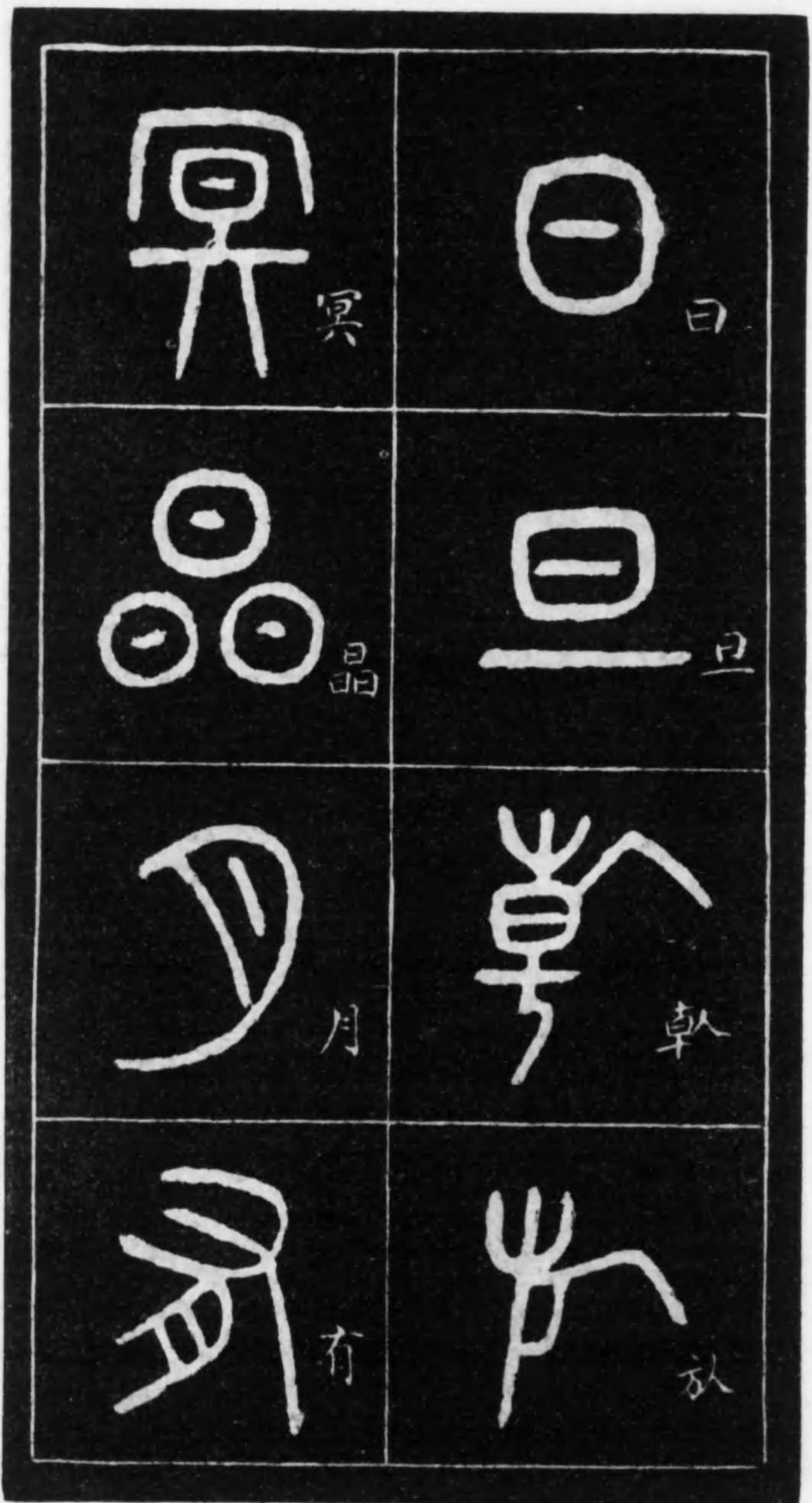
一七



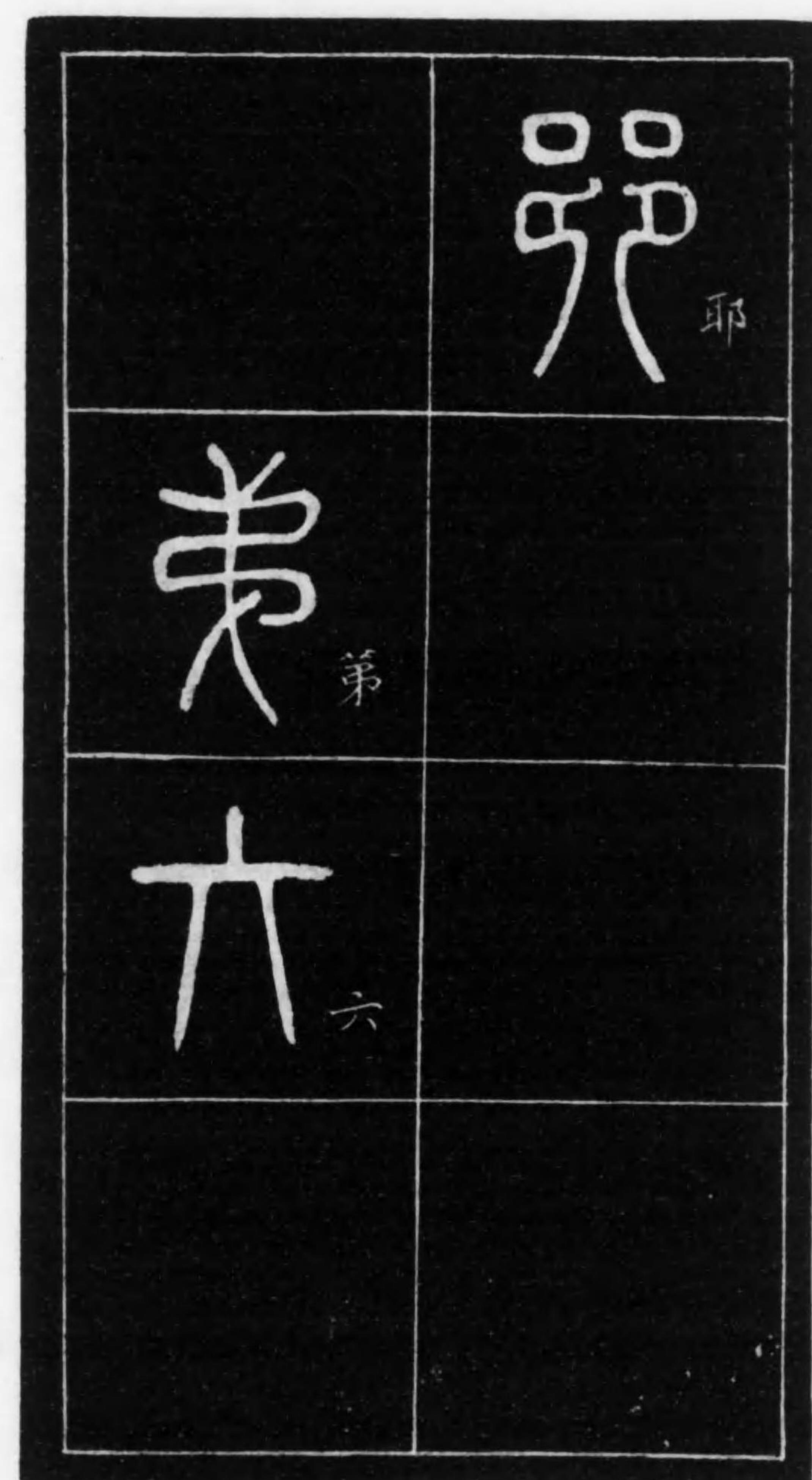


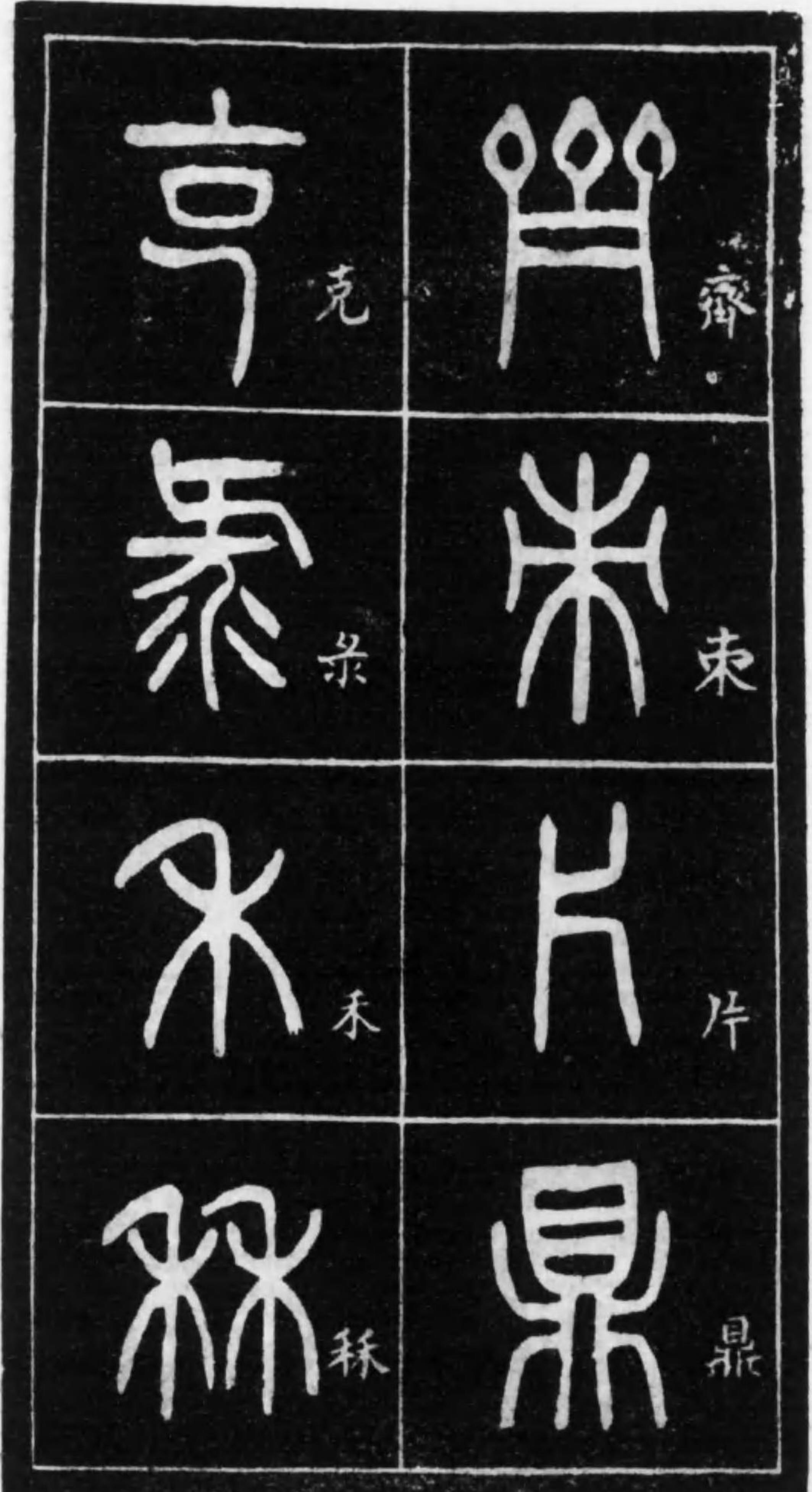
一八



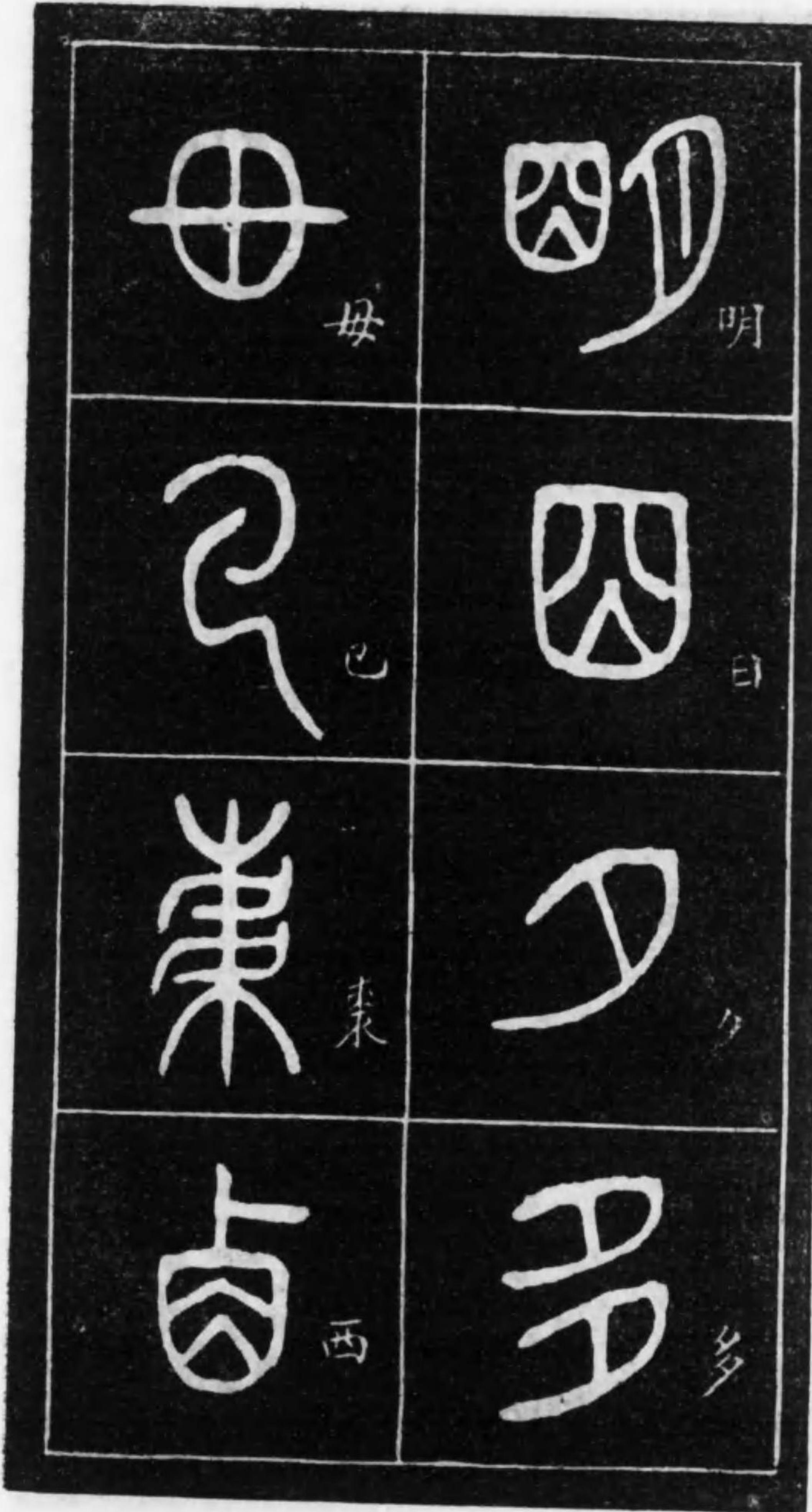


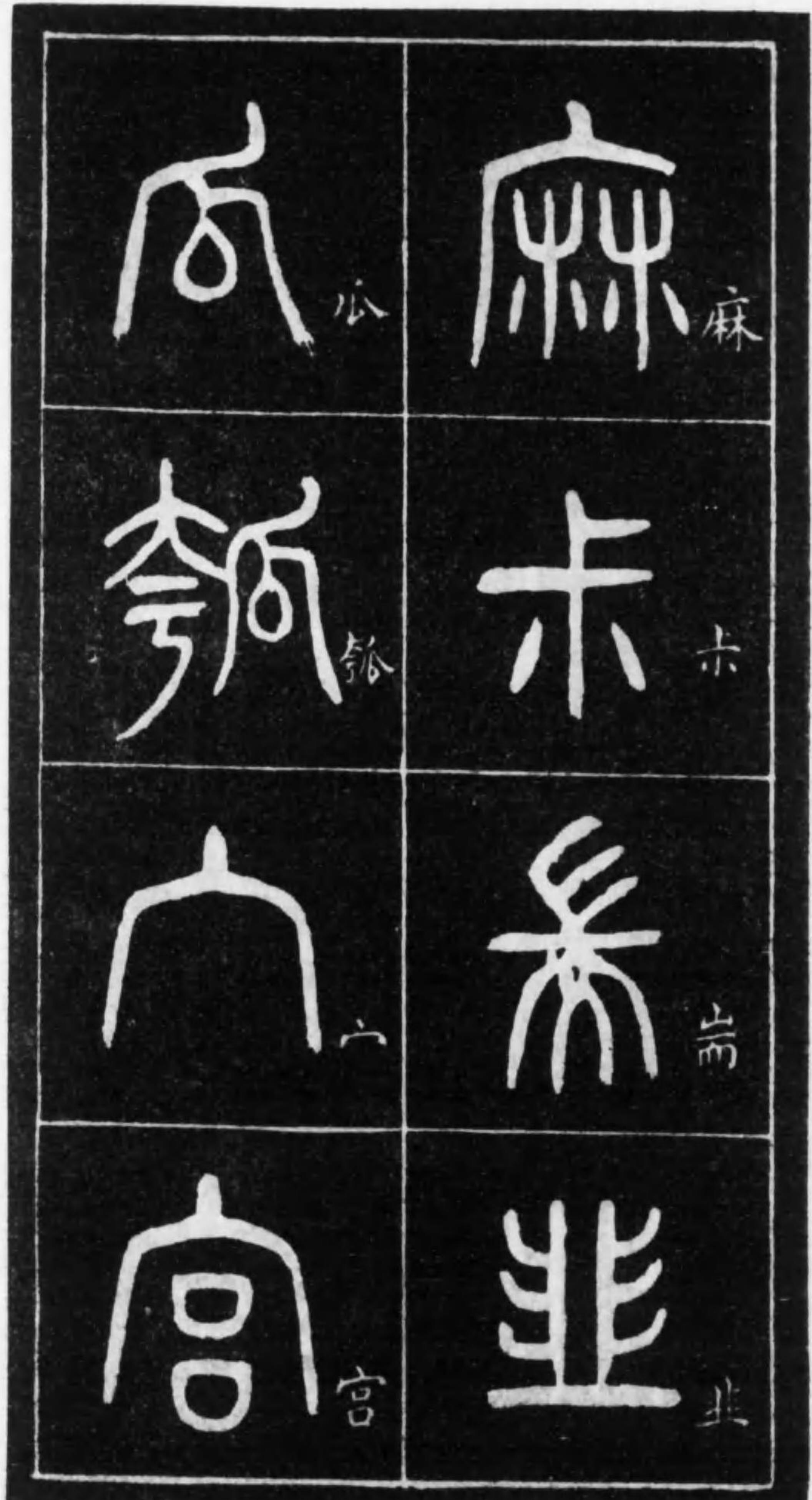
一九



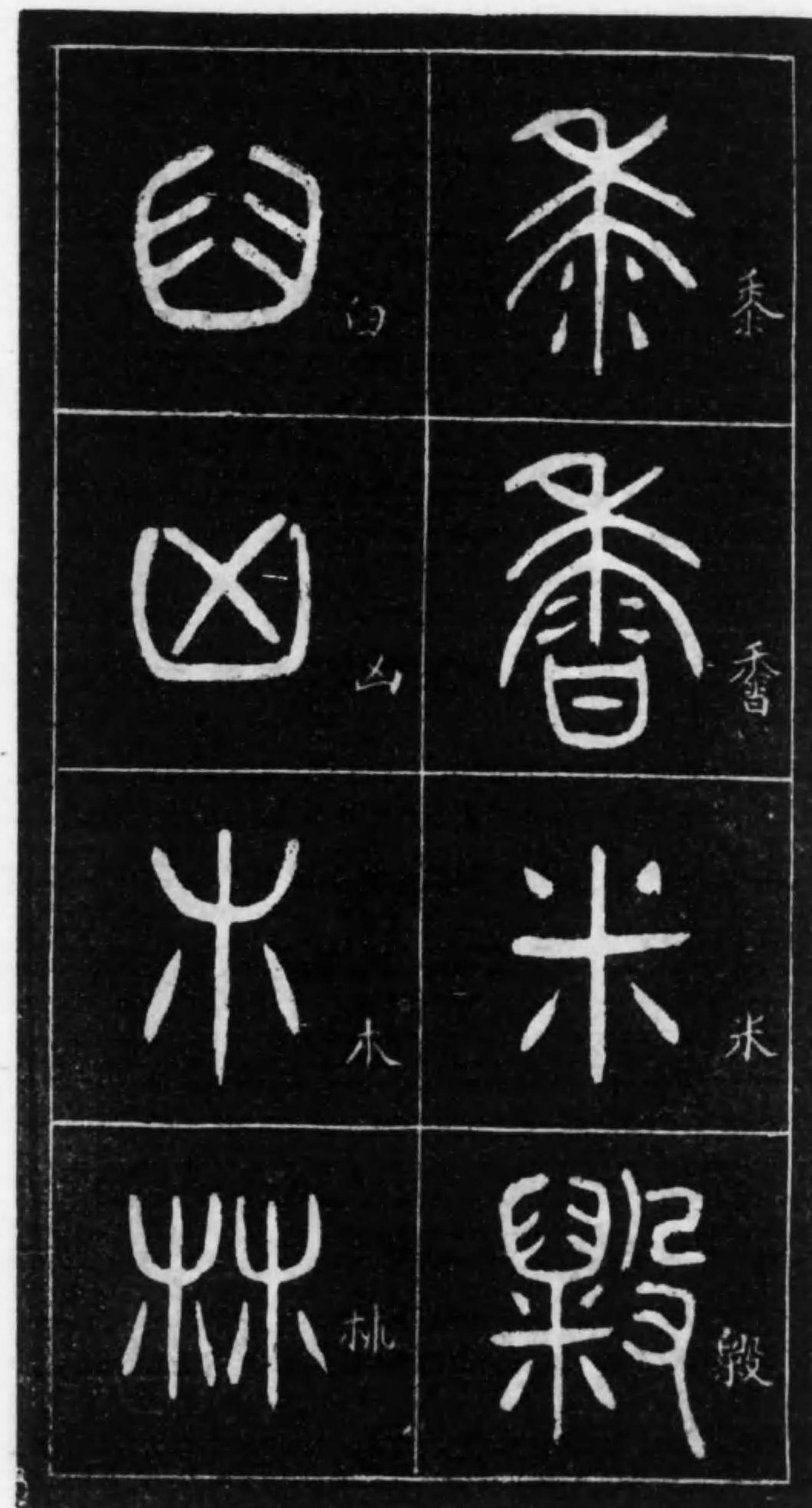


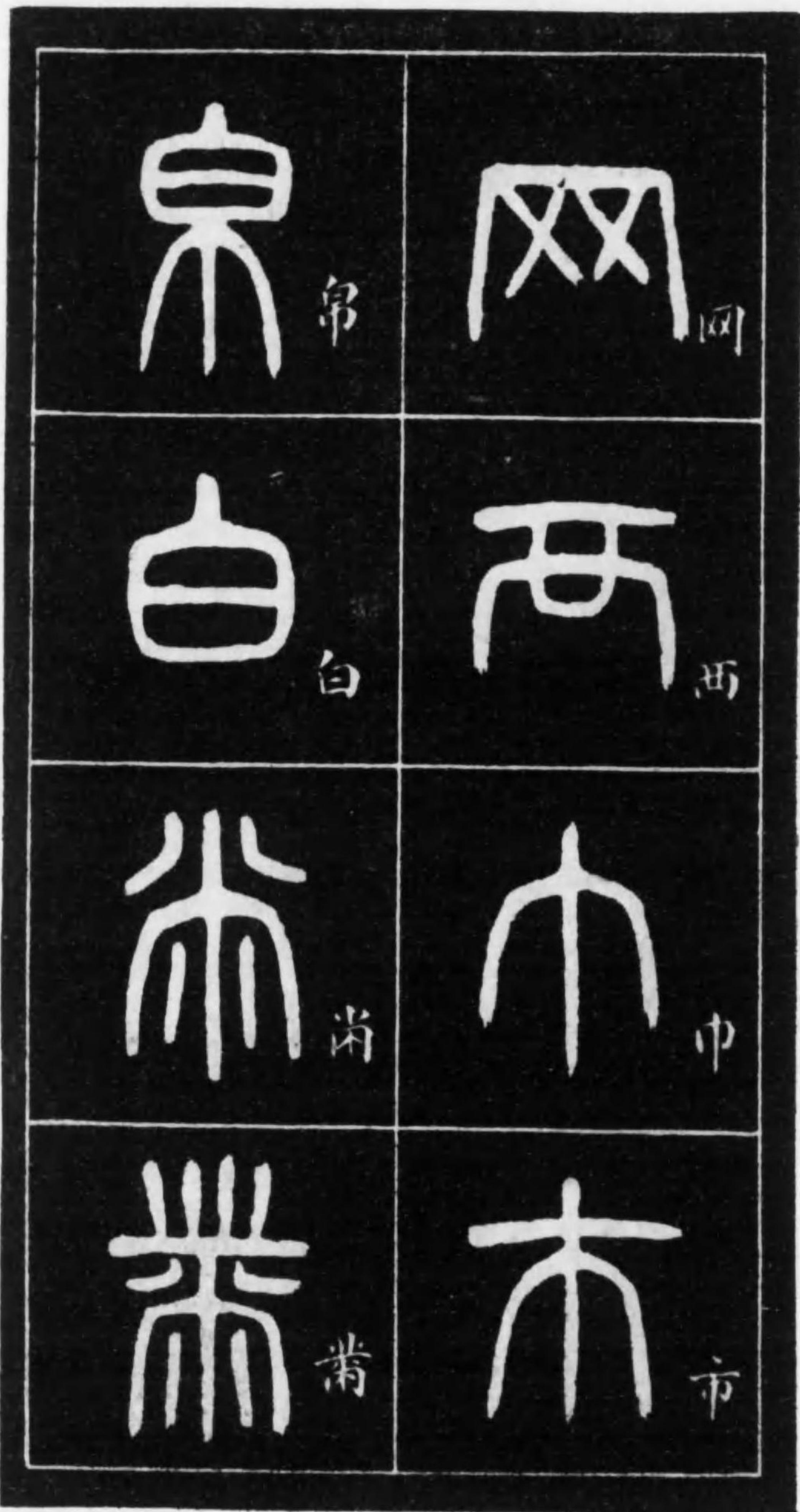
二〇



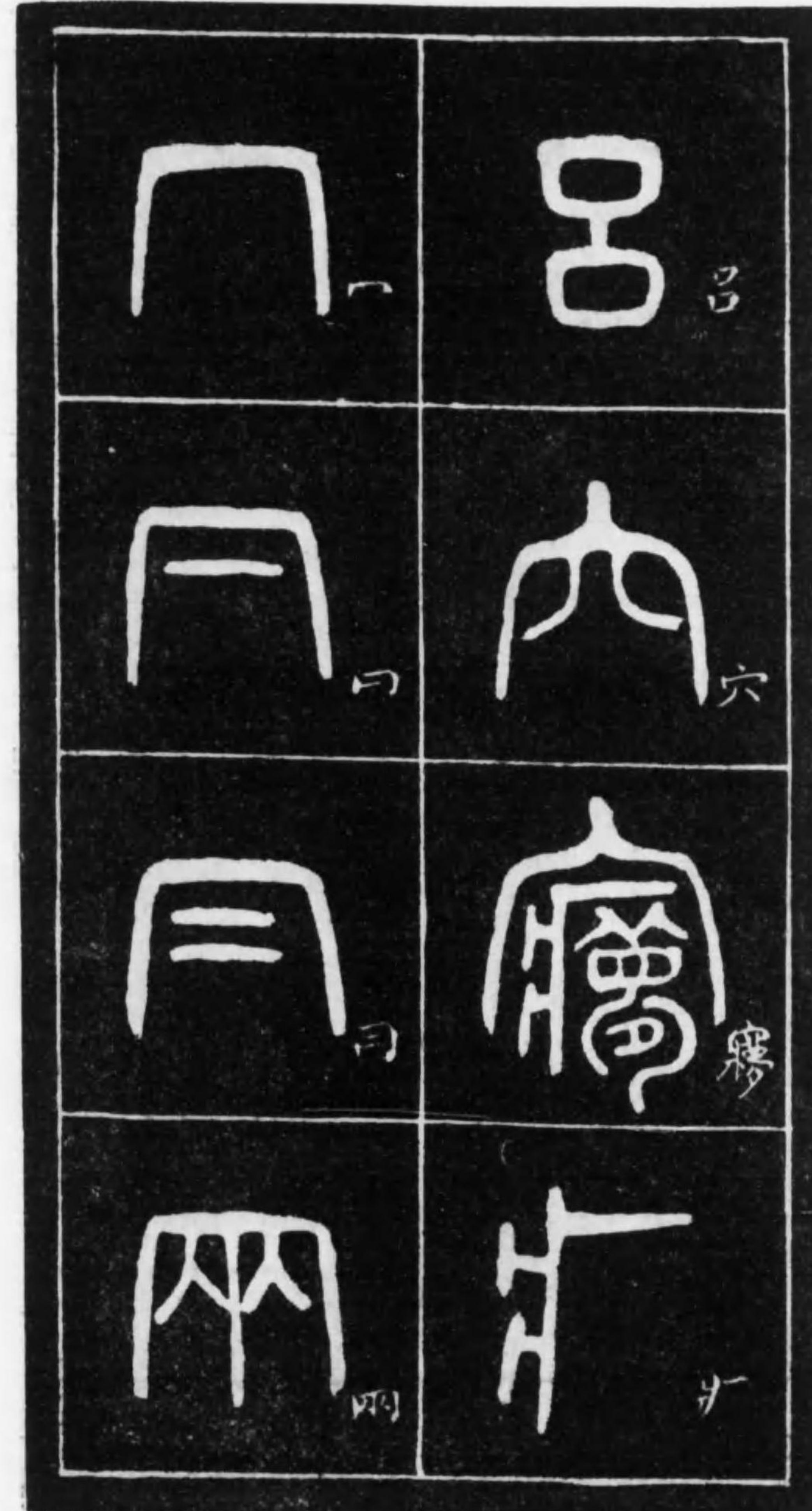


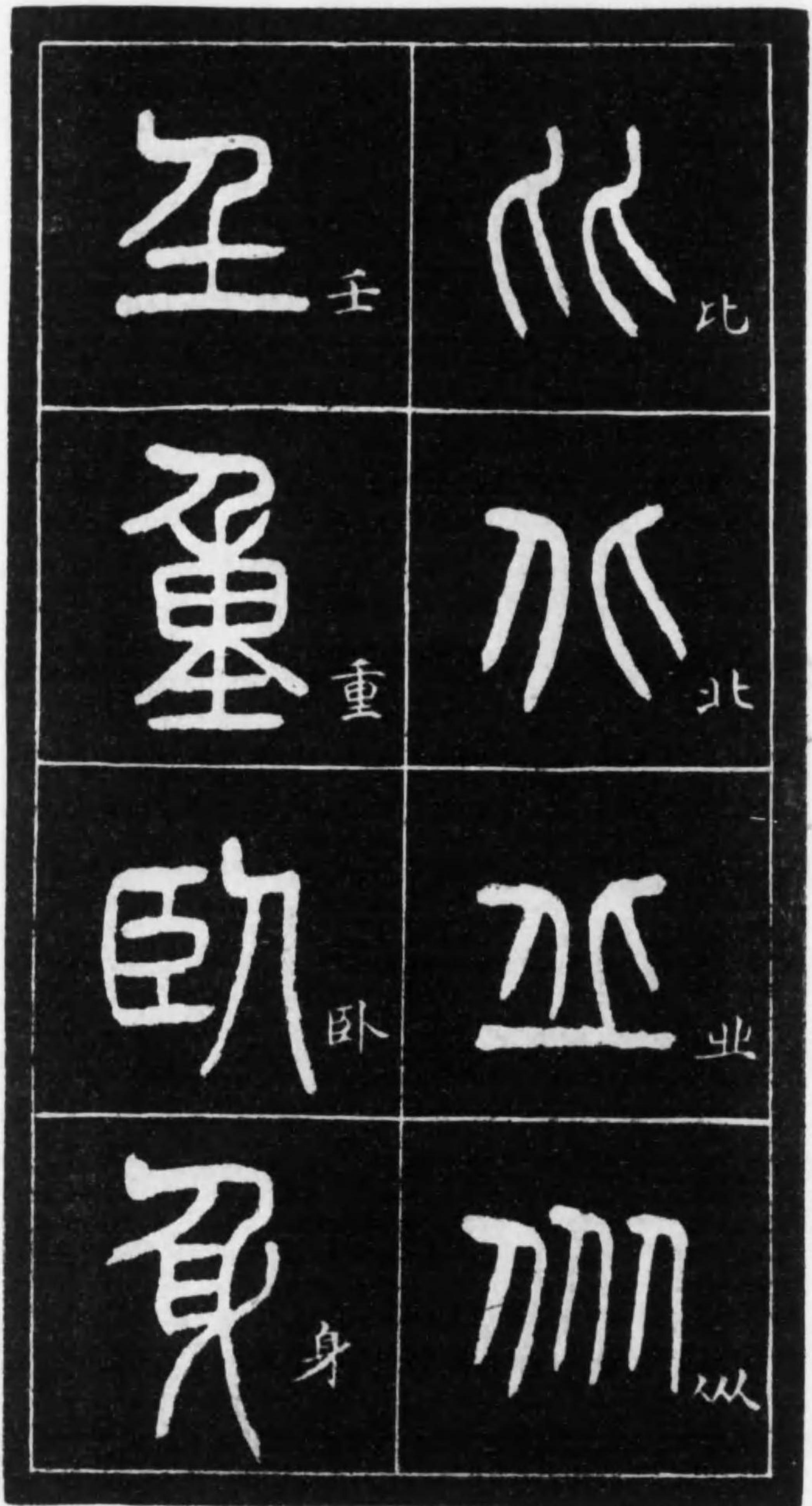
三



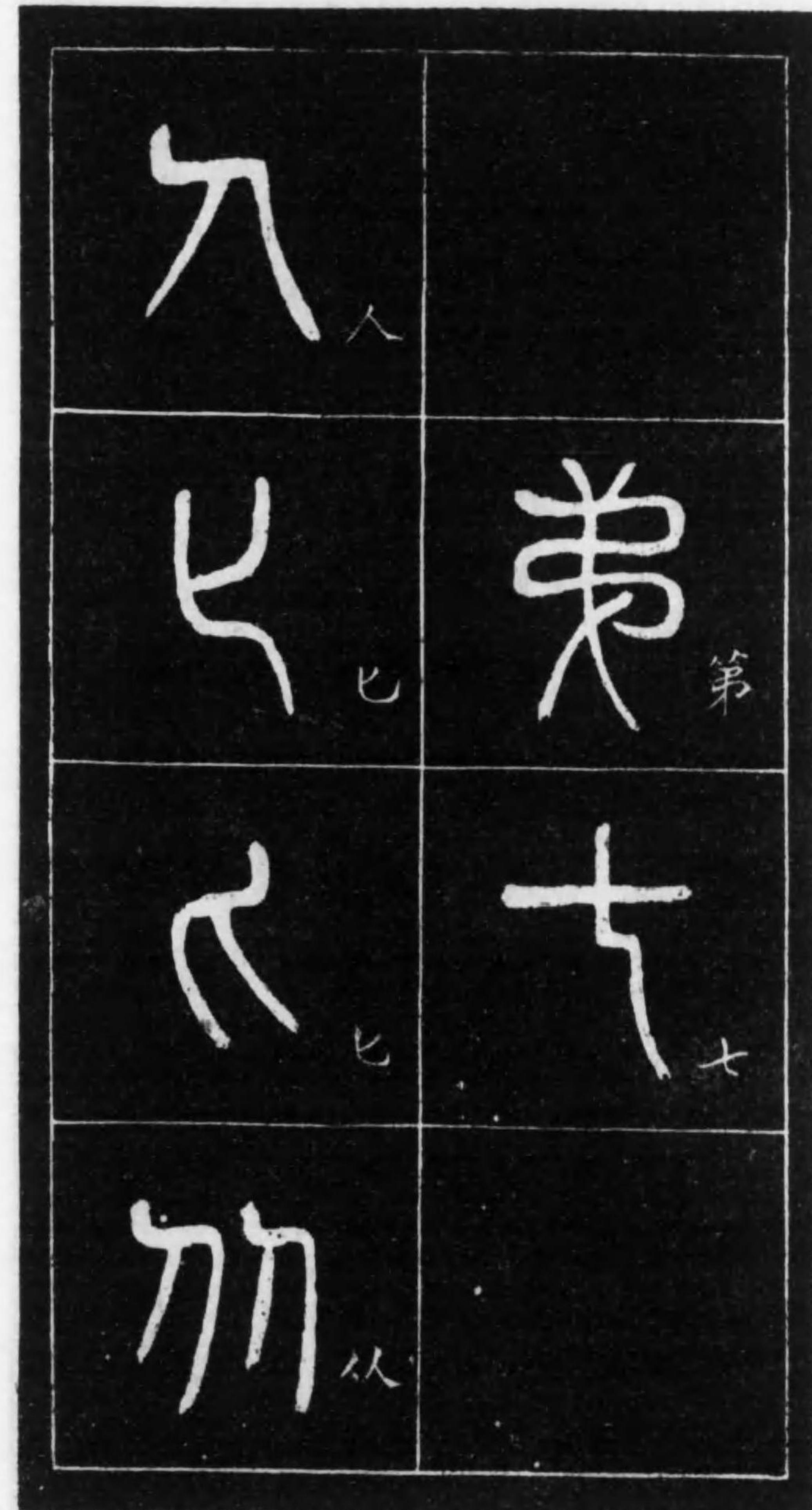


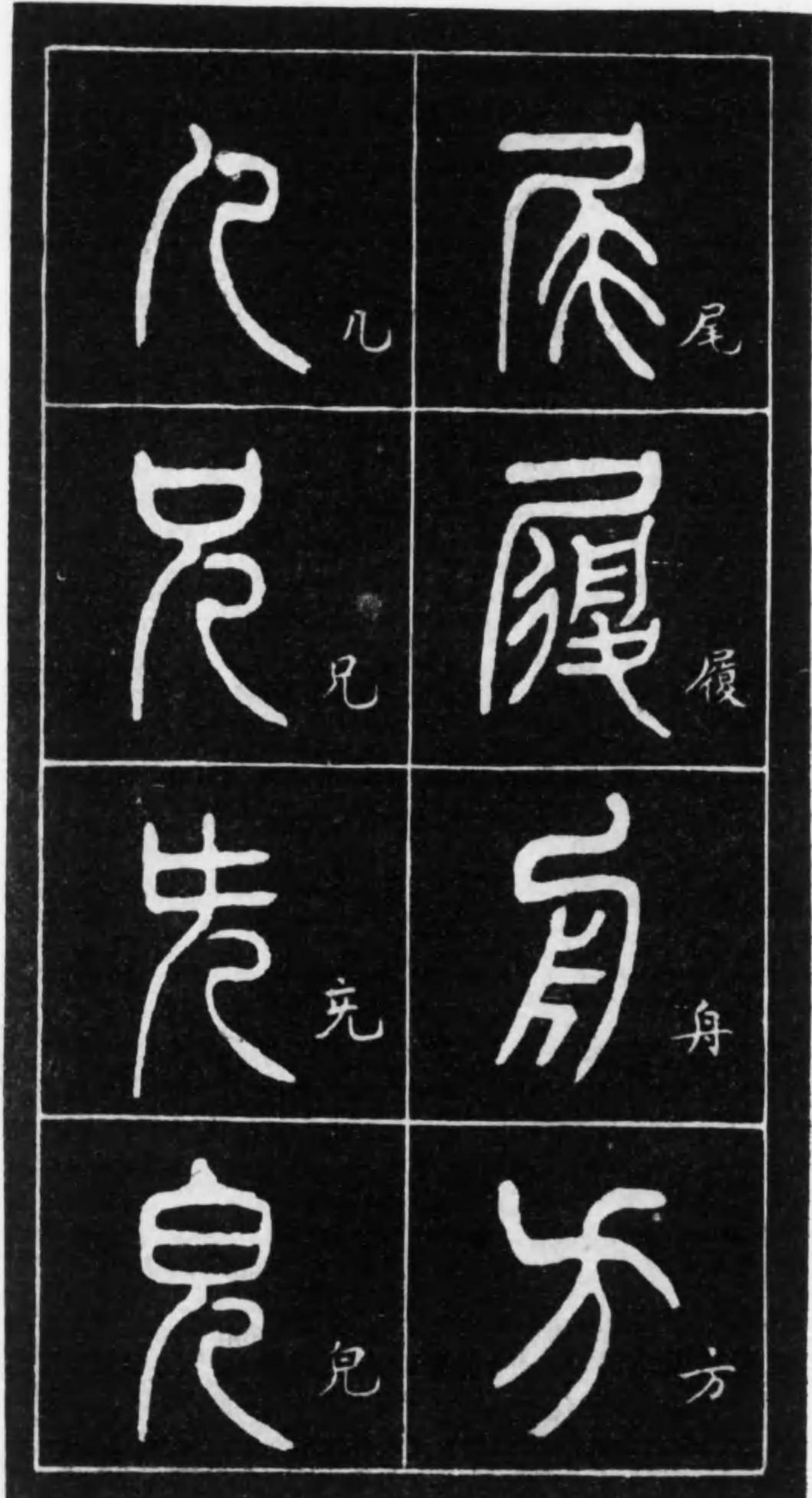
三



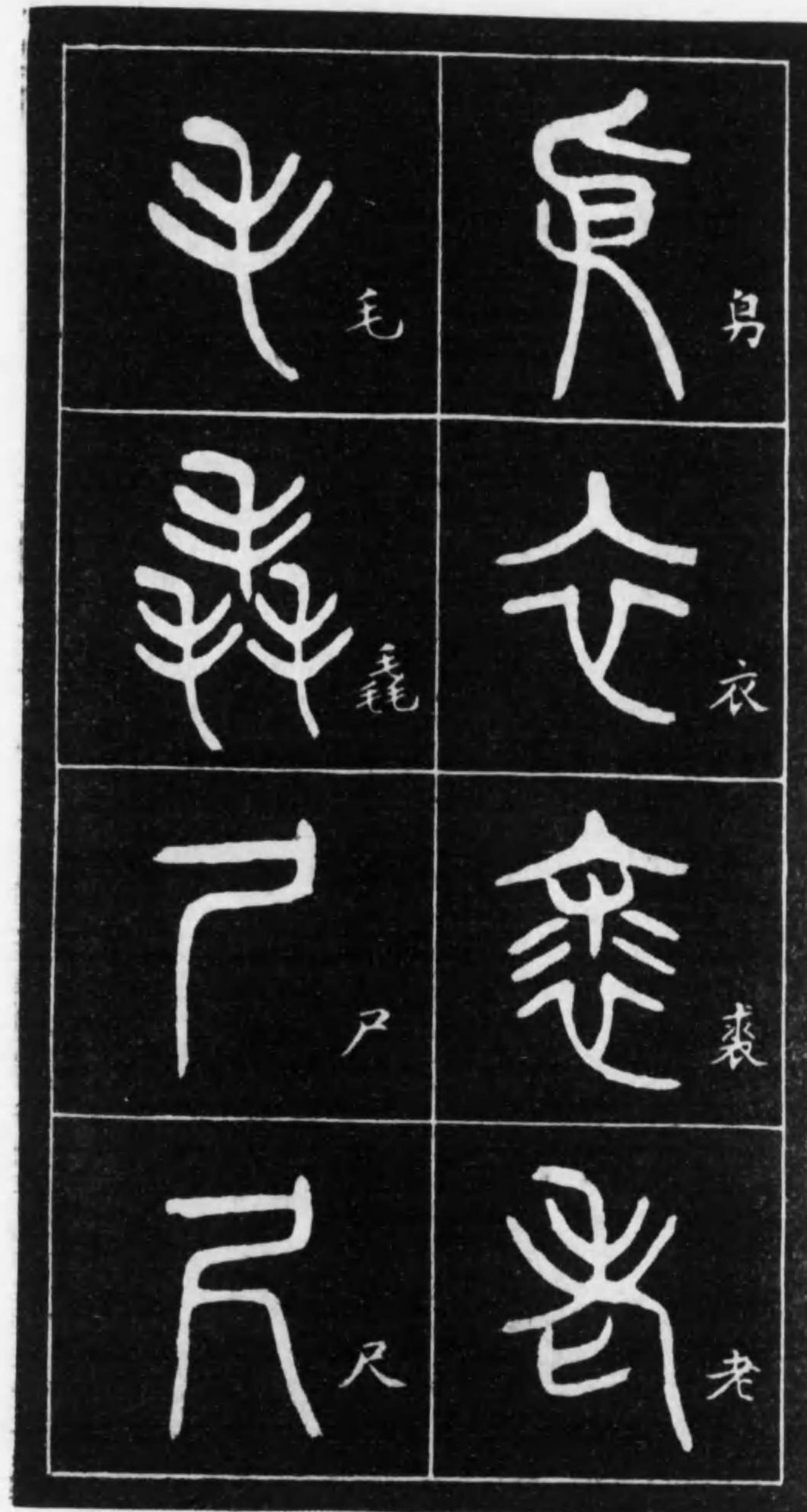


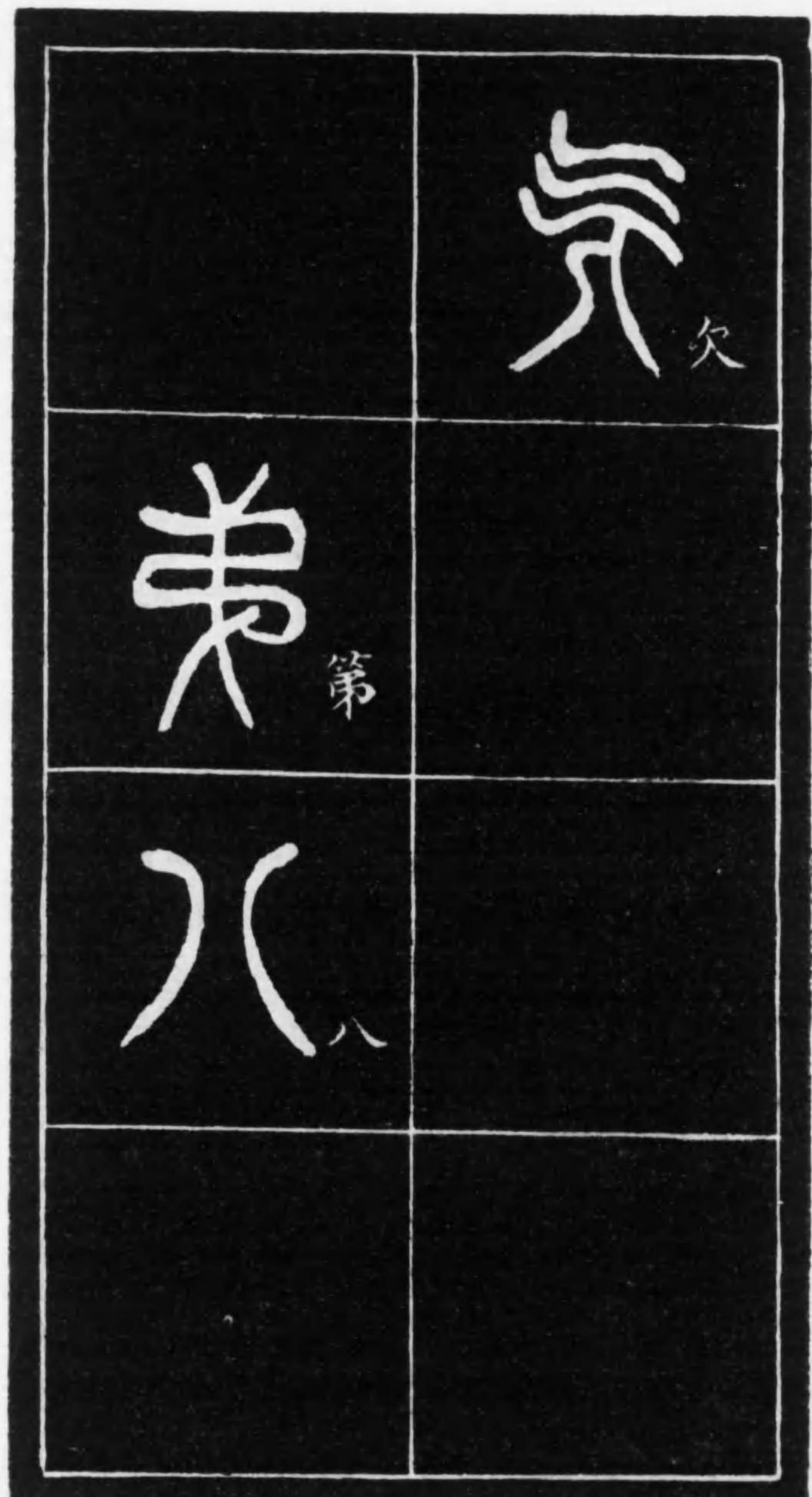
三



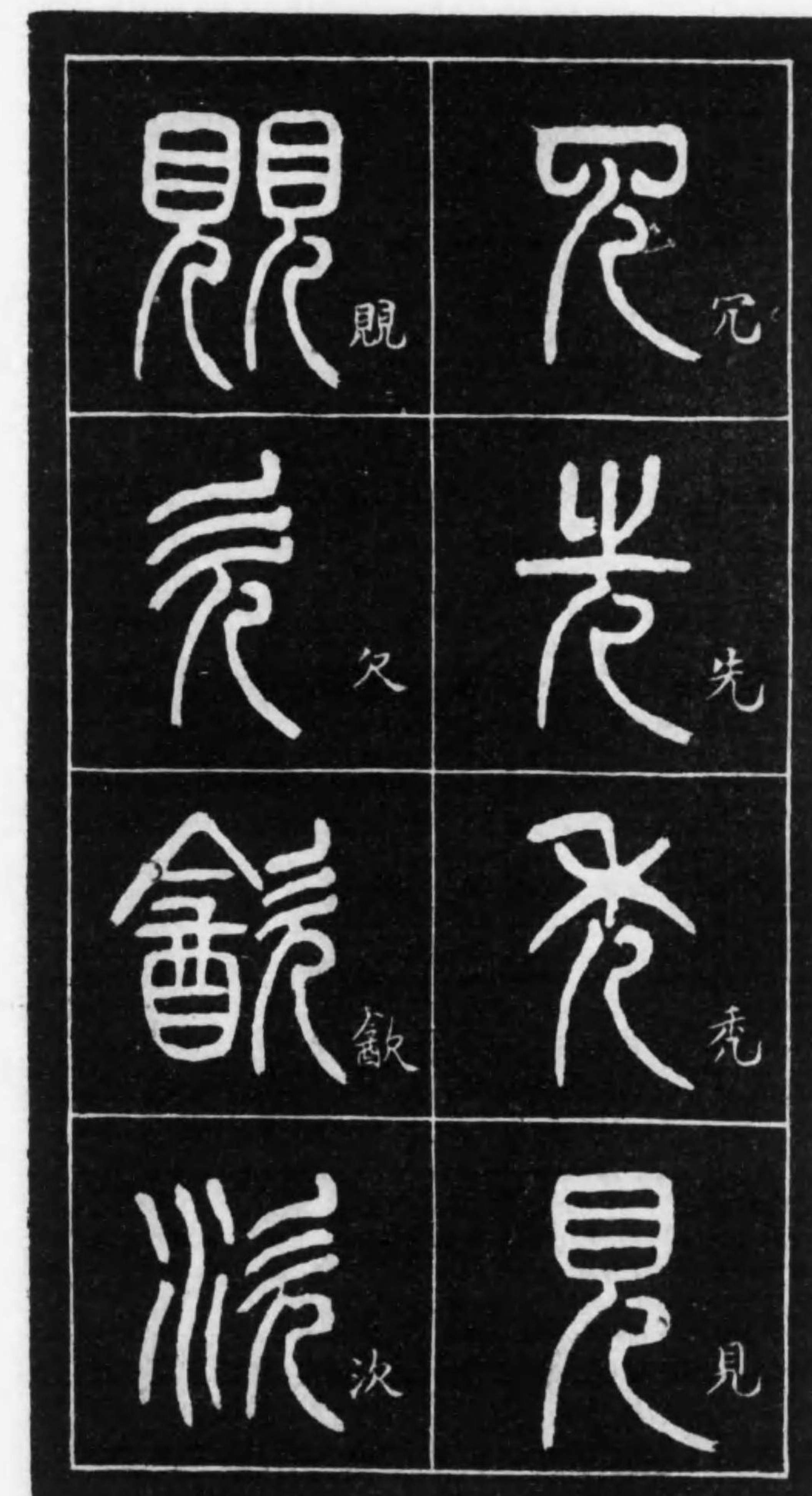


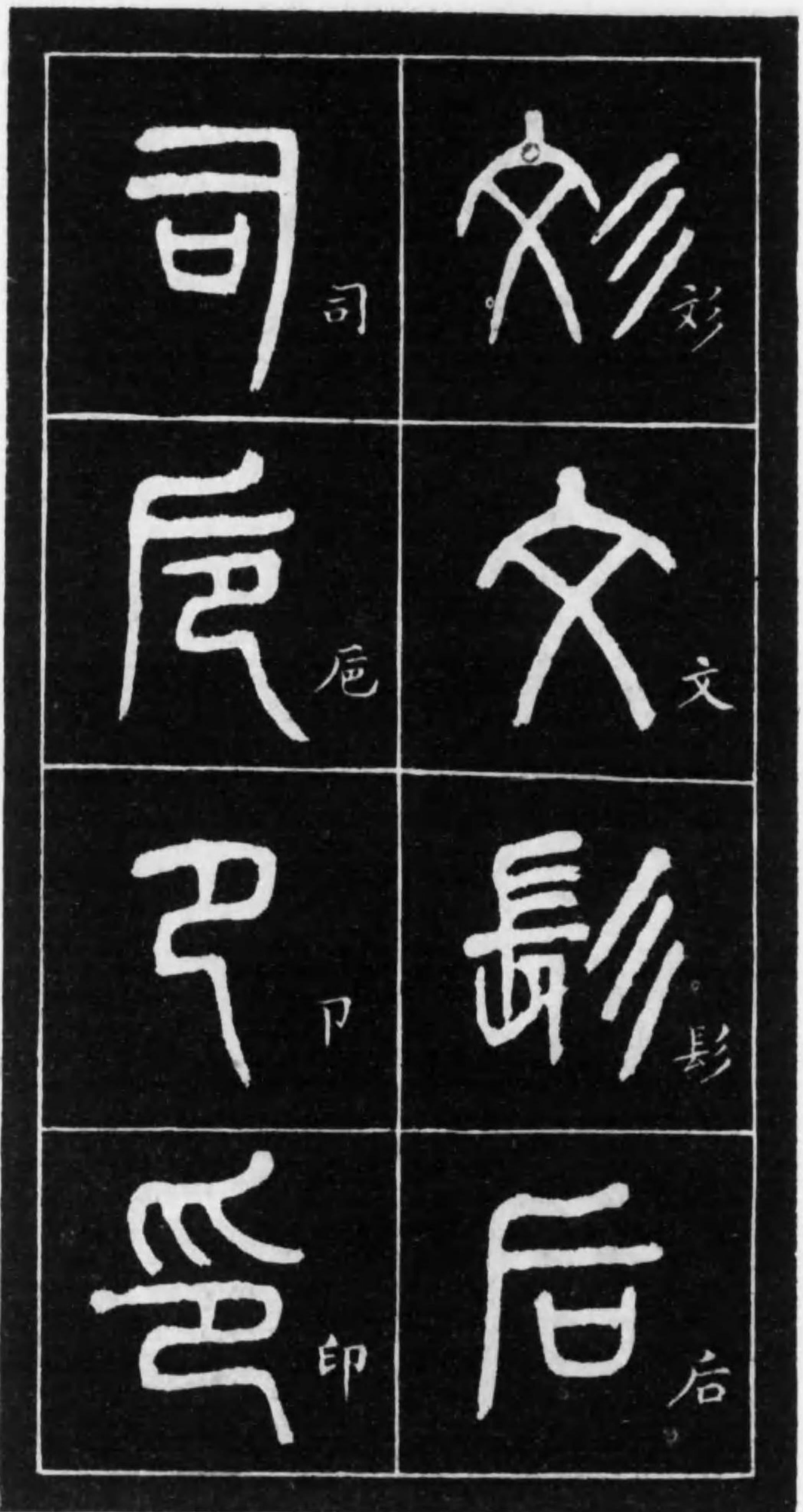
二四





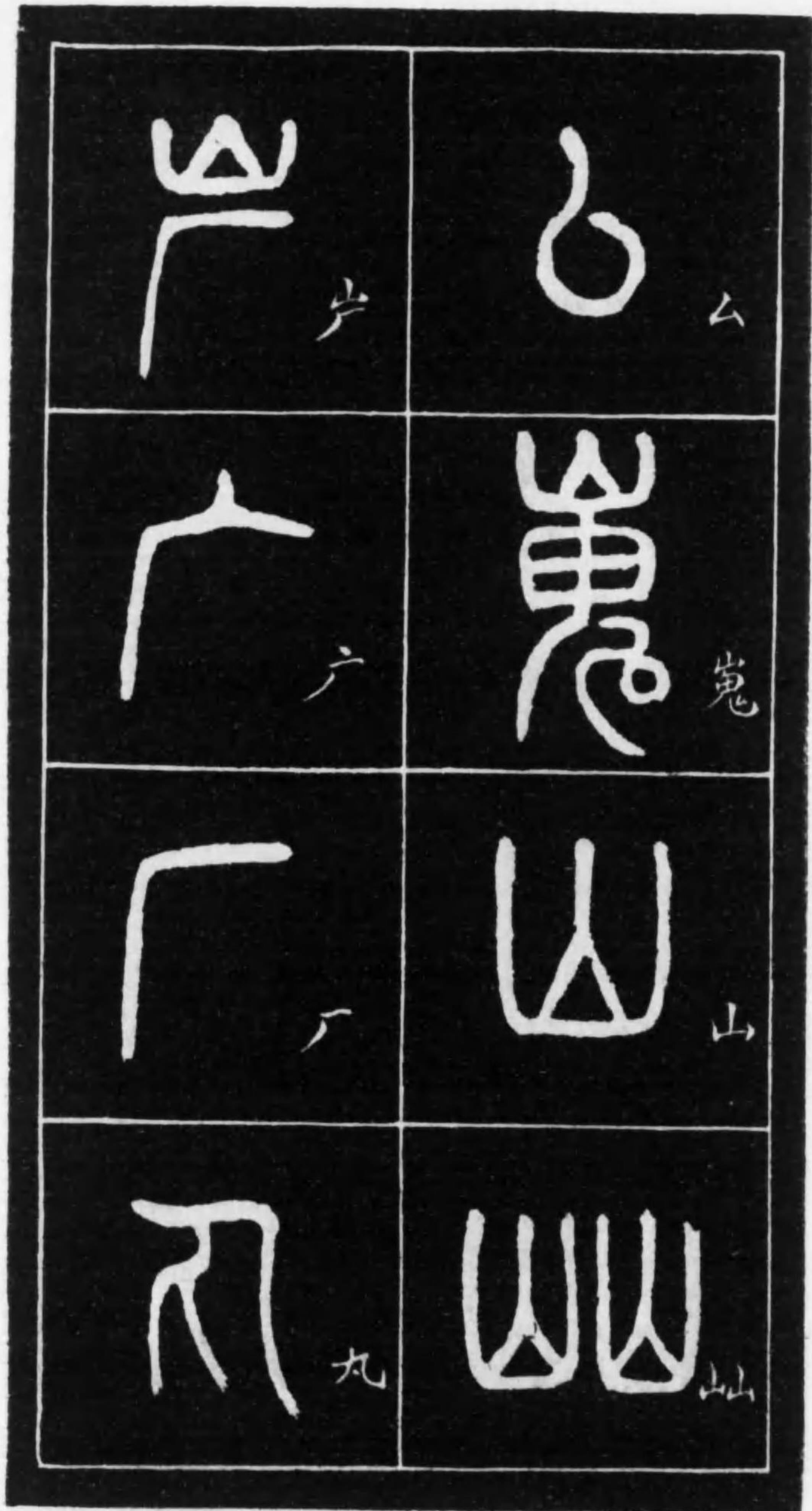
二五





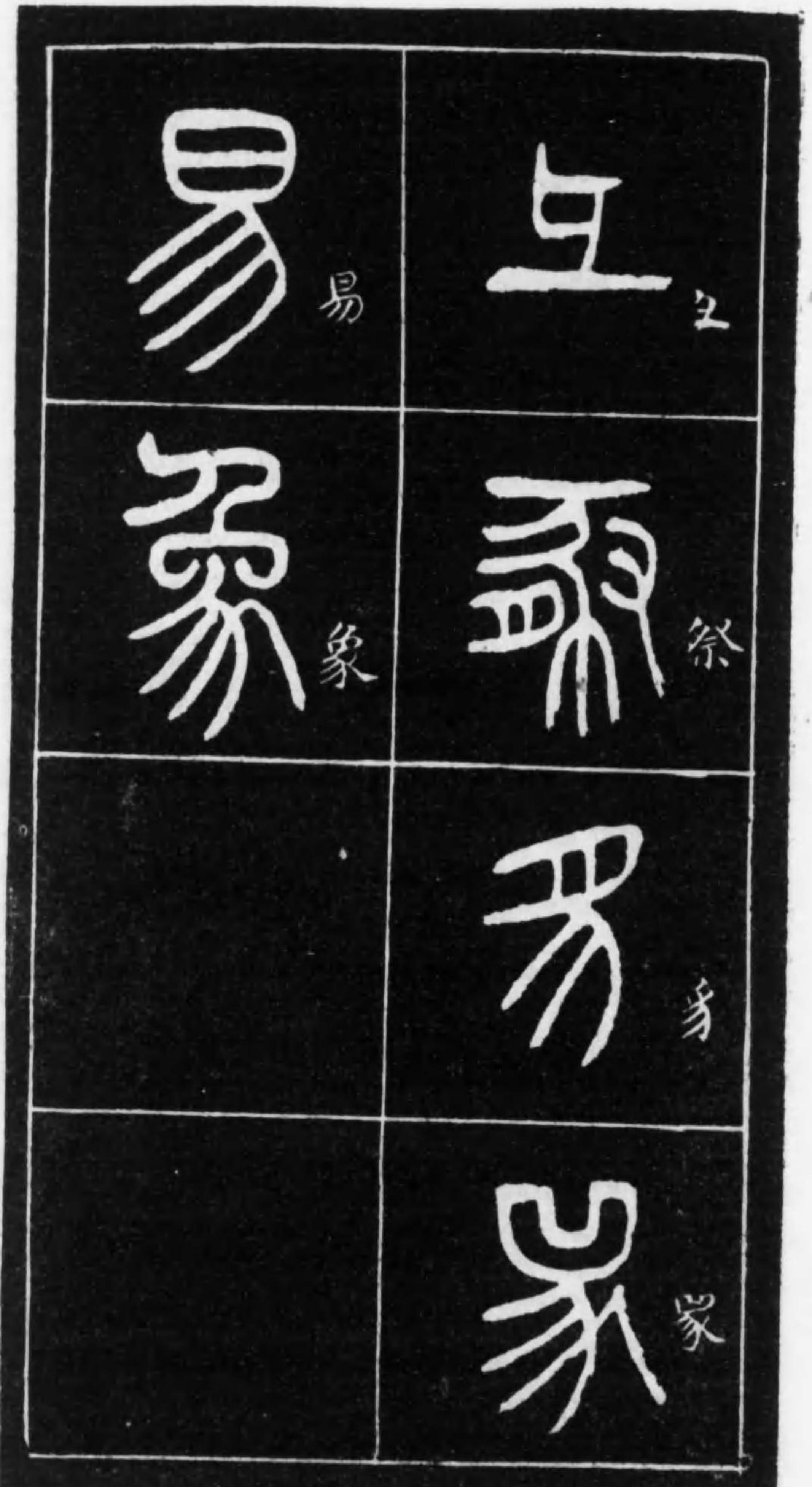
二六



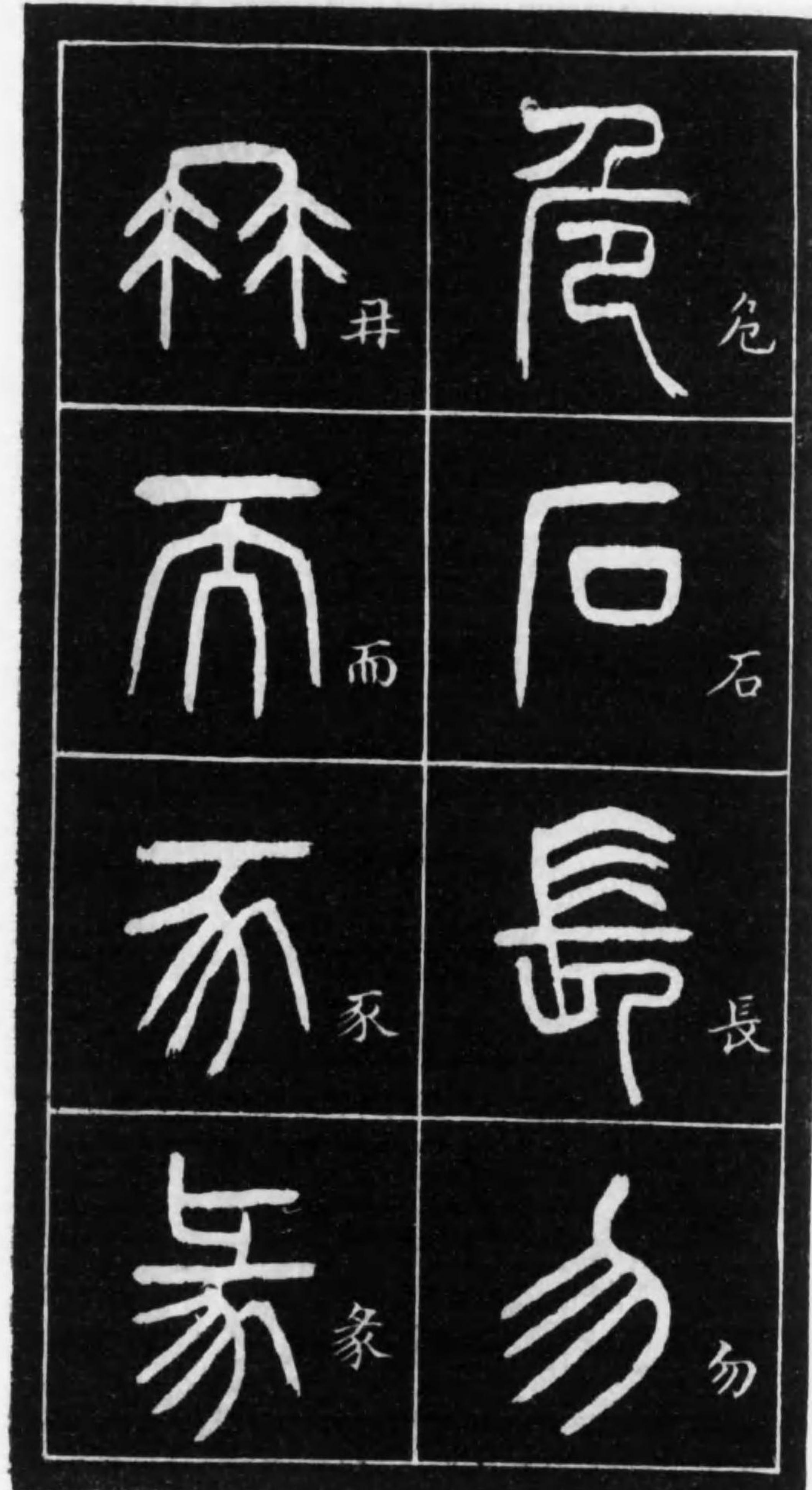


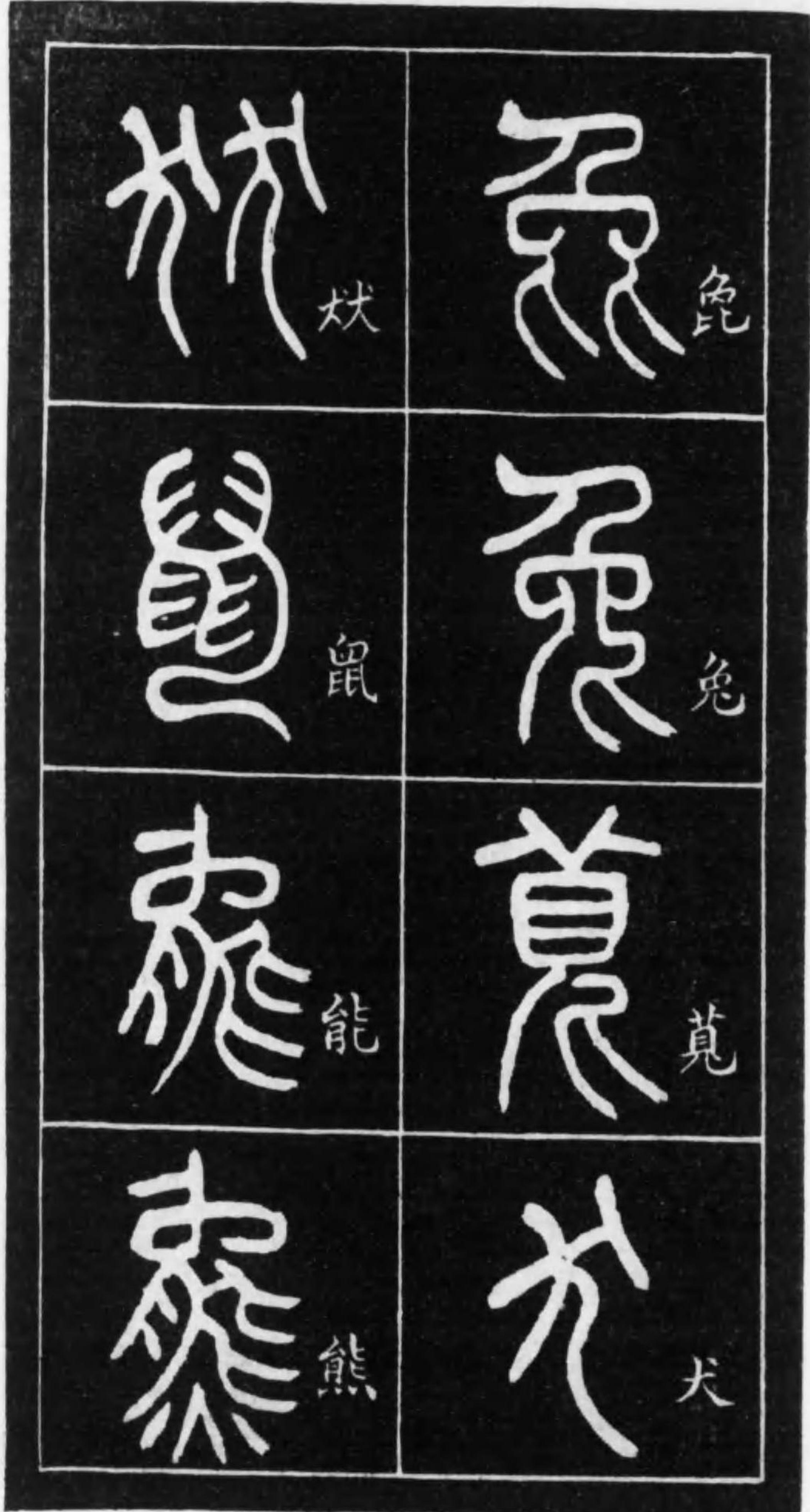
二七



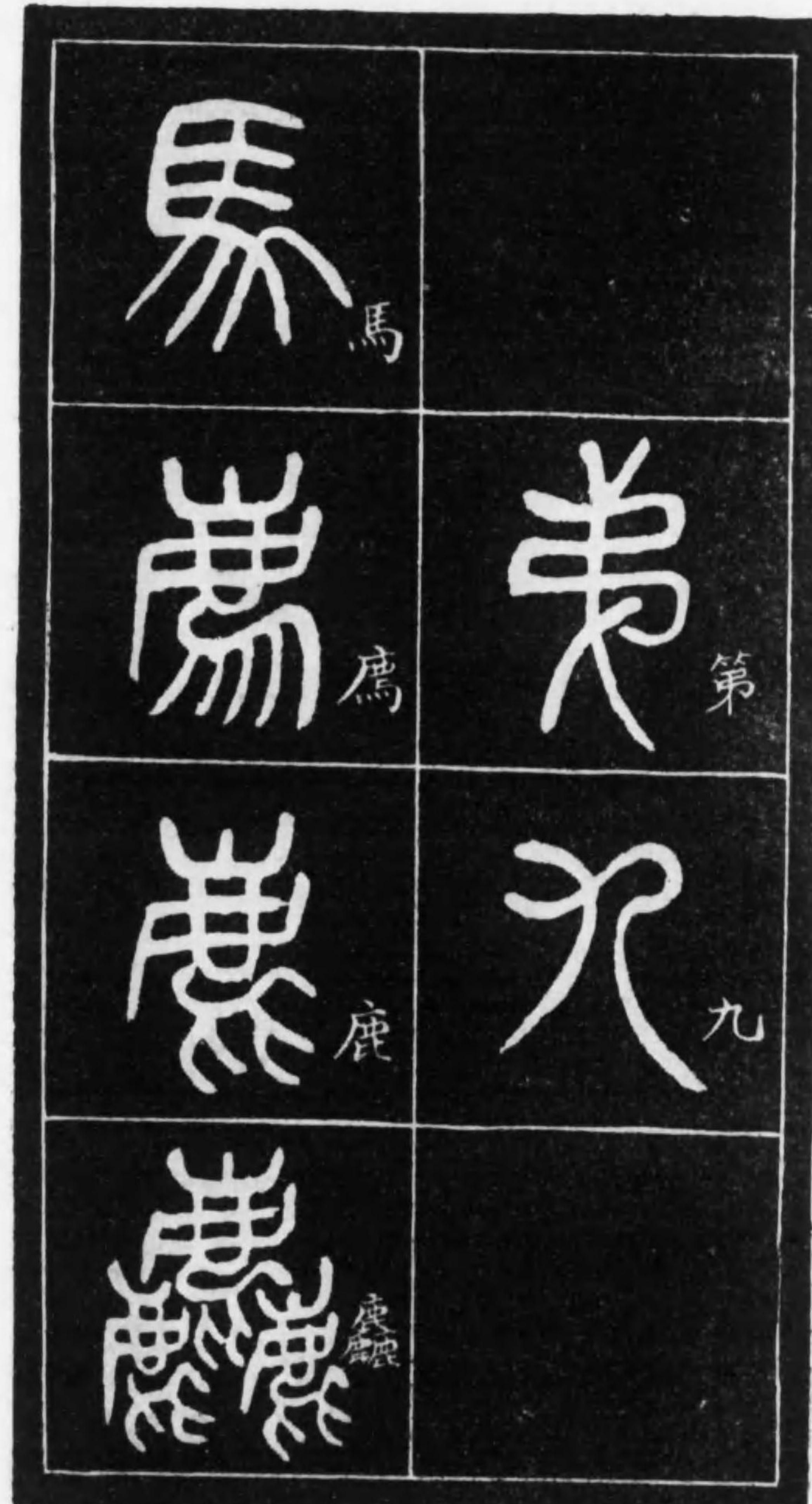


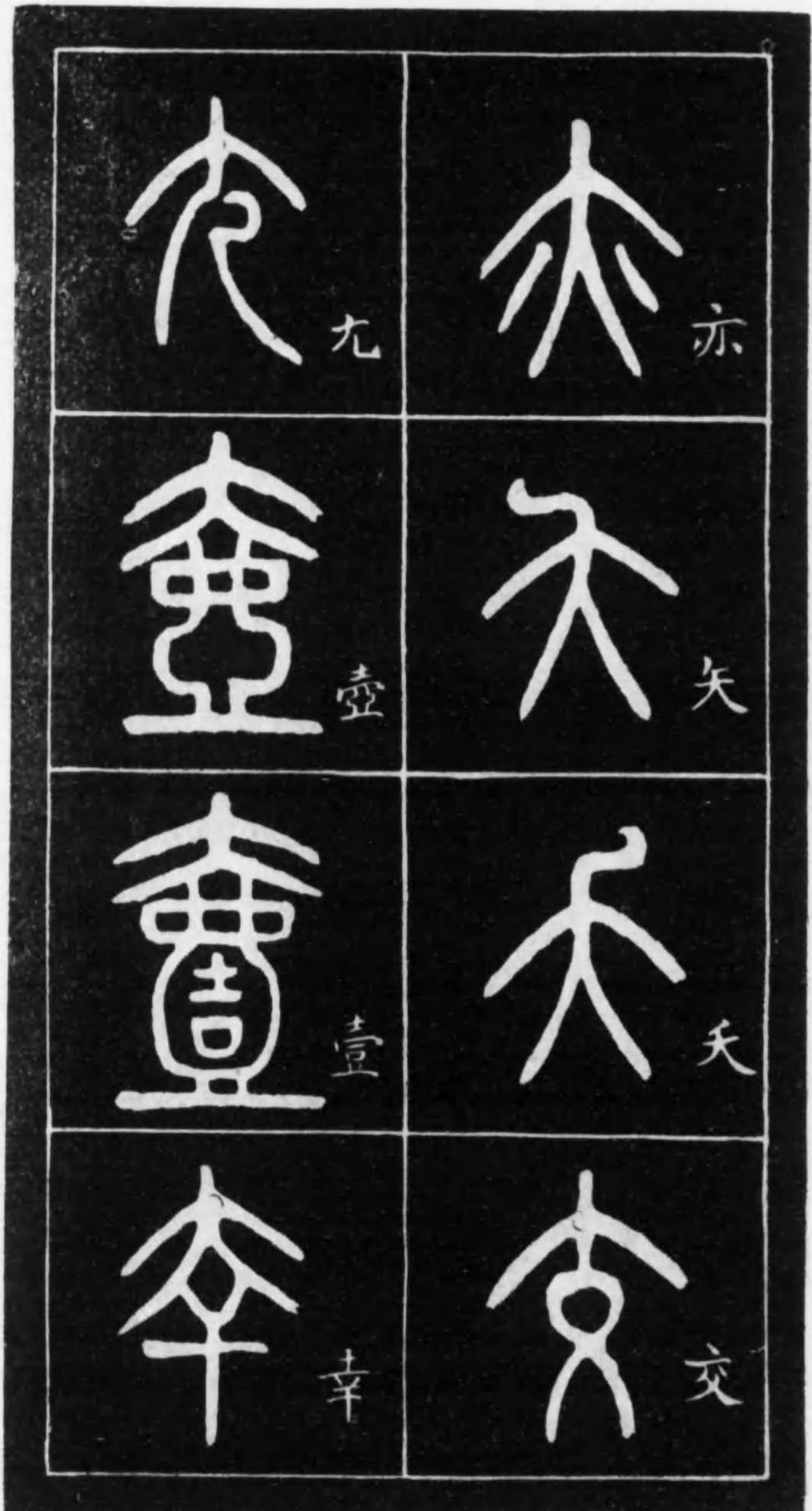
二八



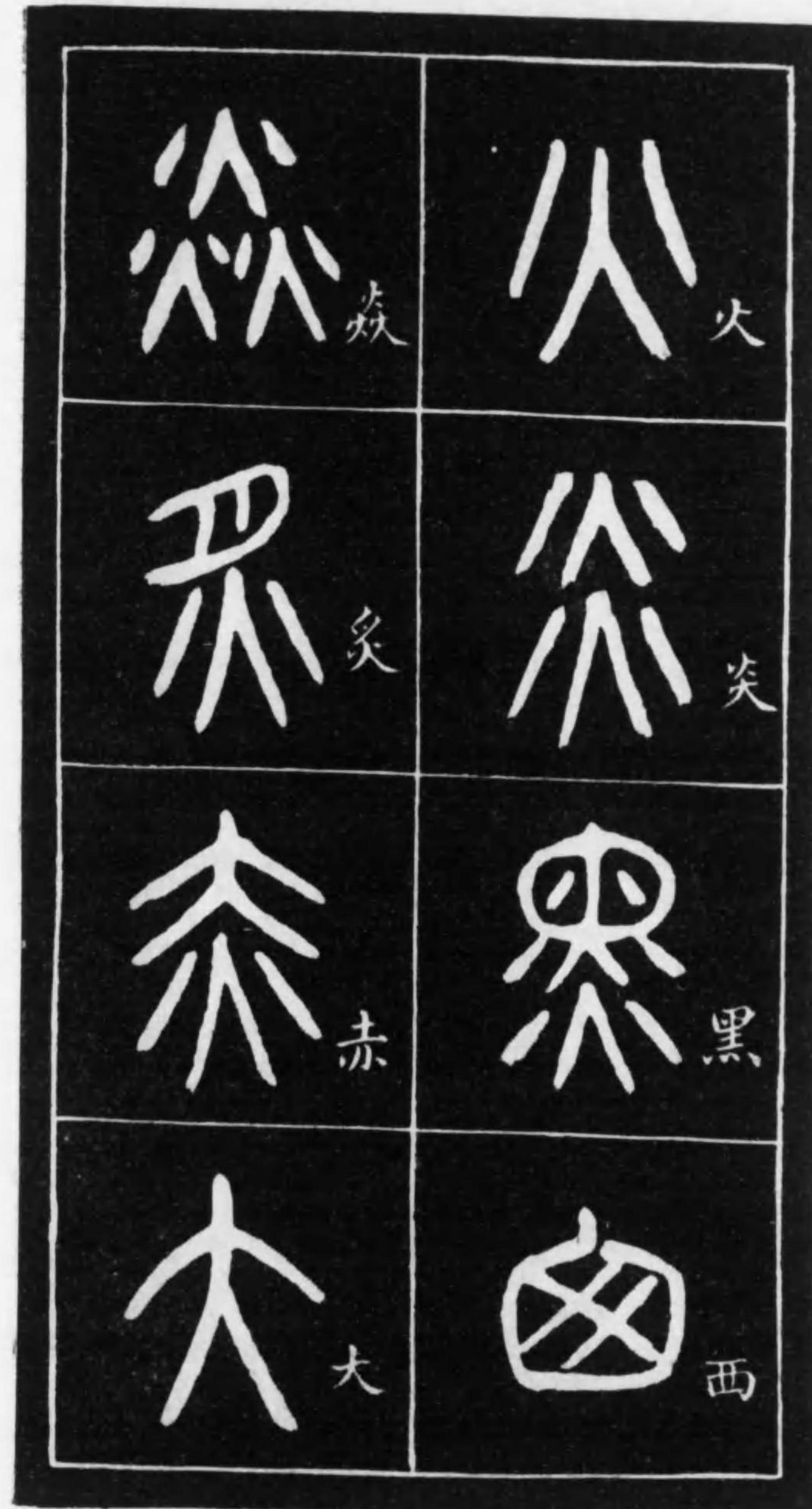


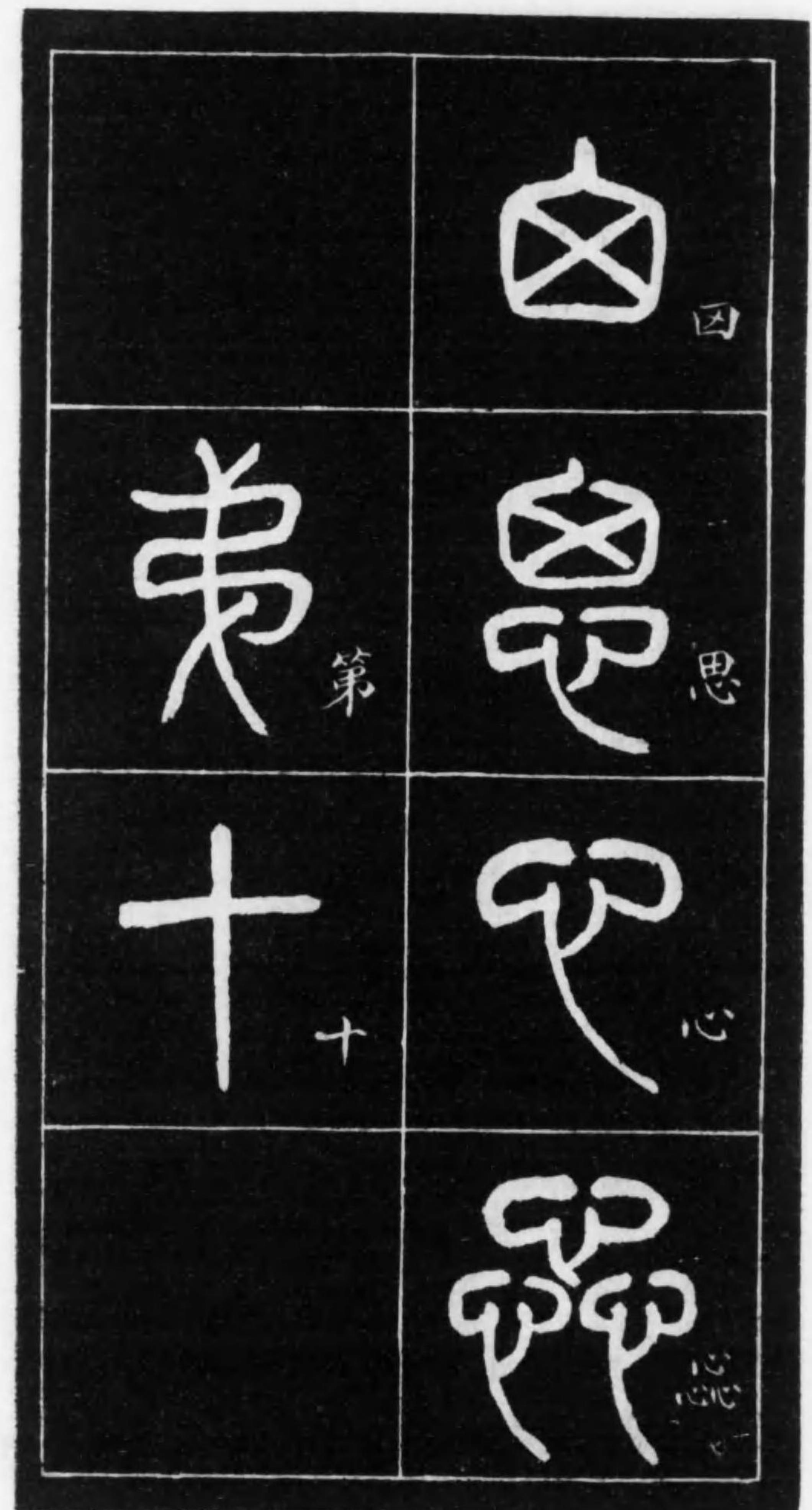
二九



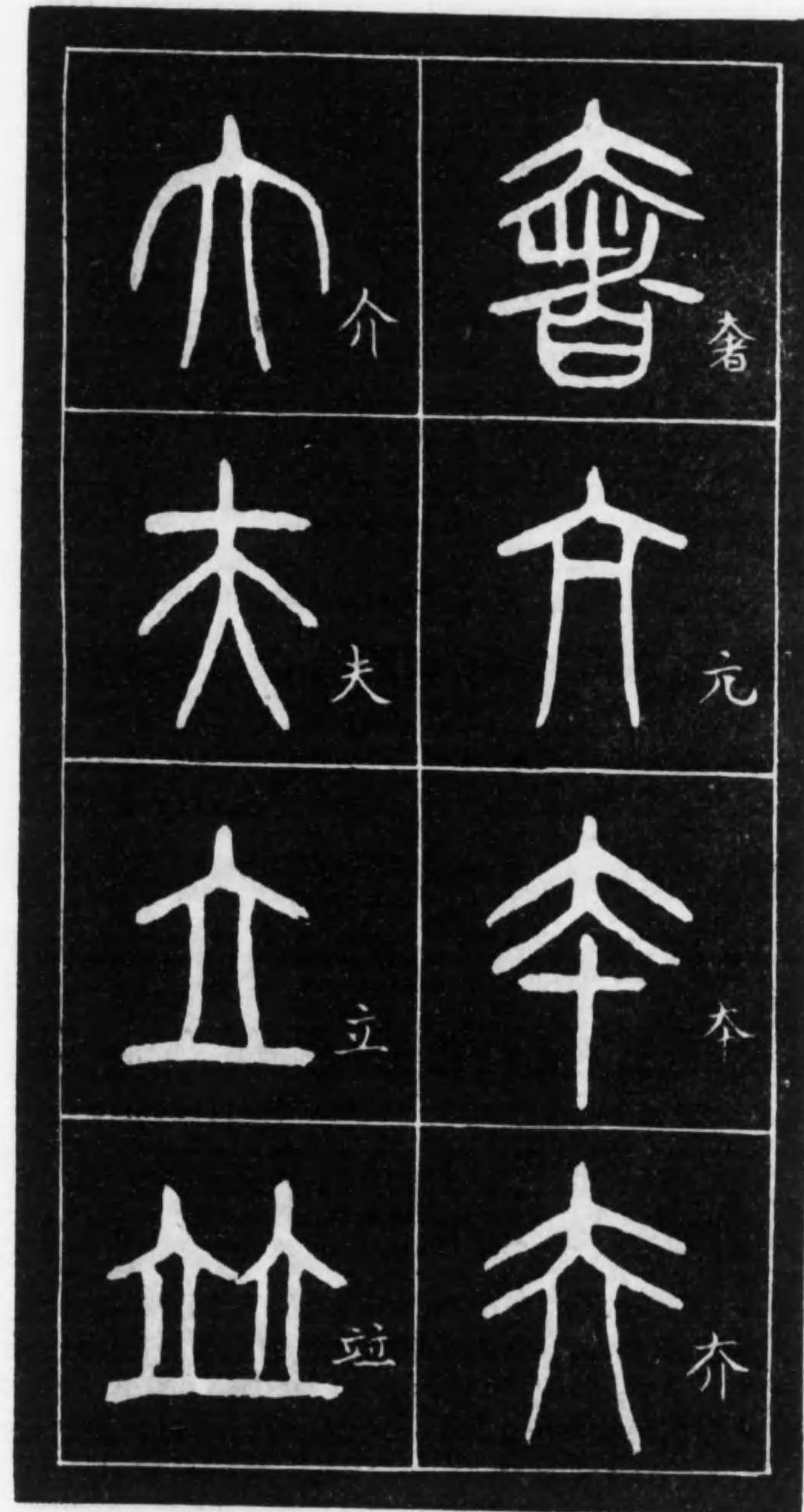


三〇





三一



凡

平

燕

燕

龍

龍

飛

飛

非

非

三

氵

水

氵

水

氵

水

氵

水

泉

泉

頸

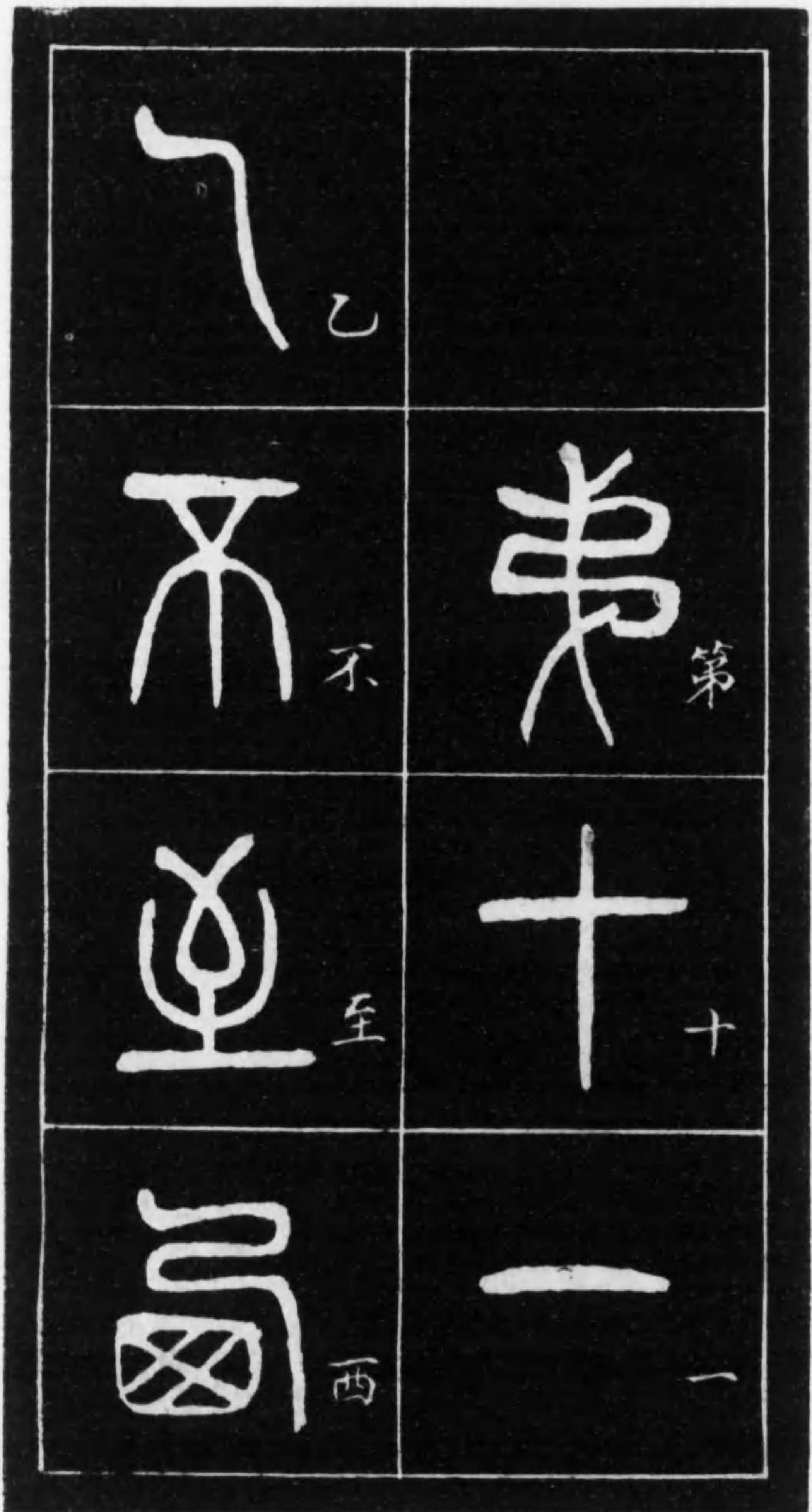
頸

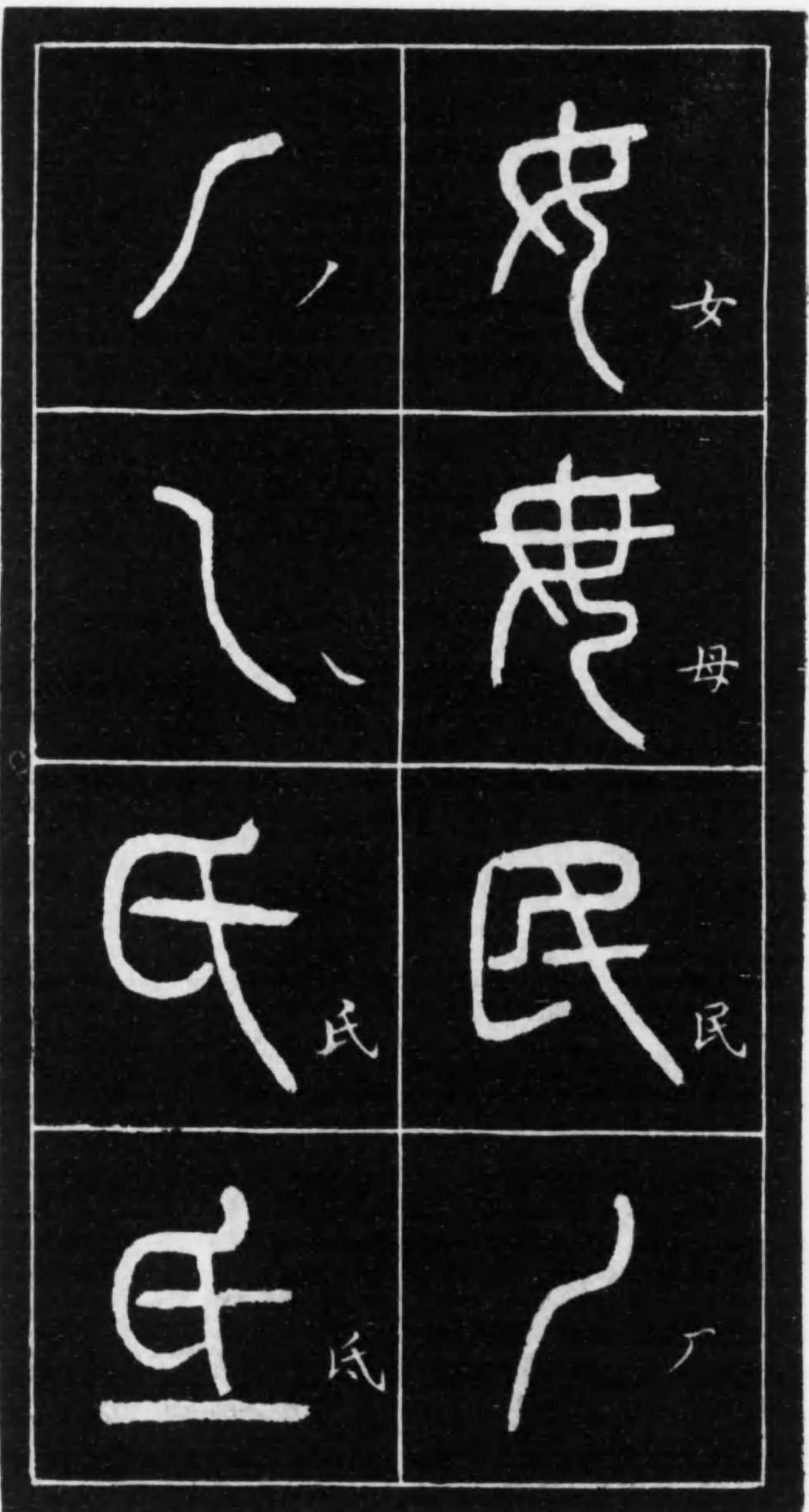
泉

泉

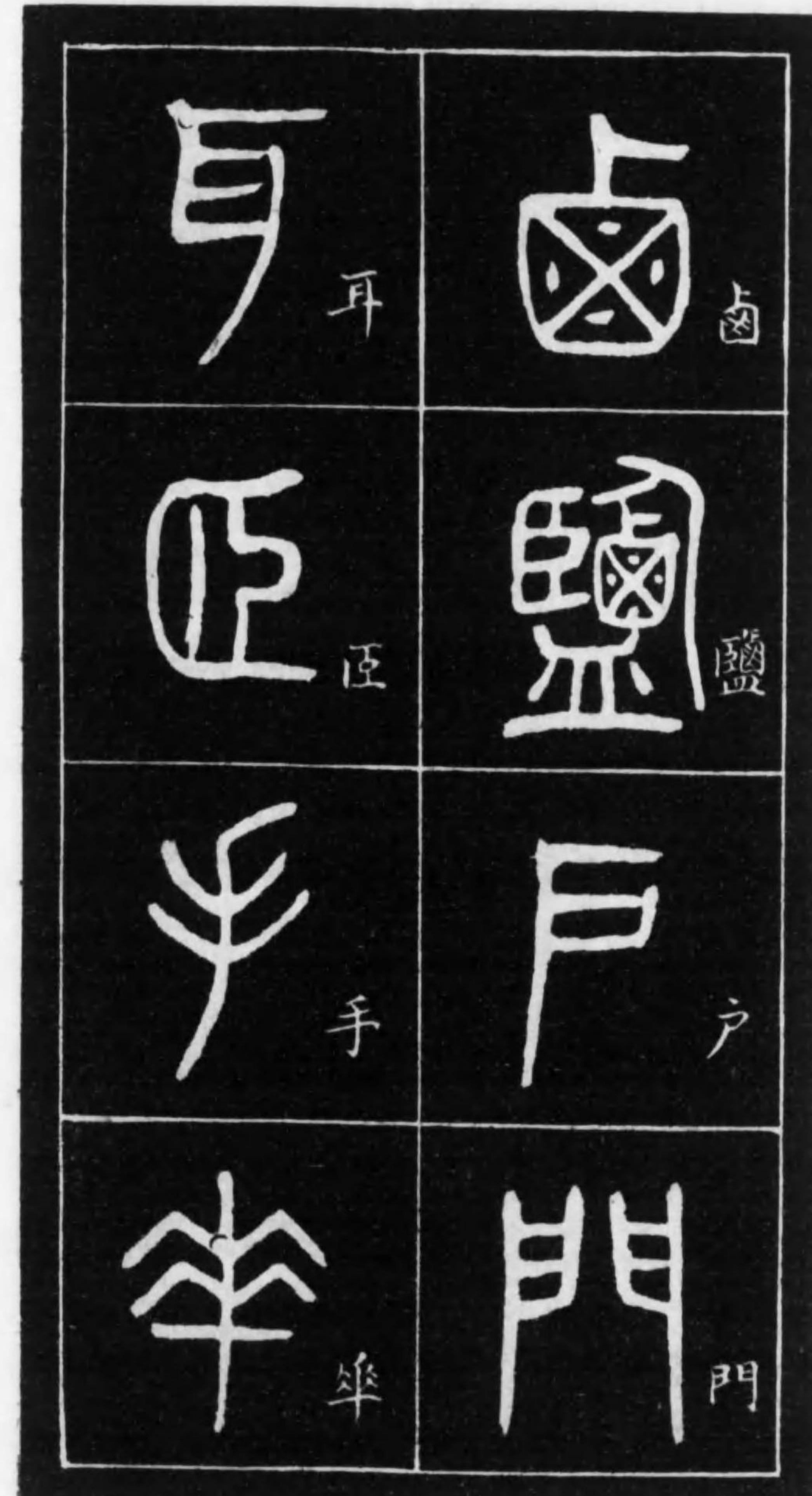
氵

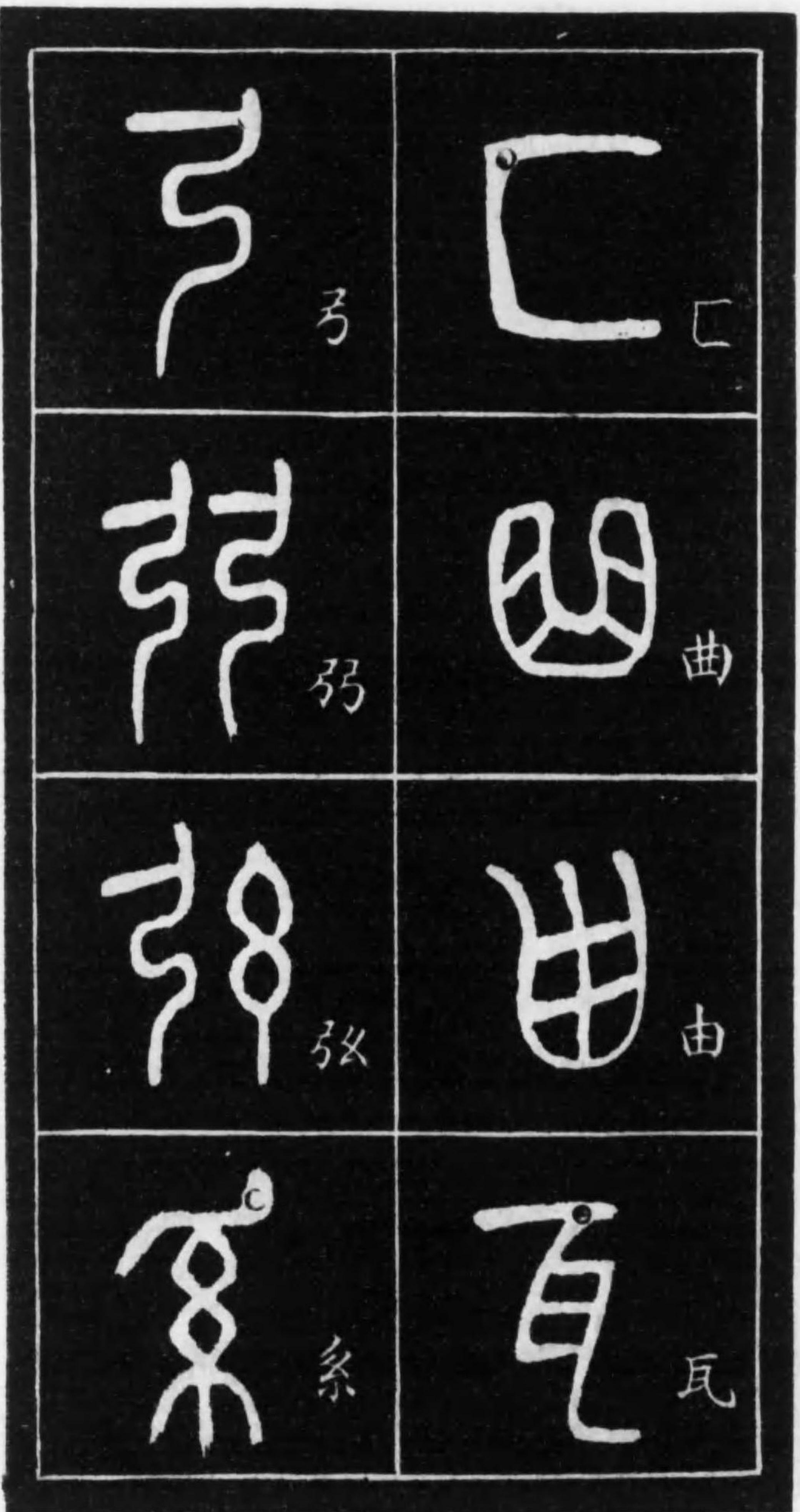
氵



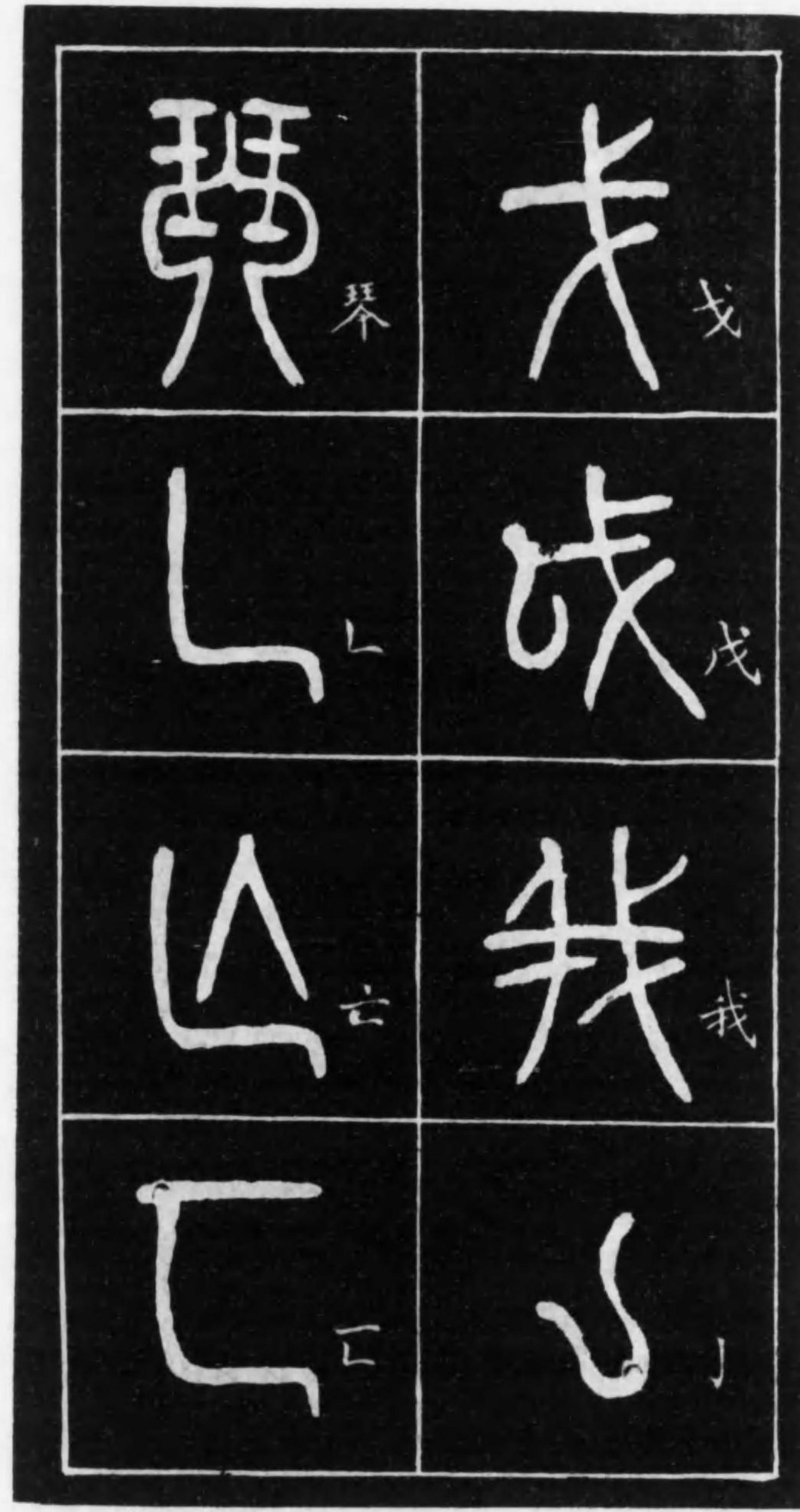


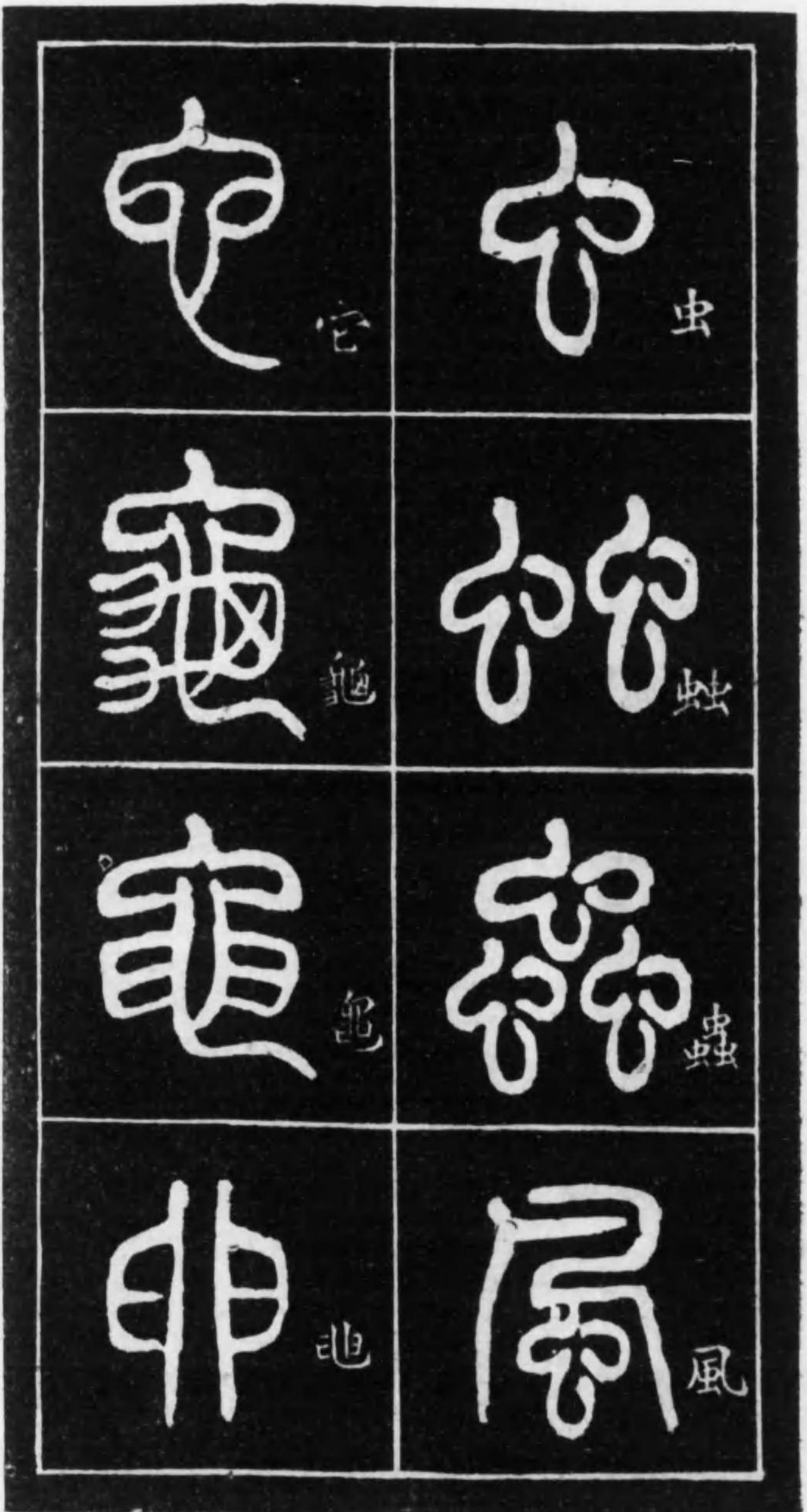
四三



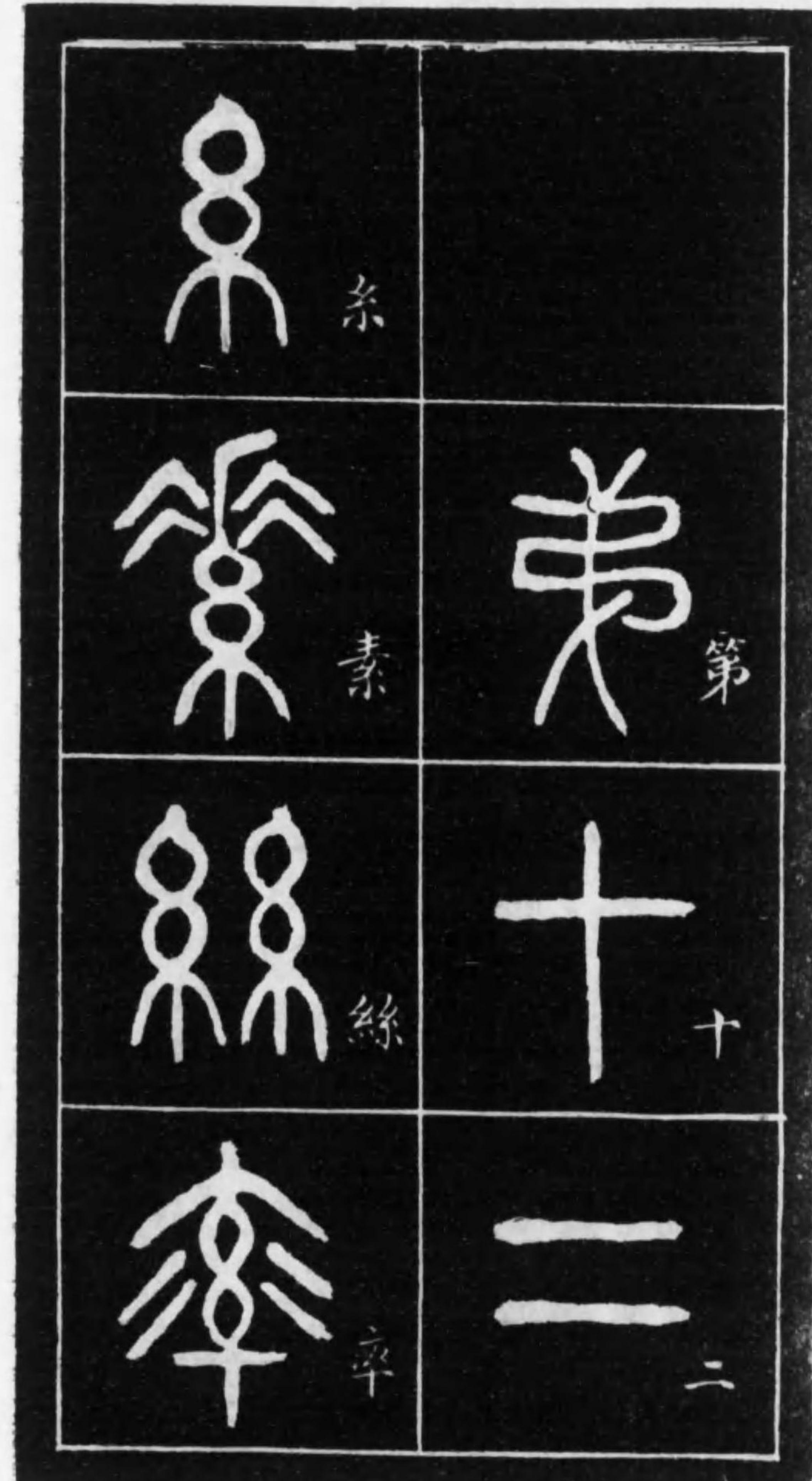


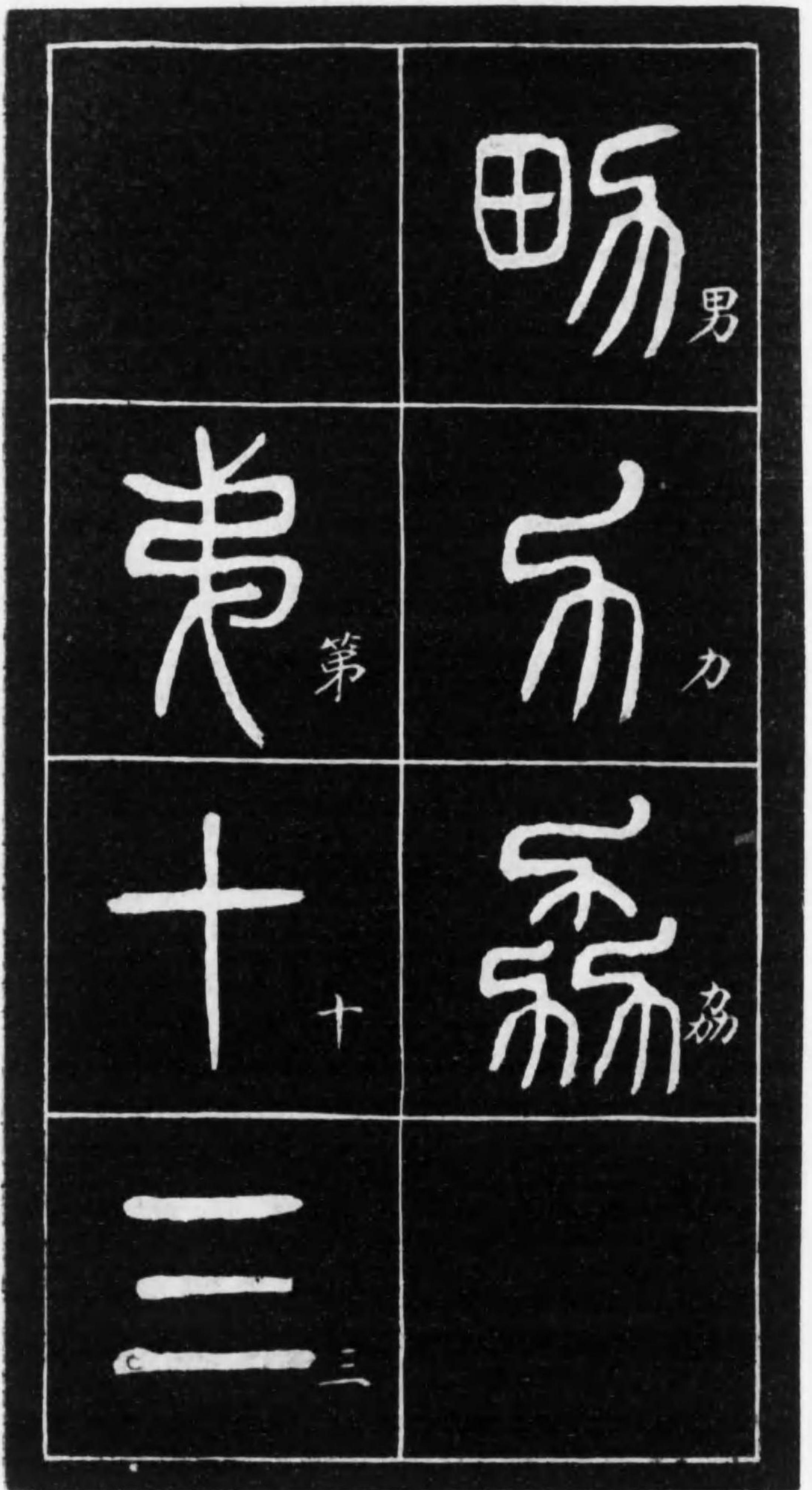
三五



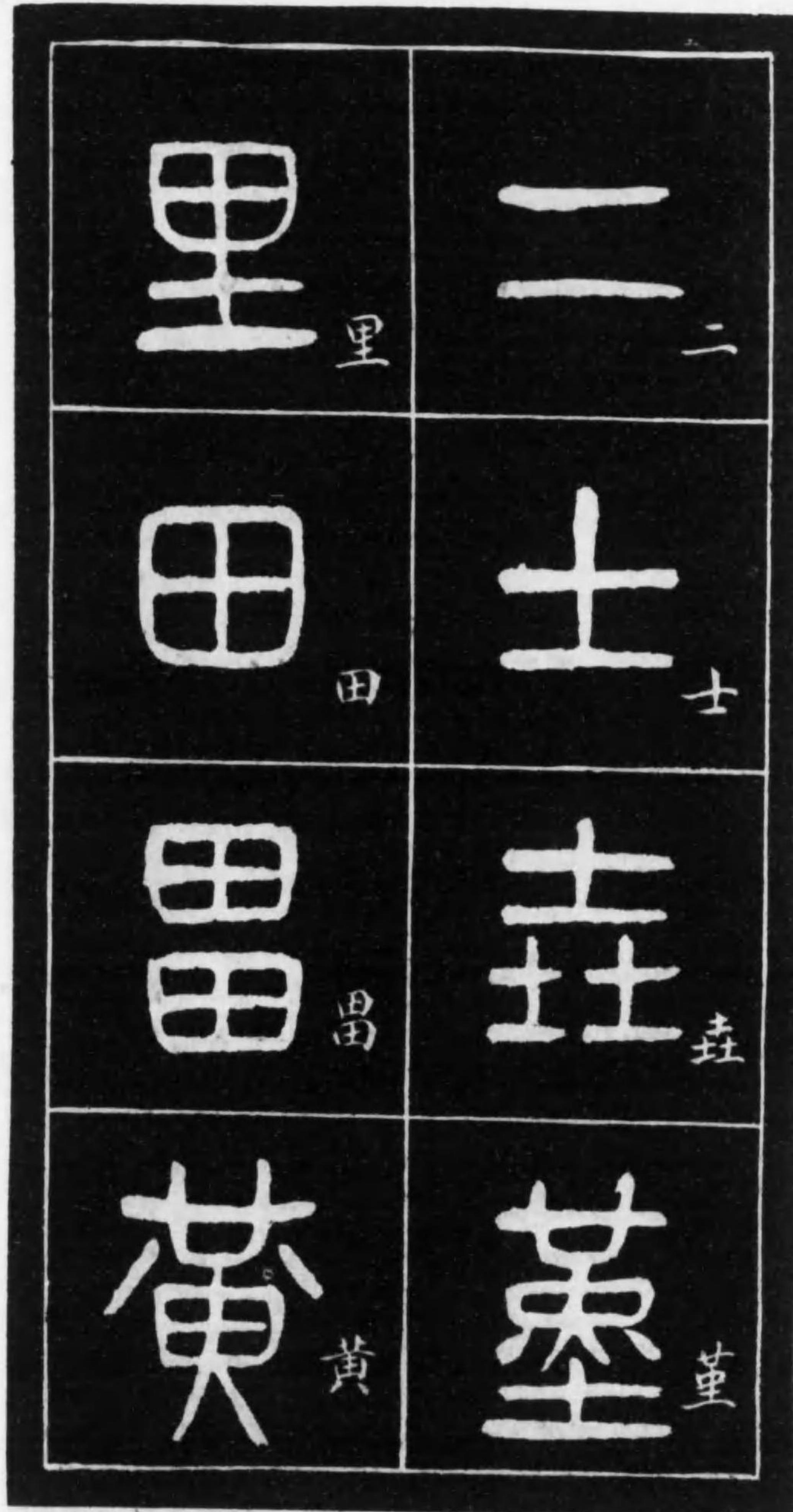


三六





三七



董

品

𠂔

車

車

四

四

自

自

𠂔

𠂔

龜

龜

火

火

館

館

旦

旦

金

金

斤

斤

升

升

手

手

勺

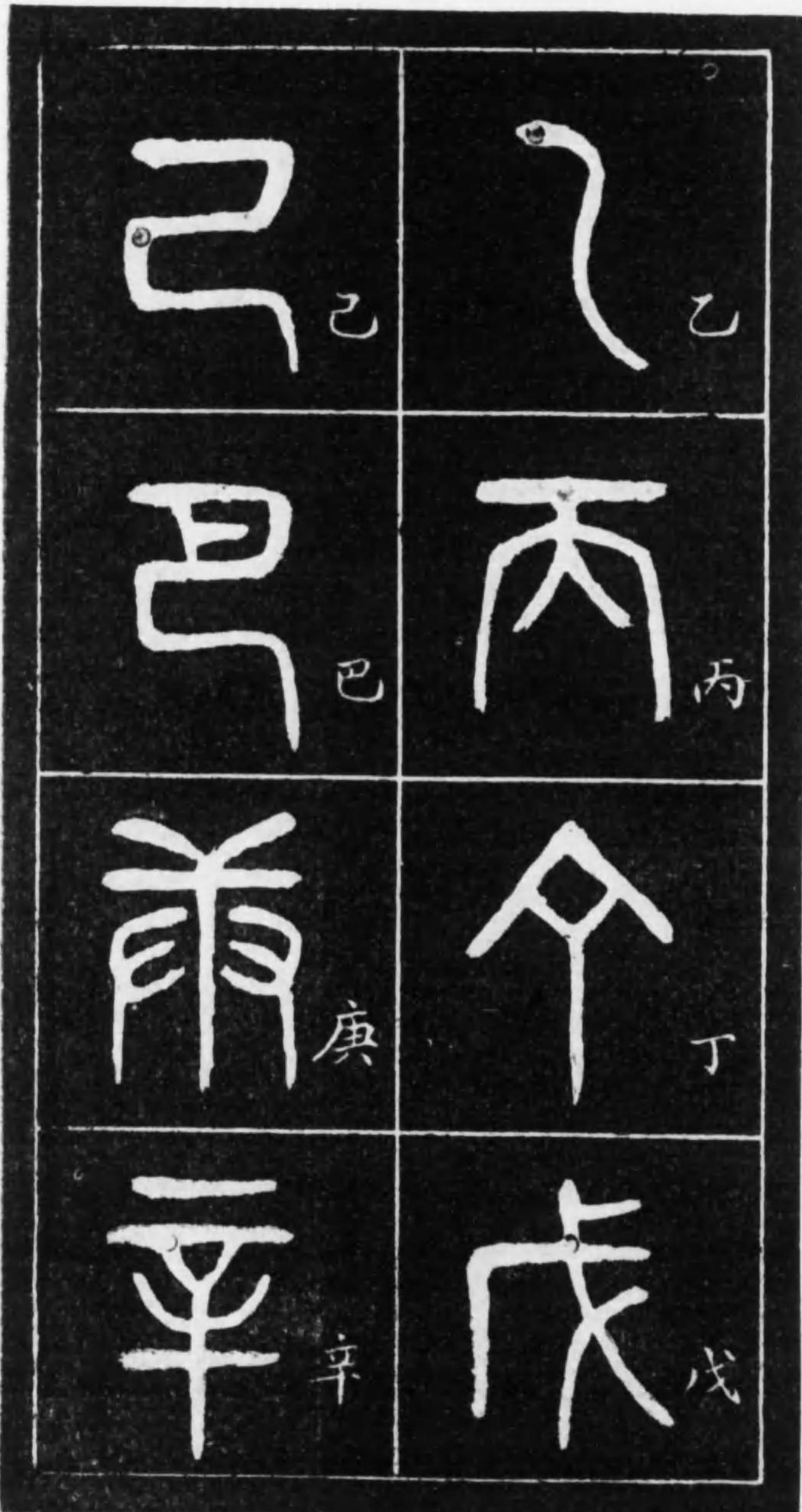
勺

矛

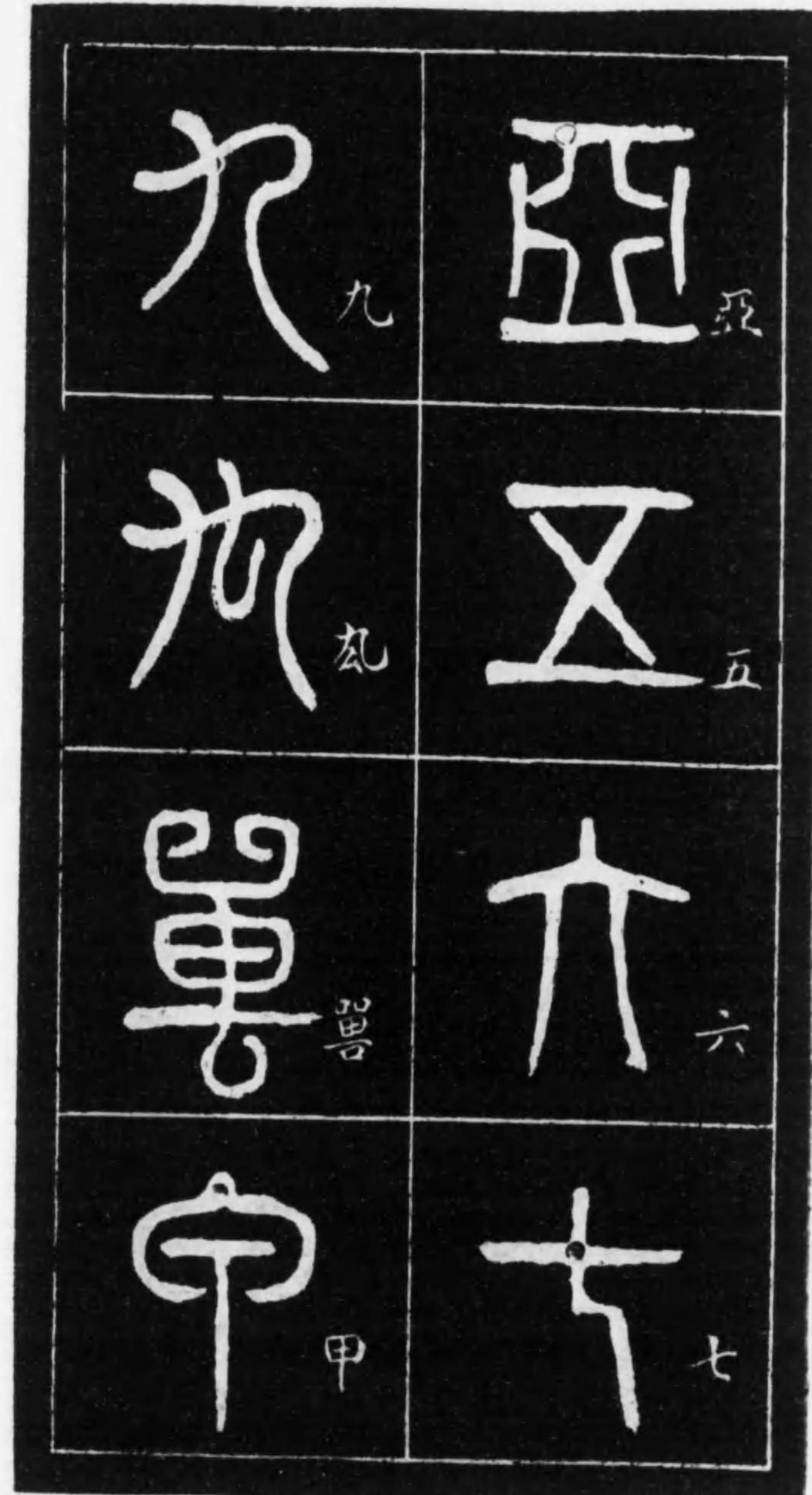
矛

几

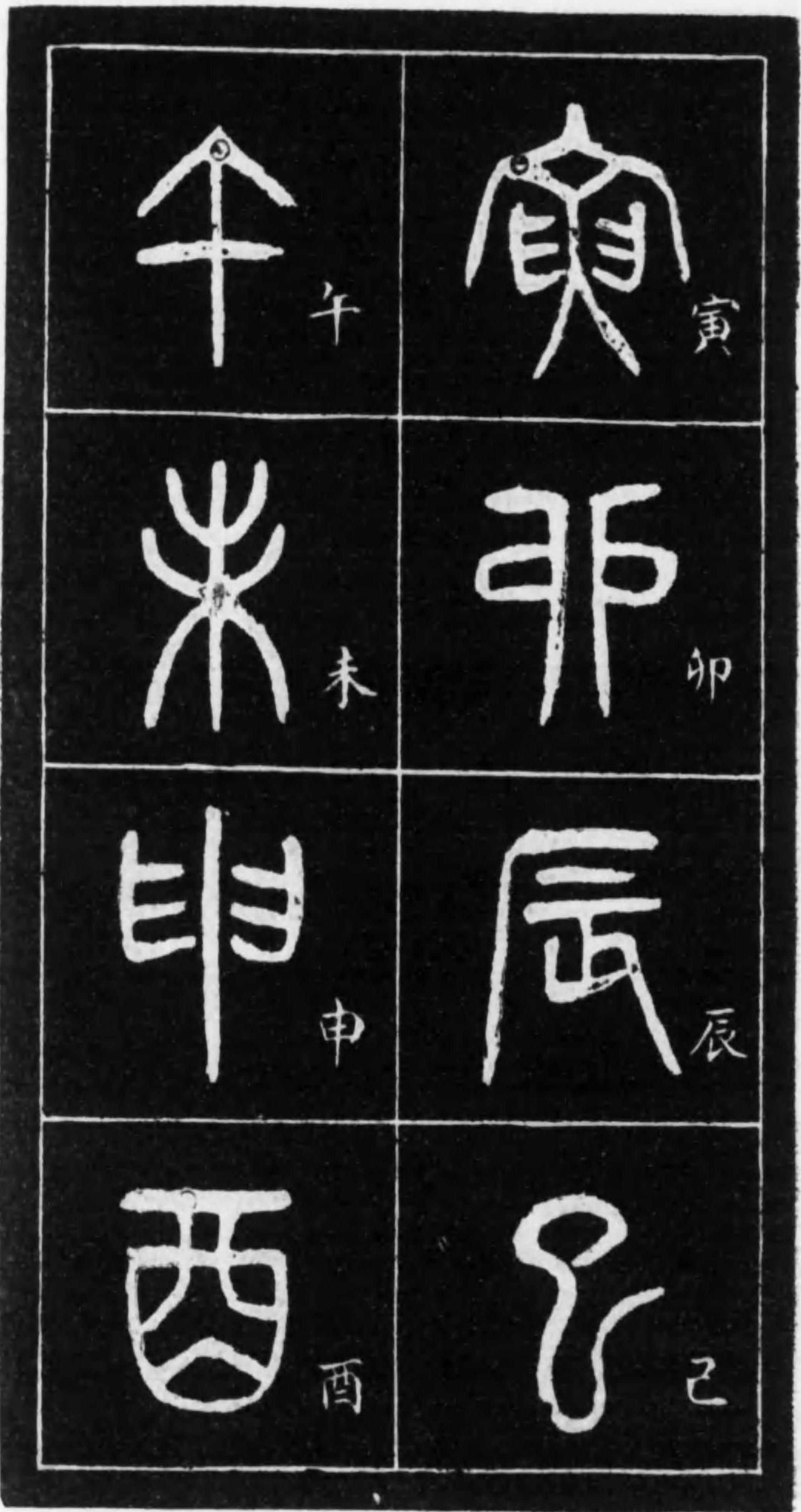
几



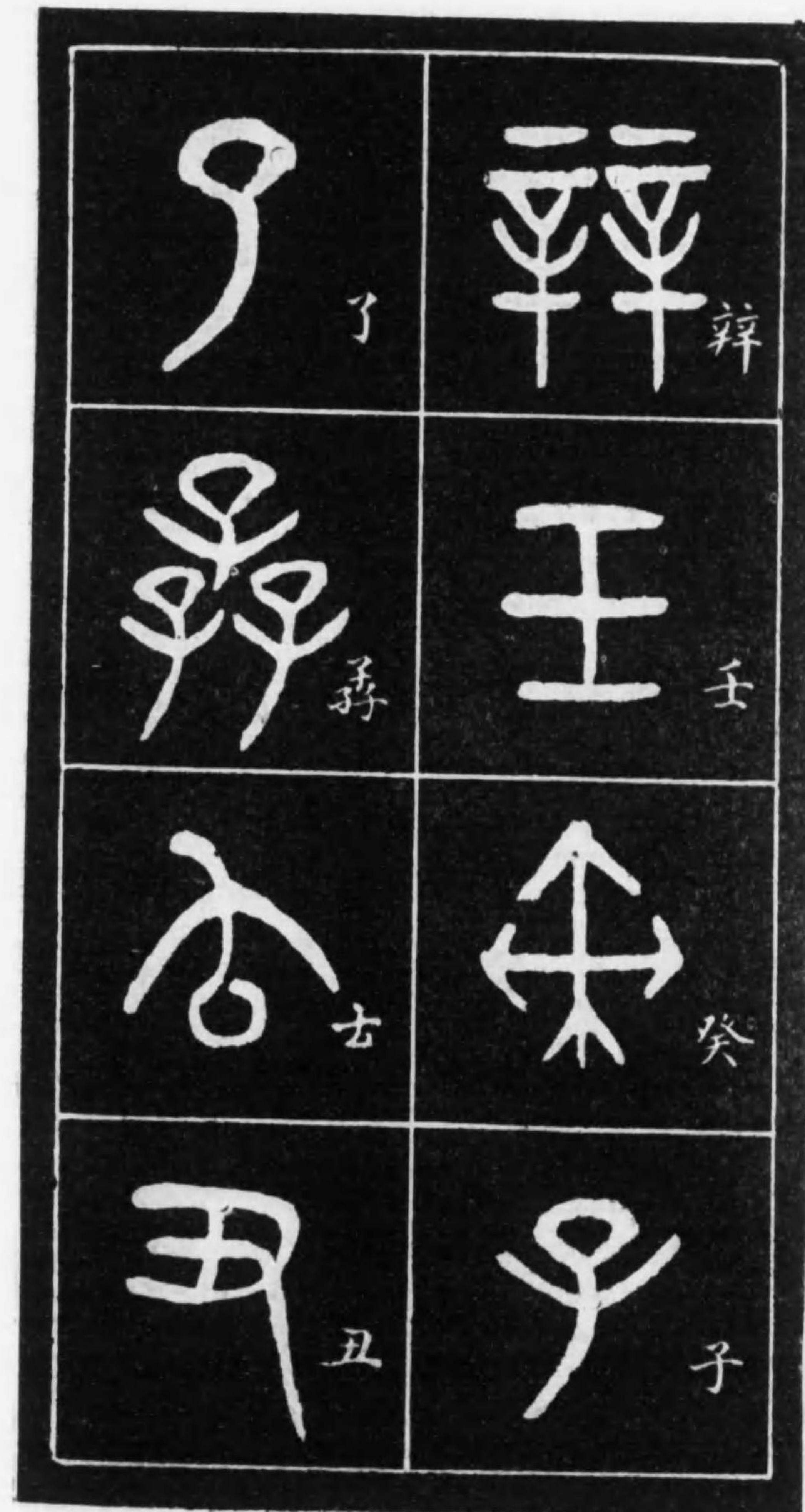
三九



甲



四〇



百	十	此
六	十三	部
十	文	四
三	重	篇
解	一	X
說	千	百
尺	一	X

酉	戌
弟	第
十	十
三	亥

冕	驛	纁	愾
萬	驛	纁	愾
原	引	而	牽
原	引	而	牽
畢	而	不	屬
畢	而	不	屬
終	卯	越	共
終	卯	越	共
於	止	據	理
於	止	據	理
而	亡	形	相
亥	亡	形	相
知	肉	系	貫
知	肉	系	貫

四二

頤	屯	三十	十
歸	大	三十一	十三
物	一	一	九
口	屮	字	三
羣	糸	甘	子
𠂔	𠂔	𠂔	子
𠂔	𠂔	𠂔	子
𠂔	𠂔	𠂔	百

里	傳	繆	業
之	傳	繆	業
季	寧	噴	範
年	寧	噴	範
孟	在	在	猶
	在	在	猶
朗	永	隱	學
辰	永	隱	學
里	元	厥	士
之	元	厥	士
刃	困	醜	知
月	困	醜	知
初	頓	可	矢
朔	頓	可	矢

四二

祁	啻	聖	水
被	啻	聖	化
擇	獮	德	廟
譯	獮	德	廟
涇	崇	熙	冥
屋	崇	熙	冥
洮	鵠	明	于
殷	鵠	明	于
洮	雨	暭	時
行	雨	暭	時
洮	雨	天	大
雨	雨	天	大
廣	爾	穠	溼
歲	爾	穠	溼

聖	覲	自	侯
聖	湖	自	候
門	竊	捐	于
門	竊	波	于
其	印	祖	許
其	印	祖	許
宏	景	召	世
宏	景	召	世
如	行	宇	祚
如	行	宇	祚
何	最	此	遺
何	最	此	遺
節	涉	波	靈
節	涉	波	靈

四

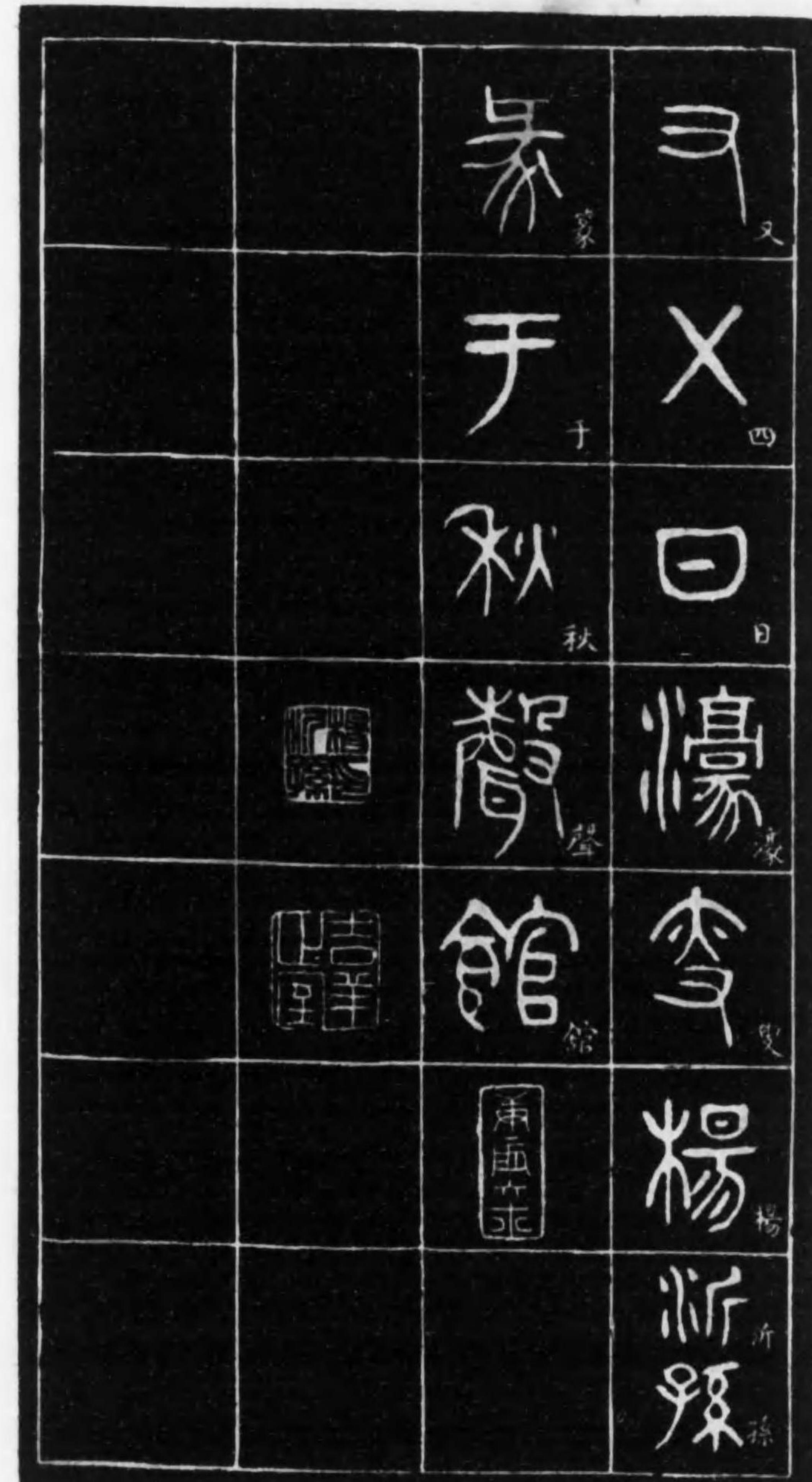
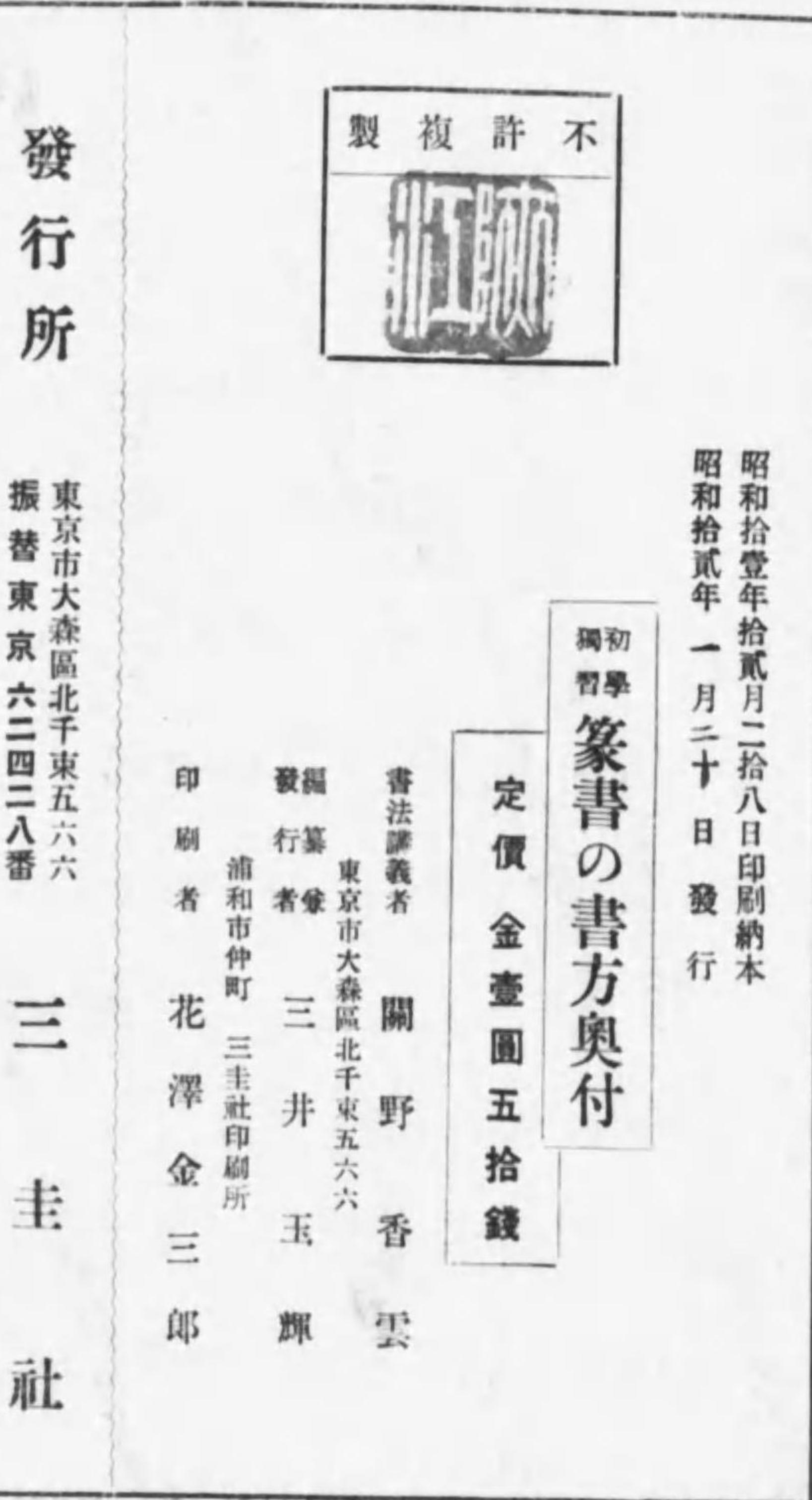
左	黃	祖	日
夏	共	自	甲
呂	水	父	申
叔	高	祿	曾
作	辛	繙	曾
藩	大	雲	小
俾	相	子	子

兌	之	庶	此
縕		彑	譽
秉	庚	諱	達
貯	辰	譽	廩
𠂔	八	理	昭
月		而	所
廿		董	允

四五

其	味	既	微
志	聞	竭	南
次	疑	愚	山
列	載	才	歲
微	竊	惜	罷
解	演	道	不
知	贊	之	能

342
1138



終

